

相の幻妄が生ずるが、此は内面の單一な意識には犯して來ないから、そこではいつも唯一つの本性が現はれる。

現象界の自爾の本性は意志で、その意志には現象以上に統一があり、此の統一は形而上的で、その認識を超絶し、知力の作用に基いて出來るのでなく、本當に之を把握するのは知力だけでは出來ない。そこでこゝには我々が觀望し得るより底の底が開いて、明瞭に又よく整つた聯絡のある見識はその奥に達せず、只箇々の點で眺められるばかりで、物事の關係のこれやあれに、或る時には主觀の方に或る時には客觀の方に認識に上るのみで、それが見えては又新しい問題が現はれるから、それを盡く解釋する事はわしには到底出來ないから、「こゝまでは云ひ得るといふ點」に止めておき、全體に亘つて解決を與へるよりも寧ろ間違つた事や勝手の思ひつきを出さないやうにしやう。

第八章 終局原因について

有機物の組織に不盡に目的に適つた事のあるのを觀測しては、驚いて嘆美せざるを得ないが、この驚嘆は根本では自然であるが、而かも間違つた豫定をして居るから生ずるので、その局部が相互の間にも、亦體制の全體とその外界に處する目的とに能く適合して居るのを、認識に依つて、現識の方から會得し判定して、その適合は此と同じ方から來たとするから出る、即ち知力に對して存在して居るものは、又知力に依つて生じて來たとするから事起る。現識は二次的に起つて來たもので、天然には現識はないから、目的に適つて、一見しては思慮で出來て居る様なものを作り出すにも、思慮もなく、目的といふ概念もなしにする。先づ第一には目的に適つた方をおいて、規則正しい方だけを觀やう。雪片には六つ同じ半徑が出て、それが同じ角度を保つて居るが、それは認識で前以て測つたものではなく、本元の意志の努力であるのみで、認識が出て後には、認識に對してその様

に見える。意志は、こゝでは數學を用ひないで、この規則正しい圖式を作り出すが、それと同じく生理學なしに有機體、特に目的によく適つた有機の圖式を作る。有機體制が目的に適つて居るのは、認識の作用をする理性に對してさうなので、その思慮は目的と手段といふ概念に結びついた事である。若し我々が天然の働きを直接に看破し得るなら、この終局目的についての驚きは、カントが可笑味の説明に用ひた野蠻人の驚きに似て、ビール瓶をぬいて泡が留めなしに吹き出すのを見て、その吹き出す事には驚かないで、その様のものをどうして瓶に詰め得たかと驚いたといふが、我々は天然の産物に目的に適つた性のあるのを見て、それが我々に逆り出て來る通りの方法で、天然に這入つたとして居るのである。反復して云ふが、知力は自爾には形而上的で、又不分な意志の行動であつて、この意志が動物といふ現象で發表しては、知力として自分の方式である空間と時間と因果とそれを客觀として會得し、局部とその作用とが多相を呈し差別を見せる様にし、そこでこの根本の統一から出て來る一致と同心との完全さに驚き、或る意味では自分自らの仕事を驚嘆して居るのである。

極めてありふれた昆蟲にしても、何か一つの動物の構造に、言語に絶した無限の巧妙なもののあるのを觀察しては、その驚嘆に沈むが、それから一轉して又考へて見れば、此の様非常に巧妙で極めて複雑な有機體を、天然は日に幾千となく破壊し、動物の欲や人間の我儘など、色々の偶事に之を暴露して、少しも構ひなしに殺すといふ事に思ひ到れば、この亂暴な浪費にも亦驚かせざるを得ない。然るに天然の作は、如何に巧妙でも、少しも苦勞はなく、作を作る意志が直に作品であつて、前にも云つた通り、有機體制はそこにある意志が腦の中に表はれて見える様になつたものである。

有機體の性情は此の様なものであるから、有機の天然全體を觀察するには、各々の局部が目的に適つて居る事を豫定する終局目的觀が十分安全な導きになる、然し形而上の方面で、經驗の出來る以上に天然を説明するに當つては、終局目的觀は、他で確立してある説明の原理を、再度確める補助として用ひられるのみである。例へば、或る動物に目的のない局部のあるのを發見しても、それで直に天然は目的なしにそれを作り、何か戯れとして一時の機嫌でそれを生じたなど推測してはならぬ。アナクサゴラス風に、天然がその仕組

を得たのは、何か他の發意に依つて、それで秩序を得て成り立ち得たのだと假定すれば、その様にも考へ得やうが、有機體制の各々の自爾の本性が、只それ自身の意志のみにあるとすればさうは行かず各々の局部が存在して居のは、その根底にある意志に對して何かの用があり、意志の何かの努力を表はし、又それを實にするためにあり、従つてこの有機體制の維持に何か役に立つものとしなければならぬ。それ故、有機體にあるものは、盡く目的に適つて居るに違ひなく、それ故又、終局原因は有機天然を理會する導きである事は、無機物の理會に作用原因が導きになると同じである。

有機天然には目的性の法則が貫徹しては居るが、實際それに取り除けのあるのを見て、兎に角驚く事もあるが、然しそれには何か他の譯があるので、「取り除けは規則を確める」の場合なのである。此の類の事で、ビバ蛙の蝌斗は他の類の蝌斗の様に泳がないで、母蛙の背に載せられて變形するのに、やはり尾と腮とがあり、——カンガルの雄は、雌では袋を支へる用に立つて居る骨の代わりがあり、——哺乳動物の雄には乳頭があり。——鼠の一種には眼はあるが、甚だ小くて外皮に開いた孔なく、皮は毛で蔽はれて居、アペニネ山

中の土籠も同様である。天然の規則はしつかりしてをるに、それに此の様な稀で而かも奇異な取り除けがあつて、天然自らで撞著してをるのは、その現象は様々になつて居るが、現はれて居るものに統があつて、内部に聯絡があるため、一方には實際にある事を、それと聯絡して居る他のものでは、その痕跡だけでも示しておく要があるからである。そこで雌の方には事實存して居る機關の痕跡を雄も持つて居る。即ちこの場合には、兩性の別のために種の型を廢しないのであるが、それと同じ様に一族全體、例へば兩棲類の型は、その一種では用がなく餘分になつた場合にも、尙残つて居る。又根本の類全體（脊椎動物）の型について居る事（眼）が、その一種では餘計で亡くなるべき場合にも、天然はそれを全く消滅せしめ得ないで、その類全體で作り上げておいた事を、少くとも不用機關に痕跡を示しておく。

骨格の同類型といふ事があつて、哺乳動物の中、又弘くいへば總ての脊椎動物の間に骨格の類性があるが、此の事は特にオーエンがその「比較骨格學」に詳しく述べて居るが、此も亦先のと同じ關係であつて、例へば哺乳動物には盡く頸の脊椎が七つあり、人間の手

と腕との骨は、鯨の鰭尾にその類縁があり、卵の中に居る鳥の頭蓋骨は、人間の胎兒と同じだけの骨で出来て居るなどの事がある。此等は終局目的を離れた原理に基いて居るが、而かも終局目的で物を作り上げ、又前以て揃つて居る材料をその仕事に使ふべき基本と同じもの、此は即ち高等動物の間にある「計畫の統一」即ち根本原型で、云はゞ天然がこゝに樂を奏するために任意に撰むだ音律ともいへる。

作用原因と終局原因との區別はアリストテレースがよく云ひ表はして居る「原因の様式に二あり、一は目的より出で、一は必然より出づ、この兩者はなし得る限り分別するを要す」。作用原因はそれに依つて物が存在する原因、終局原因はそのために物がある原因で、それに依つて説明すべき現象は時間で云へば作用原因を後にし、終局原因を前にする。只動物の發意行爲では、この二つは直接に合體して、目的である終局原因は動機として現はれる、但し本當の意味で行爲の眞實の原因になるのは動機で、此はどこまでも作用原因、即ち行爲に先つて出で之を呼び起す變化、それあるが故に行爲は必然に生じ、それなければ起り得ないものである。意志行動と身體の運動との間に、生理上何事が挿まり得るにし

ても、ここで動くものはいつても必ず意志である事は明かで、而して意志を動かすのは、外から來る動機、即ち終局原因であるが、それがこゝでは作用原因として現はれて來るのである。その上、身體の運動は、根本では意志行動と一つで、之を腦中の直觀として現象になつたのが身體の運動である。意志行動は自己に親密に知れて居る唯一の現象であつて、此がどこまでも我々自らの本元現象であるが、こゝでは終局原因と作用原因とが一つになるのは大切な事、少くとも有機の天然では、之を知るには終局原因を導きにすべきで、意志はそれを作り上げるものになつて居る。要するに終局原因といふ事を明晰に考へるには、見當をつける目的、即ち動機として考へる外ない。天然の中で終局原因を精細に觀測して、その超絶的本性を云ひ表はすためには、矛盾を嫌はずに、大膽にかういふはなければならぬ、即ち終局原因とは生物の上に働きかける動機であるが、生物自らは之を認識して居ないものである。

有機の天然を探索する場合には、どこまでも終局原因に依らなければならず、どこにもこれを求めて、それに依つて一切を説明しなければならぬのも、要するに意志が一つであ

るため、その反對に、作用原因は下位の方面で、只終局原因の道具たるに過ぎず、身體四肢の發意運動は、外部から來る動機に動かされるのは明かであるが、作用原因はこの運動で示されるといふよりも、その中に已に含まれて居る。生理上の作用を説明するには、その作用原因を求めるが、多くはその目的を達せず、局部の成立を説明するになれば、最早それを求めないで、終局原因だけで満足する、此の場合に我々が知り得るのは大體の原則のみで、局部が強くなるに應じて、それに血液を送る動脈も大きくならなければならぬといふ位の事に止まり、それから進むで、眼とか耳とか、腦髓とかを作り出した作用原因の何たるに至つては、少しも知り得ない。

黒人のしらみは黒い。終局原因は、自分の安全のため。作用原因は、黒人の黒いマルビギ組織を營養にして居るから。——熱帯の鳥類の羽翼は非常に様々で、又燃え立つ様な活き／＼した色をして居る、それは作用原因である。その終局原因として、わしはかういふ提出をする、即ち光彩のある羽翼は、云々晴れ衣裳で、この地方には同族の鳥が非常に多いから、その中で同種のものが互に認別する役に立つて、それで雄は雌を見附ける様にな

る。緯度の違ふ諸地帯に居る蝶に關しても同様である。——結核性の婦人は、その病患の後期には懷妊し易く、懷妊中は病氣が折れ合ふが、分娩の後には復激しくなつて、大抵は死ぬ、それと同じ様に、結核性の男はその晩年に尙子供を生む。天然はどこにも種の保存には苦心して配慮するもので、こゝでは年は尙壯でも、凋落の近いた個人のために、急いで新しい代はりを作る、此がその終局原因である、それに對して作用原因は、結核の後期には、神経系統が非常に興奮した状態になるにある。此と同じ終局原因で説明すべき類縁の現象で、砒素の毒に中つた蠅は、どういふ衝動でか分からないが、尙一度交尾して、尾交中に死ぬ男女共に陰毛があり、并に女に陰丘があるのは、その終局原因は、瘡せた人間では交接の際、互に耻骨にさはつてはいやな感がするのを防ぐためであり、作用原因は、粘膜から外皮に移る處には、どこにもその近邊に毛が生へるためであらう、尙又そこに毛のあるのは、腦髓と生殖器とは或る度まで相反した兩極であるため、二者互に交渉と類縁とがあるためともいへやう。

第九章 本能と工作衝動

生物はそれを認識せず、又現識もなしに、而かも非常の決断と定性とで何かを目的として働き得るが、その力を此の衝動で最も明晰に見せて居る。鳥が巢を作り、蜘蛛が巢を張り、蟻地獄が穴を掘り、蜂が巧に巢房を作り、白蟻が驚くべき蟻の塔を建てるなど、皆これ、少くともその動物の箇々の個體が始めて、その仕事をする場合には衝動であつて、その仕事の出来上つたのも、又その用も、彼等は前に知つて居ない。然し天然が有機體制を生ずるのは此と同じである、そして認識に上らないで働きを表はす動機が即ち終局原因である。そこで工作衝動が働く場合に、その中に働いて居るものは、云ふまでもなく明かに意志であるとすれば、有機天然の働きでも、その中に働くものは實に意志である。

又動物の意志が動くのは、動機か又は本能であり、即ち外か内かで、外の機會か又は内の衝動で動く、而して外から來るものは説明が出来、内のものは説明が出来ない。然し尙

能く觀察すれば、この二つ間の對照は必しも峻別でなくて、根本に於ては度合の違ひに歸着しやう。即ち動機が働くのも、内らに衝突がある所へ働きかけるので、此の内らのものは意志の一般の性能あるもの、即ちその性格であつて、此に對して折々の動機は一定の方向を與へ、——具體の事柄に對して性格の個性を發表させる。本能もやはり、意志が定まつた衝動となつて居るのであるが、その働きは撥條の様に全く内から出るのみでなく、その働きを必然にさせる外部の事情を待つて出、少くともその發表の時刻はこの事情で定まる、陽鳥が時候に従つて居を移すのや、鳥の受精が済むだ後に、丁度巢を作る材料が出て來て、その巢を作るのや、蜂がその巢を作る始めに、籠か又は木の洞があつて、それから後の作業には色々の事情に應ずるのなど、皆此の動機に依る。此等から見れば、工作衝動の仕事には、第一には本能、それから従順ながらその動物の知力が働いて居、本能は一般の方で規律を與へ、知力は特別の方で應用を與へ、その實行の細工を監督して、その動物の仕事が各々の特別な事情に適應する様にする。此等から見れば、只の性格と本能との別は明確で本能といふのはちやんと特別に一定した動機に動かされる性格で、それから出る

行爲はいつも同じ事になつて現はれる、然るに性格は動物の各種や人間各個人の性格として、恒に不變な意志の性情で、而かも様々の動機で動き得て各々それに適應し、従つてそれから出て來る行爲は、その實質の性情に應じて様々に現はれる、それ故、それが事實となつて出る行爲の實質性情は、性格を認識するに、本性に於ては大して關係しない、それ故、本能を説明して、性格が非常に一方に又嚴密に定まつたものといひ得やう。此く見れば、只動機のみで定まつた運動を起すのは、已に或る度まで知力が十分に發達して居るため、それ故、此は高等動物、特に人間には立派に現はれ、その特質になつて居る、それと違つて、本能にも知力は入用であるが、その本能を發表するのみの機會となるべき、ちやんと特別に一定した動機を知覺するに必要なだけでよい、それ故、本能は認識の範圍が餘程限られて居るものにあり、又規則として本能が高度に現はれるのは下等の動物、特に昆蟲に多い。此等の點から見れば、本能と動機のみで動くのとは、幾分か相反したもので、本能は昆蟲に最も強く、動機で動くのは人間に一番明かで、その中間には他の動物の動作があり、その脳神経か、若しくは神経節系統かが秀で、發達して居るに應じて、色々

の度合に働く。昆蟲が本能で動き、工作作業をするのは、此の様に主に神経節の系統に導かれるのである。そんな次第で、昆蟲の行動は夜遊の人と著しく似て居て、夜遊の状態は、脳髓でなしに交感神経が外部に向つての行動をも支配する様になつたのであるから、昆蟲は幾分か自然の夜遊で動いて居るものといへやう。或る人が或る船に乗船の席を取つておいた、然るに船に乗り込むべき時に、その理由は分からないが、乗り込むのがいやになつた、その後この船は破船した。又或る人が他の一人と共に火薬庫へ行つた、その近くに行つたがどうしても進みたくなく、何だか譯は知らぬが、恐ろしく直に引き返した、火薬庫は爆發した。又或る人は太洋の上で、或る夕、譯なしに着更へをしたくないので、着物も履もそのままに、眼鏡をさへかけて床に入つた、その夜船火事が起こつて、その人はボートで助かつた少數者の一人となつた。此等は皆何か運命を知らせる夢を見たが、それは忘れても、その餘響がほんやり残つて居るから出る事で、この類例から推せば、本能や工作衝動を理會し得やう。

第十章 生きんとする意志

哲學者の職務は世界を説明するにあるが、世界を見れば見るに従つて、生きやうとする意志といふのは、決して勝手の本體でなく、又空虚の言でなく、世界の最も内實な本性を眞實に云ひ表はしたものだといふ確證があり、確認せしめる。何物も押し合ひし合ひして生存しやうとし、出来るならば有機的の生存、生命を要め、生命が出来てはそれを出来るだけ増進しやうとする、特に動物界ではこの事が瞭々で、生きやうとする意志がその本性の根本音調になり、その唯一の不變で絶待な性能になつて居る。何物にも生命の強壓のあるを見よ、又見よ、生きやうとする意志は、どこにも何れの時にも、生殖と、萌芽とで、又それが缺けては自然發生でも、猛烈に生存に押しかけ、機會があれば、それを捕へ、生を維ぐべき材料があれば、どれでもこれでも欲深くそれを把む、そのやり方の千萬無量で能く用意の整つて居る事、あらゆる仕方をするのを見よ、それから又、その一々の

現象のどれかでも、生存しはぐれやうとするものがあれば、この意志が恐ろしい警戒を加へ、獰猛な反抗をするのを一寸でも見るがよい、特にこの動亂に明晰な意識を伴ふ場合を見よ。その場合には、たゞの一つのこの現象と共に全世界が到頭滅亡してしまふかの如くで、生命の危急に瀕した者の本性全體は忽に變じ、やけになつて死に反抗してそれを防がうとする。又例へば、死刑の宣告を受けるものが、どの様に恐ろしがつて蒼くなるか、又死刑の場處を見るだけでも、どの様な凄蒼の思ひがするか、又その執行を見ては心も取られる様に同情を表するか。此の事を思へば、斷えず不安なこの生存を、僅に數年縮めるや否やといふためではない様に考へられる。此等の現象から見れば、わしが生きやうとする意志をそれ以上説明の出来ないもの、一切の説明の根據にあるものとしたのが、至當だといふ事も分からう、而してこの意志は、絶待だとか無限だとか觀念だとか、その他それに似た云ひ方の如くに、空に言葉のひびきでなくして、我々が識つて居る中での最も實在なもの、實在の核實である事も、此で見得やう。

そこで暫く自分の内面から得た解釋を離れ、天然を單に外物として、それを客觀的に領

得して見れば、天然は有機的生命の階段以上には只一つの目當をつけて、總ての族類を維持するに勉める。そのために天然は、胞芽を無量に餘分にし、性欲衝動を逼迫的に激しくし、あらゆる事情や機會に適應しては雜種をも作り、母親の愛情を強い本能とし、或る動物の種ではそれが自愛よりも強く、母親はその子を救ふために自分の生命を棄てるまでも行く様にする。それに反して、個人は天然にとつて只間接の價值のあるのみで、種類を維持する方法としてのみのものである。ところが、族類は何のためといへば、全く客觀的に天然を觀測してのみでは答へ得ない事になる。只天然を眺め、この齷齪の休みなく、生存の強壓の猛烈で族類を維持しやうとする懸念の焦せるなどを見て、その目的を發見しやうとしても駄目である。又箇體に力があり、時間があれば、それを自分と自分の子等の維持のために使つて一生懸命になるが、それも十分にはなく、時としては全く不足を告げる。然しあちらこちらで、時によつて力の餘分があり、従つて快感が（理性のある一つの族では認識が）餘分にあつても、これ等は皆微弱の事で、天然の齷齪の全部について目的だとするには足らぬ。事態全體を全く純粹に客觀的に、餘處事の如くに把握して見れば、

天然は、その觀念、即ち恒存の方式の一つだに無くならない様に配慮してをるらしく、そのために此等の觀念をうまく思ひ附き又順序を立てて、それだけで自らも精一杯の事をし、そこで今度は、この立派な思ひ附きの一つでも、この方式のどれも、時間以外、因果のつなぎ以外に消え去らない様にといふのが、その唯一の配慮であるらしい。個體は行く河の水の如く流れ去るが、觀念はその渦の如く一處に留まり、水が涸れなければなくなる。——若し天然が只外から客觀的にのみ見えるもの、認識の會得にのみ止り、認識、即ち、現識の範圍からのみ生じ、その祕密を解釋するにも、此の方面のみに止まるべきものとすれば、今いつた様な謎の様な見解に止まる外なからう。然しそれ以外に、天然の内面を眺め込む事が我々には出來て、我々自らの内面に入つて見れば、その齷齪が上り得た最高の階段がそこに現はれて居て、こゝになれば自己意識の中に認識の光りで、直接に天然に逢着し得るものがある。

現象全體の努力が虚無で無効であるを見るには、簡單で見直し易い動物の生命について見た方が分かり易い。その體制は様々、手段は巧妙で、その住所や餌食に適應して居る。

此等の事はこゝには他に終局目的を伴はないから明白に分かる。終局目的などはなくて、只一時の愉快、暫時でその上缺乏の多い楽しみ、澤山で長くつゞく悩み、不斷の闘争、誰れも彼れも互の戦ひ、各々互に獵師となり又獵にとられ、押し合ひへし合ひ、缺乏、困厄に憂慮、叫喚に悲鳴があり、此はいつまで代々につゞいて、最後に此の遊星の皮が破れるまで行く。ユングフーンがジャブで見たと云ふ所に據れば、見亘す限り骸骨の原があつて、古戦場ででもあるかと思つたが、それは實は長さ五尺、幅三尺もある龜の骨のみで、龜が卵を生みつけるために海水からこゝに出て來ると、山犬は力を合はせて龜を把へ、それを脊に載せて、腹部の甲の弱い處を破つて、生きたまゝに龜を食ふのである。ところが又虎が來て犬をつかむ事もある。この酸鼻の事は百度、千度繰り返し、年々つゞく、龜は又食はれるために生まれて來る。この恐ろしい光景は何のためにあるのか。此れに對する答へは唯一つ、生きやうとする意志は此の如くにして自ら客觀化する。尙能くこの意志を觀察して、其のあらゆる客觀化でそれを會得して見よ、さすればその本性と世界とを理會し得やう、生きやうとする意志が客觀となつて演ずる大演劇、又その本性の特質、此等を會得

するには、能く精密に觀察するが必要で、世界を神といふ名で呼んだだけで萬事を終り、又は一寸手軽に自分をはづれて出た觀念などと説明する、此だけでは到底足りない。彼等は萬有神教又はスピノザ學に據つてだといはうが、實に今世紀の學系は只これを作りかへただけで、どこまでも萬事それから紡ぎ出して、盡きる事なく、永遠にさうやつて行くに違ひない。スピノザでは、世界は神、「最完全の有」で、それ以上善いものはありも得ず、考へも得られない。それ故、その世界を解脱する要もなければ、解脱もない。但し何のためこの悲喜劇を演ずるか、どうしたつて分からない、それには見物はなくて、役者自らはそのために大變な苦みをし、僅かな楽しみ、只消極の楽しみを得るのみであるもの、「大抵底は知れて居る」。

そこで尙之に加へて人類を觀察して見れば、事態は一層複雑して、又幾分か眞摯の色彩を帯びるが、然し根本の特質に至つては違ひはない。こゝでも亦、生命は樂むための貰ひ物でなくて、仕事、勞するための苦役であり、それ故又大にも小にも一般に困厄があり、骨折りは止みなく、斷えず押し合ひへし合ひ、戦闘には終りなく、動作は強いられ、あら

ゆる身體の力、精神の力を非常に緊張しなければならぬ。

第三卷補説 觀念・美術の事項

第一章 觀念の認識

知力が意志の使役に應じて、その天然のままの作用をして居る場合には、本當は只物事の交渉を認識するのみで、先づ第一は物事が意志に對する交渉で、それ等が意志に對して動機となる方面、それから進んでこの認識を完うするため、物事相互の交渉を認識する。認識のこの後の種類がどれだけか擴がり、又有効になるのは、人間の知力で始まる事、之に反して動物で、知力は餘ほど開發して居る場合にも、極めて狭い境界の範圍に留まる。固より、物事相互の交渉を會得するもの、やはり間接には意志の使役に應じてするのである。即ちこの會得は、それから意志を全く離れた、純粹に客觀の認識に進む移りかけであつて、その會得は科學の方、純粹客觀の認識は藝術的である。即ち一つの客觀につ

いて、種々雑多の交渉を直接に會得して來れば、それに依つて、その物に固有な本性は段々明白になつて、その相待關係のみからして本性を組み立て得る様になる。この様な工合の會得をすれば知力が意志に使役せられる事は、段々に間接になり又僅かになる。そこで知力の力が十分に強くなり、優勢を占め、意志に對する物事の交渉はその方に放任して、その代はりに一現象の中で一切の相待關係の中に貫徹して現はれる純客觀の本性を會得する様になれば、此くして意志の使役を離れると同時に、又只の相待關係を會得するに遠かり、従つて一々の物を一々として會得しない様に本當になる。さうなれば知力は自由に浮遊して、意志には從屬せず、一々の物に對しても只本性の方面のみ、即ちその族全體を認識し、そこでその客觀とする所は觀念のみになる、一々の物の時間的生存を離れ、固執して不變な姿、物事の種で、此の如きものが本當に現象の純客觀性である。觀念を此の様に會得して見れば、相待關係のみの認識から出たもの故、それはまだ物自爾の本性それ自らではないが、而かも一切の相待關係を總括した成果であつて、物事の本當の性格であり、直觀に對する客觀として表はれて居る本性を完全に發表したものが觀念、即ち個體意志に

對する交渉で會得したものでなく、それ自らが自らで發表するもの、今まではそれのみ認識せられて來た相待關係全體を定めるものである。觀念は此等一切の相待關係の根本、それ故又この程度の現象で意志が完全に圓滿に現はれた現象、意志の具備した客觀性である。形や色なども、觀念を直觀的に會得するには直接のものであるが、根本には觀念に附いたものでなく、只その發表の方便で、觀念にとつては、空間も時間も共に縁はない。

第二章 認識の純粹主觀

一つの觀念が意識に入つた時に、之を會得するには、我れ自らに變化が起る要があり、此の變化は自己拒絶の行動と見るべきものである、即ちその場合には、認識が兎に角自分の意志に全く背き去り、認識が委托を受けて居る預り物を全く見棄てて、物事が意志には何等の交渉もないかの如くに之を觀するにある。何れの藝術の作品でも、眞のものならば、この資格を具へた認識をその源とし、根據とすべきである、この認識は、その一時だ

けでも知力が意志を制御するから出るので、之を生理的に観れば、何等の好悪に動搖せられず、感動を去つて、脳髓がその直観の活動のみを強く奮起するにある。この事を尙能く解明するために、我々の意識に二面ある事を覚えて居るべきで、即ち一方は自分の我れについての意識、即ち意志と、一方は他の物の意識、即ち兎に角外界を直観する認識、客観の會得である。そこで意識全體の中で、その一方が多く現はれれば他の方はそれだけ退く。それ故、自分自らの我れを意識する事の少いに従つて、他の物の意識、直観の認識は、それだけ完全に、それだけ客観的になる。こゝに實に相反したものがあつた。直観が純粹に客観性を帯びる様にするためには、どうしてもいつでも、一體に脳髓が完全で、その活動に利益のある生理的の性情が具はつて居る要があり、又それと共に時々の状態がよくて、脳髓神経系統の緊張と感受性とが高まり、而かも何等の情熱をも刺激しない様な事が都合よく揃はなければならぬ。天然に順應して脳神経の活動を増進する方法を講じ、その上に脳髓が一體によく出来て居、よく發達して力が強ければ、その効力は一層強く、そこで客観は段々に主観と分離して、終には直観が純粹に客観性になる状態にもなり得、そこ

で自然に意識の中から意志を除き去り、物事は益々明瞭明晰に現前する様になる、そこに至れば、我々は自分については殆ど何も知らず、只物についてののみ知る様になり、即ち、意志を離れた純粹の認識では、他の物についての意識が高まつて、自分の我れについての意識は消滅してしまふ。此に至れば則ち世界を純粹に客観的に會得したので、自分自らがその世界のものである事をも忘れ去り、自ら己れを意識する事が減じて、物事を意識するのみになれば、何れの物事もそれだけ美はしう見える様になる。——本當の我れは即ち意志で、この意志あるが故に悩みは生ずるのであるから、意識のこの方面が蟄伏すると共に、悩みの因由も盡く滅し、そこで純粹に客観性の認識は、どこまでも多幸の状態である、わしが意識の二成分の中で、この方面を美の享樂の方だとするのは此のためである。然るに自分の我れといふ意識、即ち主観性、意志が再び秀でて來れば、それだけ不快か又は不安が生じ、不快なだけ身體性は又感じに上り、不安になれば、それだけ意志は、精神の方面で願望や感動や情熱や心配で意識を充たして來る。即ち意志は、主観性の原理であつて、どこでも認識の對照、否正反對である。——身體の感じは何れも皆それで自らでは

意志の動搖で、欲するよりは寧ろいやがる方が多い。精神の方面で意志が動搖するのは、動機に依つて生ずる事で、即ちこゝでは、主観性自らが客観性のために、喚び起されて働き始める。この様になるのは、一つの客観を只純粹に客観的でなしに、利害の關係で會得し、それで直接なり間接なりに、願望か又は嫌忌を誘起する様になるため、それは想ひ出だけからでも出て来る、此くなれば、その客観は即ち最も弘い意味での動機になる。

こゝに附起しておくが、抽象に考へると讀書は、共に言葉に結び付いた事で、弘い意味で他の物の意識であり、従つて精神が客観の方にかゝはる事であるが、こゝでは概念を介して間接にする事で、而して概念は理性から出たもの、人工の産物であるから、見當をつけての仕事になる。又精神が抽象の仕事をする場合には、いつでも意志はその嚮導になり、導者としては自分の見當に順つて理性に方向を指し示し、且つ注意を集中する、それ故、この働きには何れどれだけの努力が加はり、努力は意志の活動で出来る。それ故、この類の精神活動では、意識はまだ十分に客観性にならず、客観性は美の會得、即ち概念の認識がなくては生じない。

此に依つて見れば、一々の物事を箇々の物としてでなく、その様な觀念として認識するのは、直觀が純粹になるにあり、この様になるには、人が自己を意識しないで、直觀に入る對象のみを意識し、そこで自分の意識は、只その對象の客観的存在を擔つて立つものとなつてしまふにある。此の状態は、知力が、一時にしても、その意志を制御し、又滅却するのであるから、甚だ困難の事で又稀有である。認識は意志から生じて來たもので、意志の現象である有機體制に基いて居るものではあるが、又そこでそれが意志のために溷ごされるのは、火焰がその燃料や煙に曇らされると似て居る。この譯で、我々が物事の本性を純粹に客観的に會得し、物事の中に表はれて居る觀念を會得し得るのは、その物事がこちらの意志に對して何等の交渉をも有たない様にして、それに利害を感じない時のみである。又本性の觀念が我々に陳述して來るのに、現實相からよりは、藝術の作品からする方が容易であるのも亦この故。即ち畫姿や又は、詩で眺めるものは、こちらの意志に對して何等の交渉をも生じ得ないで、それ等は只認識に對してのみあり、又直接には只此のみに向つて居るからである。之に反して現實相から觀念を會得しやうとすれば、幾分か自分の

意志から引きぬいて、意志の利害を超越する事が必要で、さうなるには知力に飛躍する特別の力のあるを要する。この力が強く又いくらか續き得るのは、天才のみの特有で、天才なるものは、認識の力が餘程多く、個人意志の使役に要する以上にあり、この餘分が自由になつて、意志に關係せずに世界を會得する様になるにある。此の様に美の享樂は觀念を會得するにあり、藝術の作がこの會得を容易ならしめるのは、一つは藝術が本性を著しく顯はし、本性でないものを淘汰して、物事を明晰に又その性格を具へて見せるからである。

第三章 天才について

藝術や詩、又哲學でも、眞の作が出て来る源となる認識の仕方については、既に叙して來たが、元來天才といふのは、此の様な認識の能力が餘分にある人の事である。この類の認識は此を會得するのは抽象の事ではなく、直觀的であるから、天才の本性は、直觀認識が

圓滿で又強いにある。それ故、天才の作といふべきものは、直接に直觀から出、又直觀に向つて居るものが特にそれで、先づ造形美術の作となり、それから空想を介した直觀で出来る詩ともなる。——天才と只の秀才との別は、秀才の長所は、叙說的認識が巧妙に鋭敏であり、他の人よりも敏捷に又正當の考へをするが、天才はそれと違つて、總ての人と違つた世界を直觀し、その人の頭腦に映ずる世界は他の人よりも客觀的で、従つて純潔に又明晰であるから、何れの人にも現前して居る當面の世界をも一層深く洞見する。

知力の元來の天分は動機の媒介をするにあるから、そのまゝでは物事を會得するに、物事の意志に對する交渉のある以上に出ない。動物では殆ど全く直接の交渉のみであるから、非常に活潑な動物でも、その事自らで目立つた事にも氣が附かないで居る。通常の人では、その外に意志に對して間接な事や、あり得る交渉も加はり、此等の總計が有用な知識なるものを作り上げる、それにしても、こゝでも、認識は尙これ等の交渉の中に留まる。通常の頭腦では、自分だけの弾力性で目的もなしに、世界を純粹に客觀的に會得するだけの力が十分でないために、事について純粹に客觀的な形像を得る事はない。それに反

して、これが出来て、脳髓の現識力に餘分があり、外界の形像をそれ自らでは目的なしに、純粹に明晰にし客觀的に映し、その様な形像は意志の見當には不用であり、又それが進んでは意志を妨げ、目的に有害にもなる様になれば、——茲に至るのは、少くともその素質に常規はづれがあるので、名付けて天才といひ、自分の本當の我れ、即ち意志とは別で、云はゞ外から入り込むで來た靈が働いて居るやうに見える。然し形容でなしにいへば、認識の力が元來そのために生じて來た意志の使役に應ずる以上に、著しく強く發達したのを天才といふのである。天才といふのは、知力が異常に過大な謂ひで、それを利用するのは、只生存の遍通の方面に適用するのみで、恰も通常の知力が箇々の人の用に立つ如くに、天才は人類全體の用に立つべきである。もつと分かり易くいつて見れば、通常の人が、意志三分の二と知力三分の一とで出来て居るなら、天才は知力三分二と意志三分一とで出来て居る。そこで此の二つの間には貫徹した區別があつて、それは已にその本性全體、行動、動作にも現はれ又特にその仕事の上に著しく現はれる。尙こゝに差別として附けておくべき事には、化學上には物質が相反すればそれだけ親和力が強く、それで互に引きつ

けるが人間の場合にはその反對になるのが常である。

此の様に認識力が餘分にある所から出て來る第一の發表は、多くは最も本元的で根本本性的な認識、即ち直觀認識に現はれ、そこでそれを形像で再現する様になる、畫師や彫刻師は此の如くにして出來る。此等の人では、天才的の會得と藝術上の製作との間の道程は最も短く、従つて天才とその活動とが表はれる方式は、こゝでは最も簡單で、又之を記述するのも最も容易である。然し此處にも眞の製作の源泉は見えて居て、源としては何れの美術でも、詩でも哲學でも同じである。

そこで直觀は、勿論或る制約の下ではあるが、先づ物事の本當眞實な本性を啓き示すものである。概念や、考へた事は、何れも皆、只抽象で、直觀から來た局部現識に過ぎず、或る點を抜き去り考へて出來たもの。深遠な認識、又本當の智慧は、何れも物事を直觀的に會得するから出る。眞の藝術の作、不滅の思想が、各々その生命の火花を得る出産の道は、いつでも直觀的の會得にある。本元の考へは必ず形像とする。

然し又、直觀がいつも物事の現實實在に結びついて居れば、その材料は全く偶然に支配

せられ、その中では物事が適當の時に出て来る事は稀であり、又目的に適つて秩序の立つ事も少く、大抵は缺陷の多い實例で現はれて来る。それ故、人生の中で意味の多い形像を完成し、整へ、作り上げて、之を保存し、この形像を人に傳へるべき深く徹した認識や、並に意味のある作で之を再現しやうとするには、どうしても空想が必要である。空想の大切な價値はこゝにあつて、そこで天才には缺くべからざる道具となる。天才がその製作詩作又は思想を聯絡する必要に應じて、何かの物事又は成り行きを、活き／＼した形像で眼前に觀じ、此くして一切の認識の源泉である直觀認識から常に新鮮の養ひを得るのは、實に空想の力である。空想に富むだ人は、云はゞ靈を呼び出す人で、この靈は適當の時に眞理を示してくれる、天才と空想のない人間との間柄は、自由に運動する翼のある動物と、只偶然に機會の來るのを待つて、岩にくついて居る貝類とに似て居る。空想のない人は、現實の感覺直觀の外に他事を識らず、現實が現はれて來るまでは、概念と抽象とにかちりついて居る、而して此等は認識の實を抽き去つた皮と貝殻とに過ぎない。——造形美術や詩の作や、又はそれと同じく身振りとする事は、空想のない人に成るべくその缺點を補ふ

方法になり、又空想の力ある人にはそれを用ひ易い様にさせる道具である。

この様な譯で、天才の特徴となり本性をなして居る認識工合は直觀するにあるが、その本當の對象になるのは、一々の物でなく、その中に自ら示現して居るプラトーン觀念にある、一々の物の中に常に遍通を見るのが即ち天才の根本特質である。一人の人が、一々の物の中に只それだけを見るか、又は多少遍通を見、終にはその族類に亘つた最も遍通の相を直に觀るや否や、又その程度は如何、此等が即ちその人が天才に近いや否やの尺程になる。此の譯合故、天才が本當に對象とする所は、一體に物事の本性、その中にある遍通相、全體相である。

觀念を會得するには、それを認識するものが、認識の純粹な主觀になり、意志が全く意識から消滅するを要する。ゲーテの歌や又はジェヤン・ボールの天然を記して居るので、風景の美を眼前に浮べ、それで心がうれしいのは、つまりそれでそれ等の精神の純潔な客觀性に仲間入りをし、彼等と同じ様に、現識としての世界が意志としての世界と分かれて云はば全く遊離した如くなるからである。——天才の認識工合は、本來總ての慾やその交

涉に溷らされないから、従つてその作は一種本能の様な必要に導かれて出る。——天才の發作とか、入神の時とか、感奮の刹那とかいふのは、知力が自由になつて、一時意志の使役を離れ而かも不活動や遲緩に陥らずに、その間は全く獨りで自發的に働く事に外ならぬ。この場合、知力は純潔の極に達し、世界を映す明鏡になつて居るので、自分の根源である意志をば全く離れて、現識としての世界そのものを一つの意識に集中してしまふ。この瞬間には、云はゞ不滅な作の精靈が生まれたのである。

大多數の人の顔つきには、平凡のしるし、凡俗の表情が彫み付けられてあるが、それと違つて、天才の表情には、天賦の秀でた人に共通な親縁類似が著しく見え、知力が意志の使役から自由に遊離し、解放を得、認識が慾を制して居るのがその上に明白に讀める、而して認識はそれ自らで、又自らにとつては痛みもなしに快潤なものであるから、この状態は彼等の秀でた前額や、清朗な眼つきとなつて現はれ、それ等は意志やその困難の用達に従はないで、云はゞ天地の清爽快潤の趣きを具へ、それが時に應じて煥發し、それと他の方面の顔つき、特に口つきの鬱憂とはよく關聯する、此の點でジヨルダノ・ブルーノの標語

はよく適するが、その語に「鬱憂の中に快潤、快潤の中に鬱憂」とある。

意志は知力の根源であるが、知力の活動で自分の目的に向かないものは、盡く之に反抗する。それ故、知力が外界を純粹に客觀的に又深く會得し得るのは、それが假令へ一時たりともこの根源を離れた時にのみあり得る。世界がその眞實の色合ひや姿で、又その全い正當の意味で見えるのは、知力が慾を謝し去り、自由に客觀の上に浮遊して慾に追はれない様になり、而かも強く活動する時に限る。此の状態は、知力の天性と天分とに反した事で、従つて幾分は天然に背いた事、それ故非常に稀である、然し天才の本性は即ちこゝにあるので、この状態は天才にのみは高度に又持續して現はれるが、その他ではそれに似たものが、取り除けの様に出て來るのみである。ジェヤン・ポールが天才の本性を思慮ある性能においたのも、こゝに述べた意味に取るべきである。即ち通常の人には自分の意志のために生を營むで、その生活の渦巻きや騒ぎに捲き込まれ、その知力は生活の物事や成り行きに充たされて居る、而かもそれ等の物事や人生それ自らを、その客觀の意味で把む事は出來ない、それに反して、天才の知力は意志を離れ、人格を脱して居るから、それ等に關した

事のために世界と物事自らを見失はないで、よく明白にそれを悟り、それを自爾に客觀的直觀に寫し取る、天才が思慮深いといふのはこの意味での事である。

この思慮が深い故に、繪師は眼前に見る天然を忠實にカンブスの上に再現する事が出來、詩人は直觀に映する現前を云ひ表はし、又明白な意識に持ち出し、抽象概念に依つて之を寫し描く事が出來、他の人が單に感ずるだけの事を言葉で言ひ表はすのも、皆この思慮で出來る。——動物は何等の思慮もなしに生きて居る

そこで意識の明白な度合は、無限な段取りで上るもので、それに従つて思慮は多くなり、段々それが増すに従つて、明白になり、その極になれば、極めて稀で、又時々ではあるが、又色々度合の違ひはあるにしても、電光が頭腦に閃き亘つた如くに、「それ等は何物、」「それ等は本當にどう出來て居る」といふ事を見て取る様になる。この中で前の方の「何物」といふ問題で明白の度が強く、又永く續いて現前する場合には、哲學者の意識、次の方の「どう出來て」といふ方は、同様であるが、美術家や詩人に見える。即ちこの兩方とも、そのする高尚な仕事は思慮から出る事で、此は又明晰に世界なり自分自らなりを

悟つて、それでそれ等についての思慮を得るから生ずる。然し此の全體の徑行は、知力が優れて、その本來奉事すべき意志を一時離れるから起る。

天才について茲にして來た觀察は、生類の各種に亘つて、段々に意志と知力とが相分かれる事と密に關係する。この分類は、天才でその最高度に達し、そこになれば知力はその根本である意志と全く離別して、知力は全く自由になり、そこで現識としての世界は完全に客觀化して現はれるに至る。——

尙茲に天才の個性に關する事を少し云はう。——シセロに據れば、アリストテレースは、『天才は皆憂鬱の人』といつたといふが、此は疑ひもなく、アリストテレースの『問題』にある文句から出て居るのである。ゲーテの言にも亦

『我れ吉事に面せし間は、詩人の焰は揚がらざりき、されど、世にも恐ろしき凶事を逃れ得し時には、その焰炎々と上りぬ。——やさしの歌は、虹にも似て、素地にのみ畫かる、詩人の天才が憂鬱の分子を歡ぶも此の故。』

その理由はつまり、意志は常に知力を制して居るその元來の力を逞うしやうとし、而して

知力は、個人の都合の悪い時には、却てこの干渉を脱し易いためで、その場合には自分の工合の悪い事情には背き去つて、幾分か自分で氣を散らし、そこで力を強めて自分以外の世界に向ひ、容易にそれを純粹に客觀的に見取る様になる。自分の關係が都合よいほどその反對になる。然し全體として、又一般に云へば、天才に憂鬱性が伴ふのは、つまり生きやうとする意志が、明々な知力に照らされて自ら明らめるに従つて、それだけ明晰に自分の悲惨な状態を知覺するためである。——天賦の高い精神が多くは沈むで居るは、天才は多くは沈鬱であるが、時としてその精神の圓滿な客觀性（此は天才にのみあり得るが）から出る特殊な爽快を呈する場合には、その秀でた前額に光輝があり、此の有様は天才のみにより得る、『鬱憂の中に快潤、快潤の中に憂鬱』これは適言である。

天才の人が多くは、自分自らの幸運のために配慮する事の下手なのも、此のためで、同じ根據から出て居る。鉛の重みをつけておけば、その物體はどうしても鉛の重點のある方に傾き戻つてしまふ如く、人間の眞實な眞面目は、その知力の力と集中とをいつも知力のある處に戻してしまひ、その他の事は實の眞面目でなしにする。それ故、自分の眞面目が

一箇のため、實行の方面になくて、客觀的で理論の方面にある人は、即ち稀有で常規以外の人間であるが、此の如き人のみ、物事と世界との本來の面目、最高の眞理を會得し、而してそれを何かの工合に再現する力がある。此の如き人の眞面目は、個體以外で客觀の方にあるのであるから、此の様な眞面目は人間の天性に固着したものでなく、不自然で、又本當は超自然のもの、然し此あるが故にその人は偉大なので、それ故又その人の創作は自己以外の靈から出、此れがその人を占領したのだといふ。此の様な人にとつては、像を作り、詩を詠じ、又は考へるのは目的であり、他の人々にとつては、此等は方便である。彼等はそれ等の業で自分の事柄を求め、常則として、自分の利を進める事を能く知つて居、現代人の需要と機嫌とに投して、彼等に迎合するを勉める、それ故此の類の人は大抵幸福な生活をするが、天才は悲惨な生を送る事が多い。つまり、彼れは自分一箇の幸福を客觀的な目的の犠牲にし、こゝにその眞面目があるから、その外に仕様はない。他の人々はその反對で、彼等の小なのはこゝにあり、天才は偉大である。それ故、その作は萬世のためのであるが、それが認められるのは多くは後世に始まる、他の人々はその時代と共に生き

又努める。一體、偉大なのは、實行上の事にしても理論上の事にしても、働くには自分自らのためにしないで、唯客觀の目的を追ふてする人である。自分のため自分の利を求めないといふ事が、如何なる事情の下にも彼れをして偉大ならしめる所以である。偉人は自らを一切の中に又全體の中に認識し、人々の如くに小宇宙にのみ生きないで、その上に大宇宙に生活する。そこで、その關心する所は全體にあつて、把捉するにも、又は之を説明するにも、又はそれで實行的に働くにも、全體を把まうとする。全體は彼れにとつて餘處事ではなく、こゝに己れの事があるのを感じる。その人を偉大といふのは、この様にその領域が弘いからである。それ故、この崇高な稱號を加へるべきのは、何等かの意味での眞の英雄と天才とであつて、それは、その人が人間の天性に反して、自らの事を求めず、自分のために活きずに、一切のために生きた人といふ事である。——大多數の人はいつでも小人たらざるを得ず、どうしても偉大にはなれないのであるが、その反面に、或る一人が徹頭徹尾、いつでも、何れの時にも偉大であるといふ事はあり得ない事で、

「人は常の土にて作られ、習慣をその乳母と呼ぶ。」

即ち偉人は、何れも只個人としてのみ存在して、自分だけを眼中におくから、それがその小なる所以となる。如何なる英雄でも、その侍僕の眼には英雄でないといふのは、こゝの事で、又正當の言であるが、必しもその僕がその人を理會して測度し得ないといふ事ではない、——ゲーテは此の事を、その「親和力」の中で、オテリーの思ひ附きとしていつて居る。——

天才はそれ自らが報酬であつて、人の最良の事は、自分が自分自らたらざるを得ない事。

天才の本性を今述べて来た如くに見れば、天才とは、その知力が本來の役目である意志の御用を棄てて、自分だけで働かうとするにあるから、その限りでは天然に反して居るといへる。即天才とは、自分の役目に不忠實になつた知力の事である。

第四章 狂氣について

精神が本當に健康なのは、記憶の完全なるにある。その意味は、人間の記憶が何も彼も貯へて居るといふのではない。即ち過ぎ去つた生涯の路が何か特色のある事、又は顯著な出来事は、知力が通常で、強く又健康であれば、必ず想ひ出し得べきである。——この想ひ出は、その明白の度でも又充實の度でも減じはしても、而かも平均して相つゞくものであるが、その緒が切れ離れると、狂氣になる。

健康な人の記憶が、その實見した事件進行について、保存する所のものは、現前に知覺したと同じ位に確かに、又大丈夫と見得る位に確實であるから、裁判でその人が宣誓をすれば、それで證言として通る。その反對に狂氣だとの疑ひがあるだけでも、その人の證言には力はない。即ちこゝに健康な精神と狂氣との見さかひがある。記憶して居る事件が實にあつたのかどうか、自分に疑はしければ、狂氣ではないかとの嫌疑を自分自らでかけて

居るので、又他人がこちらの正直は疑はないで、而かもその實見したといつて物語る事が實であつたかと疑ふならば、それはこちらを狂氣したとして居るのである。又元來は自らも欺いて事件を作り、それを度々反復して物語り、終には自分もそれを事實と想ふ様になれば、本當はそれだけで已に狂して居るのである。狂人であつても、その思ひつきに頓智があり、その何かの思想が巧妙なものであれば、その判断を當つたとして信じてよいが、然しその人が、その過去の事柄についての證言には、我々は少しも信を措かない。釋迦牟尼佛の傳記である「普曜經」には、その佛が生まれた時に、全世界の盲人が明を得、聾者は聞く様になり、一切の狂人は『その記憶を回復した』とある。この最後の點は二箇處に記してある。

わしの多年の經驗に依つて推測して見るに、狂氣になるのは、割合に多く役者にある。彼等がその記慮を濫用することはどれだけか。毎日新しい役廻を勤めたり、又は古いのを再び演じたりして、而してそれ等の役は互に關絡もなく、又或は反對になり相撞着し、役者は毎晩毎晩違つた人物になるために、自分を忘れなければならぬ。此がために狂氣に

引き入れられるのである。

狂氣の成り立ちについて、分かり易くして見れば、自分の興味や自分の自負、又は願望をひどく害する事を考へる時には、その様な事を自分の知力で精密に又眞面目に探求して見る事は甚だむづかしく、その反對に、それ等を識らず知らずの間に棄て去り、又はそれをこつそり逃げるのは餘程やさしく、又心持ちのよい案件は自然に感覺に現はれて、いつの間にか心の中に這入つて來、それを避けても又々入り込むで來て、數時間も附け纏ふ。自分にいやな事を知力の光りに照らさうとするに對して、意志は之に反抗するが、こゝに狂氣が精神に入り込み得る點がある。

第五章 藝術の内實本性

生存の問題を解くために勉めて居るのは、哲學ばかりでなく、美術も亦同じである。藝術の作が何れも勉める所は、人生と物事とをその眞實にあるまゝに示すにあるが、而

かもそれは何人も直に把み得る事ではなく、客觀なり主觀なりの偶事の雲霧を通してのみ見られる。この雲霧を取り去るのが即ち藝術である。

詩人や彫刻家や、又叙説をする美術家の作は、一般にいつて、どれだけかは必ず深い智慧の寶を抱いて居るもの、物事の天性の智慧はその作の中に表はれ、藝術家は之を明白にし、純白に再現して、この通譯をする。そこで、詩を讀み又は美術の作を觀るものは、又この智慧を明かに引き出すためには、自分の力を用ひなければならず、その人の能力と素養とで届き得るだけの中を捕捉し得るので、航海者が深い海水に測鉛を投げ込むでも、その綱の長さ以上には這入らないと同じである。繪畫彫刻の前に立つては、何人も王侯の前に立つ如く、それが何事を語るか、どういふ事を言ふかを只待ち受けるのみで、自分からは何も言ひ出さないで居なければならぬ、自分で何か云つても、それは自分にきこえるのみである。此等の點から見れば、叙説美術の作には、皆何かの智慧があるが、それは皆沈隱で、含蓄的であり、之を顯動に、表明的に見せやうとするのは哲學、この點から云へば、哲學と藝術との間柄は葡萄酒と葡萄とに似て居る。哲學が與へるべきもの、

與へやうとするものは、云はゞ已に得た純益、確定し固定した所有の如きもの、藝術の仕事と作とから得られるものは、いつまでも更に新に作り出すべきもの。この益を得るために、哲學はその作を作り出す人のみならず、之を樂まうとする者に對しても、中々重大で容易ならぬ要求をする。それ故、哲學の對手になり得るものは少く、藝術の公衆は多
い。

藝術の作を樂むには、觀者もその働きに與らなければならぬといふ事を先に述べたが、その譯は、一部は、藝術の作は空想の媒介で効果の擧がるものであるから、いつも之を刺激して、それが休むで活動にはづれない様にする要のあるに因る。此が美のエフエクトの制約で、總ての美術の原則である。そこでその結果として出て來る事には、藝術の作で何も彼も與へやうとしてならぬ事、又空想は正當の道に導くに要するだけ與へて、空想がすべき事をどれだけか始終残しておかなければならぬ。書物の場合でも、著者は、讀者に考へさせる事を残しておくべきで、ヴォルテールが「いやがられる秘訣は、盡く語るにある」といつたのが當つて居る。その上、藝術で最上のものは、精神的のもので、むけく感

じには與へられないものであるから、作で呼び起されるが、生まれ出るのは觀者の空想の中にある。大畫家のスケッチがその仕上げた畫よりも多く感じを與へるのも此のため、又その上に、スケッチはそのコンセプトの一瞬に出來上つたものを一氣に表はしたものとといふ利益が加はる、その反對に、出來上つた畫では、感奮がその完成まで持續して居る事は出來ず、色々と利口な思慮を盡し、見當をつけて之を失はない様にして、不斷に勉めて始めて出來上つたものである。——茲に述べて來た美學の原則に基いて説明し得る事で、蠟細工の人形は、天然の模倣といふ點では非常によく出來ても、少しも美のエフエクトを生ぜず、本當に美術の作とはいへない。此は空想に餘地を残さないためである。彫刻は形を見せるのみで色を與へず、繪畫は色を與へるが、その形は只假象であり、兩者は共に觀者の空想に訴へる。それに反して、蠟細工は形も色も盡く一時に見せ、それがために現實の見えを呈するが、空想を容れない。——それ等と違つて、詩は只空想のみに訴へて、言葉のみでそれを動かす。——

藝術の目的を本當に識らずに、只その方法のみをとつて勝手な戯れをするのは、何れの

藝術でも駄作の特質である。下手な建築で、支へるものもない支柱を立てたり、目的もない渦形を作つたり、ふくらみや突き出しを作るなど、音楽で意味もない節廻はしや形容をし、目的もない音をさせるなど、又意味の乏しい詩で韻を弄ぶなど、皆此である。——
工藝の母は切要で、美術の母は剩餘。理會は工藝の父で、美術は天才を父とする、而して天才は云はゞ一種の剩餘で、意志の使役に應ずるに要する以上の餘分である。

第六章 詩の美學

最も簡單で又最も正當に詩の定義を下せば、言葉に依つて想像力を遊ばせる術といはう。それに對して特に確證になる事が、メルクに宛てたキーランドの手紙の中に、左の文に出て居る、『わしは唯一つの句に苦心して二日半の間を費したが、結局唯一つ言葉を求めて得なかつたためである。その事について色々ひねくつて、頭を八方に配つて見たが、要するに一つの畫について、わしの眼前に浮むで居るその一定の映像と同じものを、讀者

の眼前に浮べたいと思つたのだが、君も知つてる通り、只一つの言ひ方、示し様、寫し工合が全體を支配する事も随分ある』。詩がその形像を表はす物柄は、讀者の空想にあるのだから、立ち入つて叙説し、微細に言ひ廻はせば、何れの人の空想にも投合して、その人の個性、その人の知識の範圍やその人の機嫌に丁度能く適合する様になり、非常に活き活きとその人を動かし得るといふ長所がある、然るに造形美術にはこの便益がなく、只一つの形像、一つの姿で誰れにも満足させなければならぬ、ところがその形像には、その作者か又はそのモデルの個性を表はすものがあつて、それが主觀的の附加、偶然であつて効用のない附加になつて居る、勿論主觀分子が少く、客觀的に近いだけ、それだけその作者は天才的なのである。此の點から見ても、詩の作は、畫や像よりも餘程強く、深く又遍通のエフェクトを呈するのは自然の勢で、一般人民は、畫や彫刻に對して、多くは全く冷淡で、造形美術は全體にエフェクトの少い藝術である。此についての奇態な證明には、個人の家や又諸處方々で、大家の作が度々發見せられる事があり、それは隠れて埋没して居たのでなく、數代の間、人に知られず、エフェクトなしに掛けてあつたのである。わしの居

た時（一八二三年）に、フキレンツエでラファエルの聖母が出て来たが、それは長い間、或る宮殿で、小使部屋の壁に掛けてあつたのである、而して此の様な事が、他に勝れて天賦に美の感覺のあるイタリア人の中にもある。それに反して、美しくて、心に徹る歌の節は、必ず世界中に擴がり、立派な詩は國から國に傳はる。えらい人や金持ちが、最も力を入れて造形美術を助け支へ、その作にのみ大變な金額を費し、今日は本當の意味での偶像崇拜の如くなつて、名高い大家の傑作には、大きな土地財産だけの金をも投するが、此は傑作が少いから、それを持つて居るのは誇りになるため、又その上にそれを樂むには、此時も勞も多くは入らず、いつ見ても一寸見ただけで得られるからである、その反對に、詩や又音樂でも、此とは非常に違ふ面倒な要件を具へなければならぬ。この譯で造形美術はなくてもよく、回々教國の如きは、國民全體にこの美術がない。然るに音樂と詩とのない國民はない。

そこで、詩人が我々の空想を動かさうとする目途は、我々に觀念を啓き示すため、即ち人生の何たる、世界の何たるについて實例を示すためである。此が出来第一の要件は、

詩人自らが之を識つて居る事で、それが深いか浅いかで、その詩作は色々になる。それ故、物事の天性を會得する深さと明瞭との度合段取は無數である如く、詩人に色々の段がある。彼等は自分が認識したものを正しう表はし、その寫した形像が自分の原本によく相當して居る限りは、各々自分を立派だと思ふべきで、自分では最大の詩人にも同じだと思ふのは、大詩人の見た形像は、自分にとつては、自分自らが天然の中に見たものより以上には知れて居ないためである、即ち、その自分の見る所は、その時にはそれよりも深くは立ち入り得ないのである。然るに最上の詩人でも亦、他人が見たものが如何にも膚淺で、彼等が自ら見ないために、之を表はし得ないものが澤山その背後にあるのを見、而して自分の見る所、その形像はそれよりも遠くに及むで居るのを見るから、自分自らが偉大だと認識する。——然るに世間は又餘程謙遜であるべしと彼れに注文して、そのために彼れ自身の賞讃をも萎縮させる。然し自ら功勞があり、又その價を知りながら、それには目をつぶるといふのは出来ない事で、六尺の身長のものが、他より背が高いのを氣附かずに居れといふと同じである。塔の土臺から頂上まで三百尺あるなら、頂上から土臺まで又それだ

けあるのは當り前の事。ホラチオも、ルクレチオも、オギドも、その他古人は自らの誇りを語り、ダンテやシェキスピアやベーコンやその他澤山同じ様な人はある。自分自ら知らないで大精神の人たる事は非理で、只無力で自ら頼み得ないものいふ事、自分自らのゼロであるのを感じて、それを謙遜だとしておくまでの事。或るイギリス人が頓智で、功勞と謙遜とは、その始めの文字の外共通のものはないといったが、よく當つて居る。名聲があつて謙讓の人に對しては、わしはいつでも、正當にさういへるかどうかを疑ふ、コンデヤッタは丁度此の事を云つて、

「偽の謙遜は信用を増すに足らず、我は我が價値を知り、人が夫に就て云ふ所を信ず」。又ゲーテも曲げずに云つた、『役に立たない者ばかりは謙遜だ』。熱心に他人に謙遜になれと求め、謙遜を迫り、いつもいつも『謙遜しなさい、神様の手前だ、謙遜しなさい』といふものこそ、確かに役に立たない人間で、全然効能のない愚物、天然の仕入品、人間の箱詰の通常な品物である。つまり、他の功を認めるのは、自ら功勞のあるもののみで、——眞實の功勞を理會する人。謙遜を賞讃するものが世に多いのは、此から出る事である。謙

遜の讚嘆を奉る此等の連中が、功勞の成りつつあるのを壓迫し、又は人が世に知られかけやうとするのを阻害する機會があれば、——彼等がそれを行ふ事に疑ひがあらうか。——詩人が我々に見せる所の者は、その他の藝術家と同じく、箇々の事、個體のものであるが、而かも彼れが自ら認識して、我々にも認識させやうとするのは（プラトーン）觀念、種族全體である、それ故、彼れが示す形像には、人間の性格と境遇の模型が表はれて居る。物語りの詩人、并に戯曲詩人が人生から描き出す所ものは、全く箇々の事で、それを精密に、その個性で描くが、而かも此に依つて人生の生存全體を示し、見た所では箇々の事の様であつても、眞實は、何れの處にも何れの時にもあるものを扱つて居る。それ故、特に戯曲詩人の成句は、必しも一般の事を云ひ表はしたのでなくとも、實生活で澤山に應用が出来る。——哲學の詩に對する關係は、經驗科學の經驗に對すると同じである。即ち經驗の教へる事は、一々の現象を實例として與へるにあるが、科學は遍通概念の力でその全體を總括する。それと同じく、詩は箇々の事を實例として、本性の（プラトーン）觀念を知らせ、哲學は、物事の内實本性で個々の中に現はれて居るのを、全體として遍通に

認識させやうとする。——これで見ても氣が附くが、詩には青年の特質、哲學には老年の特質がある。本當に詩才が活動し開展するのは青年の時のみで、詩に對する感受性も亦青年の時には情熱を呈する事が多い。年をとるに従つて此の傾向は感じ、老年になつては散文の方を好む。青年に此の様な詩的傾向があるために、現實に對する感覚が害せられ易い。即ち詩は現實と違つて、人生を面白く見せ、痛みなしに眼前に之を羅列する、然るに人生は現實では、痛みのない間は興味がなく、興味が出て來れば、痛みなきを得ない。現實よりも多く詩にはまり込む青年は、詩でのみ出来る事を現實に要求するから、そこで才氣のある青年は多く不快の感に壓せられるといふ事が出て來る。——

調律と韻脚とは一つの束縛であるが、又詩人が自ら蔽ふ皮で、その他では語つてならぬ事を、その裏では語つてよく、それが又我々を喜ばせる。——即ち詩人は、その語る所に對しては、半分の責任があるのみで、調律と韻脚とが他の半分を代表する。——調律とは時間の句切りで節律に外ならぬ故、その本性は先天の純粹直觀である時間の中のみあるから、カントの言を用ひて云へば、純粹の感覺性に屬するもの、それと違つて韻脚は、聽

感器で感覺に入る事柄であるから、經驗的の感覺性である。それ故節律は押韻よりも大切で、貴い手段であつて、古代の人は押韻を賤み、それが始まつたのは、前代の言語を悪くし、野蠻な時代に出來た不完全な國語にある。フランスの詩人が貧弱なのは、主として、調律なしに押韻のみに限られて居るためで、その上、この缺點を隠すために、その押韻に澤山ベダント風の規則を作つてむづかしくして尙ほ貧弱になつた、然し、少くともわしにとつては、ラテン語ほど、押韻に心持ちよく又力ある印象を與へる言語は外になく、中世の押韻あるラテン詩には特有の味がある。その理由はつまり、ラテン語が、比べものにならぬ程、近世の何れの國語よりも遙に完全で、美はしく氣高く、そこで元來は賤むで居たものながら、それについた裝飾彫琢が優に美はしく動くためである。

●若し詩人の内證の仕事場をのぞき込み得たとすれば、思想があつて韻脚を求めるといふよりは、韻脚があつて思想を求めの方が、十倍も多かるべく、又思想が先つ場合にも、思想の方で餘程讓歩しなければ、容易に出来るものでない。——此の様な點はあるにしても、韻文術はそれに耳を假さず、何れの時代でも國民でもその方に左袒し、調律と韻脚と

が心持の上に及ぼす力は大きなもので、それに特有な祕密の「誘惑の語」は實に有力である。その理由を説明して見れば、うまく押韻の出來た韻文は、そのエフェクトに如何にも言語に絶した強さがあり、その中に表はれて居る思想は前からしてその國語の中で豫定してあり、出來上つて据え付けられてあつて、詩人は只それを搜し出して來ればよいのだといふ様な感を起させる。何でもない思ひつきでも、節律と韻脚との御蔭で、意味深い様にきこえ、曲がり間違つた考へでも、韻文にすれば眞實な様にきこえる。又その反面に、名高い詩人の名高い文句でも、之を散文に移しかへると、如何に忠實に出來ても縮み上つてしまつて、何でもないものになる。若し眞實なるものが美で、眞理の最も貴い粧ひは裸體であるとすれば、散文で立派に美しく書き表はせる思想は、韻文で始めてさう見えるものよりも一層眞の價值あるものである。——然るに調律と韻脚の如き方法が、その様に力あるエフェクトを呈するのは、實に奇妙な事で、探求に値する、わしはそれを下の様に説明しよう。只言葉のひびきで直接に聽覺に訴へるものは、節律と韻脚との力で、一種の音楽になり、それだけで何か圓滿で意味深くきこえる、そこでそのひびきは、それ自らのため

にあるべきものになり、只の方便でなく、何かを記し出すしるしでなく、言葉の意味を表はすだけでなくなる。そのひびきで耳を樂ませるのが、その天分の全體である様になり、従つてそれを果せば、何も彼も出來上り、何れの要をも充たした事になる。そこで、それと共に、その外に尙何か思想を表はした意味があるとするれば、それは恰も待ち設けなかつた贈物を貰つた場合には、何等の要求もないから、何物でも満足するが常で、そこに不意のうれし味があるに似て居る、その上に又、その思想が、それ自らで、即ち散文で言ひ表はしても意味の多いものであれば大に氣をとられる。この譯で、何れの國語にも、殆ど意味もなく、只響き句調だけの詩があるものである。ギリシヤ戯曲のコーラスには、殆ど謎の如きものの多い事も、此と共に思ひ出される。

眞正の詩人は直にそれと分かり、又劣等者よりも高いと知れるが、そのしるしは彼等の韻脚が無理をせずにある事で、その思想は始めから韻を踏むで出て來るのである。それに反して内證は散文家であるものが詩を作れば、思想のある所に韻を求め、駄作者は韻のため思想を求め。押韻のある詩句二三を見て、その元の親が思想にあるか、韻にあるか

を分別し得る事は少くない。

わしの感じでは、韻脚はその天性自ら二重生で、その効用は同じ音が一度反つて来るにあり、それを多く繰り返しては強くならない。即ち第一の音は第二を通りぬけて第三にまではひびき直らないから、二度以上繰り返すのは美の上での贅句で、何の役にも立たない二重の氣張りである。それ故、押韻をその様に重ねるのは重大な犠牲を出す所以で、第八音韻脚、第三韻脚やソネット(十四行詩)などに此があり、その様な作を時々讀むで見ると、心をいぢめるのみで、頭腦を割る中に詩を樂むといふ事が出来る譯はない。立派な詩人でも、此の形を使へば、その韻脚と思想との間に衝突のあるを見るべく、そのどちらかゞ時に應じて勝を占め、思想が韻脚のために壓迫せられるか、若くは韻脚がやつとの事で弱い思想と合體する事になる。シエキスピアがそのソネットで、四聯句に各々別の韻を踏むだのは、知らなかつたためではなく、趣味の勝れて居たためだと思ふ。

一つの國語で、散文に用ひず、詩にのみ用ひる言葉が多く、又散文の或る言葉を詩に用ひてならぬのは、不利益が多い。詩のみの言葉の多いのは、ラテン語とイタリア語とで、

散文に特有なのがあるのはフランス語で、之を「フランス語の自慢」といつて居る、この二つ共にイギリス語には少く、ドイツ語には最も少い。此の様に詩だけに用ひる言葉は、我々の心に遠く、直接に答へないから、感動を與へない。それ等は詩の上での約束、作り言葉で、實の感じでなく、畫に畫いた感であるから、衷情を押しつける。——此頃は多く、詩でクラシック(古典)風とロマンテック(中古)風との別といふ事を云ふが、その根底は別の事でない、即ちクラシックとは純人間的で、實に又自然な動機以外を知らず、ロマンテックとは約束で造り上げ、想像で仕立てた動機を有効だとするもので、キリスト教の神話から出たもの、それから武士の間に出て、想像で張り詰めた名譽の原則、又キリスト教とゲルマン風との方外にも笑ふべき女子崇拜、おしまひには、空漠で月を慕ふといふ様な形體以外の戀、此等がロマンテックである。この類の動機が、人間の關係と人間の天性とを、如何に變てここに歪めてしまふかは、ロマンテック派の最上の詩人にも現はれ、カルデロンの如きにも見える。それに對して古代の詩は、いつも天然に忠實で、確かに立派な長處があり、クラシックの詩は無條件に眞實で正當であるが、ロマンテックの方は特別の制約の下でのみさう

云へるものである、此はギリシヤの建築とゴテク建築との間柄と同類である。——然し他方で戯曲にしても、物語りにしても、その舞臺を古のギリシヤ又はローマに移したものは、都合の悪い事があり、我々が古代について識つて居る事、特にその生活の細目に至つては、甚だ不十分で、断片的で、直観から得たものでないといふ不利がある。それがために詩人は、已むを得ず多くの事には立ち入らず、只全般の事を用ひるから、抽象に走り、その作には、詩にどうしても本然の事である直観性と個性の表現とを失ふ。これが即ち、それ等の作には皆空虚退屈といふ特有の特徴のある所以。只シエキスピアのみは、此の類の事を描いても、此の弊はなく、その作には、ギリシヤ人やローマ人の名を冠しても、少しも躊躇せずその當時のイギリス人を描き出して居る。

抒情詩の傑作、特にホラチオの歌、又はゲーテの歌の多數に對しては、それ等が正當な聯絡を缺き、全く思想が飛び飛びで出来たものだといふ非難がある。然し此等で論理のつゞきを無視してあるのは故意の事で、その中に表はれて居る根本の感じや氣分の統一をそれ等に代へるため、一々の玉を離れて一つの緒を通す様にすれば、この氣分の統一が特に能く表はれ、その觀察に入る事柄が迅速に變轉するのを、恰も音樂で、一つの音階から他に移るに第七音の階音でして、その中に續いて響いて居る基音が、新しい音階の屬和絃となる様にする。この特色が殆ど誇張にも近いが、最も明白に現はれて居るのは、ペトラルカの「偶感歌」で「されど、我が歌ひ慣れし如くに、君は歌はず」といふ句で始まつて居るなどそれである。

抒情詩で主觀的分子が秀でて居る如くに、戯曲では客觀の方のみが獨り現はれる。この二つの中間には叙事詩があつて、物語り話しから本當の叙事詩に至るまで、色々の形や變形がその中にある。此等は、大體では客觀的であるが、その中には主觀分子が、或は多く出、或は少くなり、或は全體の調子に現はれ、或は物語の形や、又は處々に這入つて居る物思ひに現はれる。此等では、それ故、戯曲での如くに作者自らを全く見失ふ事はない。全體に、戯曲の目的は一つの實例で人生の本性と生存との何たるを示すにある。その中には或は人生の悲惨な方面、或は快濶な方面、或はその移り換はり眼前に現はれる。「人生の本性と生存」といへば、そこに已に争論の種が含まれて居て、本性即ち性格の方が、

又は生存、即ち運命や事件や行爲か、何れが主になるといふ問題がある。然しこの二面は堅く互に結びついて居て、概念では之を分け得るが、その描寫では分け得ない。兎に角、描寫では、此の二方のどちらかが多く表面に出、その關係からして性格劇と脚色劇との二極端になる。

著しい性格を著しい地置において、この二つで生じて來る非常の動作を描くのが、戯曲と叙事詩とに共通の目的であるが、この目的を達するためには、最初に性格を安靜の状態で出して、只一般の着色でその人物を見せ、それから一の動機を持つて來て、それで動作を生じ、そのために又新に有力な動機が加はり、そこで一層著しい動作を惹き起し、その形に相應した時期に達して、初めの安靜に引き換へて情熱の努力が生じ、重大な動作となり、そこで今までは眠つて居た性格の特色が、世界の進行と共に明白な光りに現はれて來る。

大詩人が色々の人物を描く時には、その各々で別の言語を語つて、腹話しの藝人の如く自分を色々にかへ、或は勇者となるかと思へば、又直に轉じて、若い無邪氣な娘として物を云ひ、その何れも皆同じ様に眞實に適ひ自然に副ふ、シエキスピアやゲーテの如きは是れである。第二流の詩人になれば、描き出すべき人物を自分に換へる、バイロンの如きは是れで、その場合には副人物には生命はない、平凡詩人の作に至つては主な人物にも生命はなくなつて居る。

第七章 歴史について

人間の本性を認識するには、詩の方が歴史よりも多くの功のある理由がある。その點からいへば、又本當に教訓となるものも、歴史よりも、詩の方に多く求むべきである。アリストテレスも已にこの事を見て、云つて居る、「詩は歴史よりも哲學的にして、又優秀なり」然し、それで歴史の價值について誤解を惹き起さない様に、それについてわしの思想を茲に述べやう。

何れの種類、何れの族類の物事にも、事實は無數で、一々の物には無限に多くの事があ

り、その差別相の雑多な事は到底盡せない。——然るにそこに科學が現はれ、無數の多い事を分別し、それで遍通と特殊とを認識する路を開き、この認識で無數の物事に纏めをつける。此の方法で科學は、探求の精神に満足を與へると約束する。然るにその上に又哲學があつて、最も遍通で又従つて最も重要な理知として、科學の上に立ち、それ等が豫備をしたものに解釋を與へると誓ふ。——歴史のみは、他の科學の誇りとする長所を具へず、知識の上下從屬がなく、只知つた事を同等に并べるのみである。歴史は理知ではあるが、科學ではない。それには遍通に依つて箇々を認識するといふ事は少しもなく、直接に箇々の事を捕へるのみで、云はゞどこまでも經驗といふ地面を這ふのみ、科學は概念の系統であるから、常に族類について説き、歴史は個體を語る。それ故、歴史は個體の學といふべきで、それが己に矛盾の言葉である。又上に云つた事の結果として、科學は盡く常にあるものを説くが、歴史は只一度だけあつて、復出て來ない事を説く。歴史は全く箇々の事、個體のものに關係して、その性質として盡きないもの、それ故何事を知つても皆不全で半分のみである。その上又日毎には日毎の出來事があり、今までに知らなかつた事を教へる。

歴史の中で最も遍通だといふものも、それ自らでは實は箇々のもので、長きに亘つた時の分界、又は主な事件で、此に對する特殊は全體に對する部分であつて、規則に對する實例でない、然るに本當の科學では何れも規則を基にして實事を扱ふので、その規則は概念を與へるもの、只事實のみを示すものでない。この譯で、遍通をさへ正しく知れば、それに依て現前の特殊を確かに定め得る。然るに歴史ではさう行かないで、そこで遍通といふのは、概念についた客觀の遍通でなく、こちらの知識で主觀の遍通のみ、それを只表面の上で遍通と呼むで居るのである、それ故、三十年戦争について、それが十七世紀に起つた宗教戦争だとは、遍通に知り得るが、この遍通の知識は、その經過の細目に關する知識をば少しも與へない。——この對照に加へて尙、本當の科學では、特殊箇々の事は皆直接の知識に基いて最も確かなものであつて、遍通の眞理はそれから引き出して始めて得られる、それ故この方では迷ひが這入り得る。歴史ではその反對で、最も遍通の事が最も確かなので、時代だとか、王統の相續、革命、戦争、媾和などは確かであるが、それ等の事件やその關聯の特殊の事になれば、不確が増し、段々細目に入つて箇々に進めば益す不確にな

る。そこで歴史は特殊になるほど面白味は増すが、又それだけ信用の度が減じ、何れの點から見ても、小説に近づく。——その外、歴史は事實の材料に基くといつて誇りになつて居るが、人が自分で考へて見ても、一生の中の事件やその眞實の關聯について、材料が十分にあつても、二十年後になつて、始めて眞に人を理會する事も往々ある、即ち偶事が始終加はり、見當が隠れて居る間で、動機の働きを能く配合するのは非常の難事である。——歴史が題目とする事は、本來いつも箇々の事で、そのみが實だとするのであるから、哲學の丁度反對、又反面であつて、哲學は物事を遍通の見地から觀察して、あらゆる箇々の事が一貫して變らない遍通を題目とし、従つて特殊の中にもいつも遍通を見、特殊の變轉や現象を本性ならざるものと認識する、歴史の教へる所は、何れの時代にも各々違つた事があつたといふにあるが、哲學が勉める所は、一切の時に亘つて同じものがあり、又將來にもあるといふ見識を興へるにある。然るに歴史はこの深みに代へて長さと弘さを取らうとし、その眼から見れば、現在は只一つの斷片たるに過ぎず、それを補ふには過去があり、その長さは無限に延び、又現在に結びつく將來も同様無限である。それ故、哲學的頭

腦は根本を衝かうとし、歴史的頭腦は終りまで數へやうとする、この二種の頭腦の反對は此の理に基く。歴史がその各頁に見せる事は、同じ事を違つた形にしたのみであるが、その違つた形の二つ又は二二でも認識し得ない人は、あらゆる形を涉獵して見ても、それを認識する事は出来ない。色々の國民の歴史は、何れの章節でも、名と年數とは違つて居るが、本當に本性の内容に至つては、どこでも同じである。

歴史の實質は、一々の事をその箇々相、偶事の姿で見るので、一度出て來ては、後は失せてしまひ、雲の風に吹かれる様に動搖定まりない人間世界の、生滅變轉の葛藤が歴史の題目、而して此の葛藤は、極めて些細な偶事で、も、全く變形する事が少くない。此の點から見れば、歴史の材料は、人間の精神が眞面目に骨折つて觀察するだけの價のないもので、人間精神は生滅のもの故、不生不滅なものを觀する様になければならぬ。

第八章 音樂の形而上論

この不思議な藝術の本當の意義を見れば、この藝術の仕事と、現識としての世界、即ち天然との間には何等の類似もないが、そこに明白な平行があるべきで、茲に此等の事を説かう。

他の藝術は意志の客觀化で色々の度合にある觀念を表はすが、音樂はさうでなく、直接に意志そのものを表はす、そこで音樂は、直接に聽者の感情、情熱、感動、即ち意志の上に直接に働きかけて、忽にそれを高めたり、調子を換へさせたりする。

音樂は詩の補助であるなどいふものでなく、獨立の藝術、あらゆる藝術の中で最も力の強いものであつて、その目的を達するには、特有の方法に依るのみである。それ故、歌の言葉や、オペラの動作などはなくてもよい。音樂はそれ自らには只音を用ひるのみで、音を生ずる原因に關係しない。それ故、人の聲でも元來本性の上では昔の一變態で、樂器の

音と別でなく、音を出す樂器に伴つて各々固有の利害長短がある如く、聲にも又その長短がある。聲の場合には、その樂器「即ち發音機關」が、又同時に言語の道具で、概念を傳へる用をするのは偶然の事情であつて、音樂はこれを序手に利用して、詩との結びを附けるが、然し之を主な事とし、全く詩を表はすものとしてはならず、それ等の詩句は多くは、否本來淺薄なものである。言葉は、音樂にとつては外から來た附物で、一段底い價值のもの、音のエフェクトは言葉よりも遙に強く、又仕損じなく速に効力を呈する、それ故、言葉を音樂の中に入れても、全く副位置において、全く音樂に隨順すべきである。然るに何か一つ詩歌があり、又はオペラの本文があつて、それに音樂の手をつける場合には、この關係は顛候してしまふ。音樂が、それ等の言葉で表はして居る感情やオペラに出て來る動作の上に加はつて來れば、音律美術の力と高等な能はその上に發揮して、最も深い根本の祕密を開く鍵を與へ、詩句動作の本當眞實な本性を言ひ表はして、舞臺の上では皮と胴體だけを示して居る事態事件の最も内實な心を我々に教へる。音樂が此の様に優れ、それと本文や動作との關係は、遍通と箇々の事との關係、規則と實例との間柄であるから、この

點から云へば、本文について音樂を作曲するよりも、音樂について本文を作る方が適當であらう。音樂に詩を加へるのは人の好む所であり、理會し得る言葉で歌ふのは、人が衷心に悦ぶ所であるが、此は要するに、我々の認識工合で最も直接なものと最も間接なものが、同時に又合體して行はれるため、直接な方では、音樂で意志自らの動搖を表はし、間接な方では言葉で概念を記し出す。音樂は自分だけの方法で、意志の動搖、感じを一々に表はし得るが、それに言葉を加へては、言葉で表はして居る物事、即ち感じを起こさせる動機である對象が加はる。——曲譜に表はれたまゝのオペラの音樂は、それ自ら獨立で分別し、云はゞ抽象の存在のあるもので、此はその芝居の事件や人物に關係はなく、曲譜だけに固有で不變な規則に従ふもの、それ故その言葉の本文なしにも音樂としてのエフェクトはある。然るに、この音樂は、戲曲のために作曲したもので、戲曲の事件一切がこの意味に基いて進行する根本、又その隠れた必至を示すにあるから、云はゞ戲曲の魂である。この事をおほろけに感ずるのが、即ち見物の樂みになる點である。然るにオペラでの音樂は、此等の進行について、その實質の方面には全く頓着しないで、音樂の雜多な性質

や、又は事件以上の本性を示す、そこで情熱の嵐や感じの情致を表はすにはどこでも同じ様な工合にして、その音律は何れにも同じ様な飾り立てです。音樂に取つて現前のもは情熱と意志の動搖變化のみで、その見る所は、神様が見る如くに、只心情のみである。そこで音樂がその材料に同化する事は決して出來ず、滑稽オペラで可笑しく又埒もないおどけに演奏しても、その本來の美と純潔と崇高とはそのまゝで、假令へその曲の進行と合體しても、自分自らは元來此等の滑稽と縁のないものであるから、高い處から下つてしまふ事は出來ない。そこでおどけ道化にも、人生の無限な悲慘にも、共に人生の深く又眞面目な意味がつき纏ふて、一瞬でも人生と縁を絶たない。

次に器樂について少し觀察して見るに、ベートーヴェンのシンホニーの如きは、極度の混亂を表はして、而かもその根底には最も完全な秩序があり、戦闘の極度に達しても、直ぐ次に最も美はしい調和になり、茲に『物事の不調和な調和』を示し、世界の本性について忠實で完全な寫しを表はし、世界には無數の姿が現はれて、見亘す事の出來ない混亂の中に、不斷に破壊しつゝ自ら保存して行く相が表はれる。然し又それと共に、此等のシンホ

ニ一には、あらゆる人間の情熱と感動とを語り、喜悅、悲哀、愛情、憎惡、恐惶、希望などが無數の段取りで表はれるが、それ等は皆云はゞ抽象的に、分別なしに表はれ、實質のない方式、物質のない精靈の世界を語る。それを聽けば、我々は音樂を實にし、空想で肉や脚をつけて、その中に人生や天然のあらゆる類の光景を見やうと執念する。然し、音樂を直接に又純粹に會得する方が、之を實にして空想するに勝る。

音の調和といふのはその振動の協合から出る事で、二つの音が同時に響いて、その第二又は第三、又は第四の副振動が合し、そこでそれが互にオクターヴか、又は第五音か第四音となるにあるのだといふ。即ち二つの音の振動が、大きくない合理數で表はせる關係で出來て居れば、その協合は反復して響いて、我々の領解の中で關聯し、そこで二つの音は互に融和して調和する。それに反して、二つの關係が不合理數であるか、又は大きな數でなくば表はせないものならば、その振動の協合は分かりにくく、二つはいつもがぢや〜鳴つて、こちらの領解で聯合がつかず、そこで不協和となる。音樂の形而上の意義と、この形而下で算數的の基本と、二つは相關聯して居て、不協和即ち不合理で人の領解に背反

して居るのは、即ち我々の意志に背反して居るを天然の形に見せたもの、その反對に、合理、即ち協和は容易に會得に入るもので、意志の満足を表はして居る。この振動の合理數と不合理數との關係には、無數の度合、段取り、つゞき合ひ、變化があるから、これを使つて音樂は、人間の心情即ち意志のあらゆる運動を忠實に寫し描く材料になり、意志の動機は本性の上では満足と不満足とにあるが、それが無數の度合に現はれるから、音樂はその極めて微細な色合ひや變化で之を寫し出す。此は即ち旋律のやり方で出來る。即ちこゝでも意志の運動を只現識のみの境界で示し、意志自らはその遊戯以外に留まつて、只その代用で知力に適合したものを意志満足の映像とし、知力に背反するものを、苦の映像とする。さういふ工合にすれば、音樂のために實の惱みの生ずる事はなく、その和絃は極めて悲しくても、それを樂み得、人は喜んで音樂の語る言語の中に意志の内祕の物語りを聞き、その動搖と努力、その様々な逡巡、妨害、苦惱をも、極めて哀れけな旋律の中に喜んで聞き得る。それに反して、若し事實それに恐怖があれば、意志自らが動搖し苦惱して、その場合には音とその數の關係の事でなく、我々自らが絃となつて、張りつめ、切々とし

て鳴る。

旋律を作り上げるのは、律節と和音との二分子であつて、律節は數量の方で、音の長さを表はし、和音は性質の方で、音の高低に關する。之を譜でいへば、律節は垂直線で、和音は水平線で表はす。この二つ共に算數的關係で、時間に基き、律節は音の相待の持続に、和音はその振動の相待の速さに基く。律節の方は最も大切であつて、それがあれば他はなくとも、一種の旋律を作り得る事は太鼓でも分かる、然し完全な旋律には兩方共になくてはならぬ。即ち旋律は、この二つを互に分けたり合はせたりするにある。

時間での律節は空間での齊均に當るもので、同じ様に互に相應する部分に分ける事、その中に大の分と、それについだ小の分とに分かれる。段々に示して來た藝術の中で、建築と音楽とはその兩極端になつて居る。この二つは、その内實の本性でも、その力でも、その領分と意味との範圍でも、別種のもので、相反した兩極になつて居、その現はれる方式にも此の對立は見えて、音楽は時間のみにあつて空間には關係しない。然しこの關係からして二つの間の唯一の類縁が出來、秩序を作り聯絡を保つには律節が之に當り、

そこで兩端は相觸れる。音曲は全く同じ拍子で出來て居る、而して同じ分に分けるには、尙又その高低ですか、若くは拍子の種類に表はれて居る時の分拍數で、同様の分に分ける。拍子がいくつも集まつて一つ音楽上の句切りが出來、それは二つの等分になつて、一つは高く上つて高まり、多くは屬和絃に進み、他の一つは低く下つて靜まり、基音に戻つて行く。二つ又は二つ以上の句切りが集まれば一つの分が出來て、それは大抵反復の記號で示して、同じ様な齊均で相重なる、この分が二つ寄れば小な一曲になり、又は大きな曲中の一ザツツにかなる、即ち三つではコンツェルトか又はソナタになり、四つではシンホニアになり、メス樂は五つで出來るが常である。此の様にして一曲を齊均に分け、それを又々分けて行けば、拍子とその分拍子とに至り、その局部がどこまでも互に上となり下となり、又相隣つて、一つの全體を作り上げる、此は建物での齊均と同じであつて、建築の方では空間のみにあるが、音楽の方では時間のみにある。建築は音楽の氷結だといふ大膽で又頓智のある言ひ方が、三十年以來行はれるが、此はこの類縁を感じての事である。音楽と建築術との類縁は、律節と齊均の類縁から出た事、その外形に關するのみで、この二

つの藝術の内實本性には天壤の差があつて、決して同じものではない、一切の藝術の中で最も制限があり又一番弱いものと、最も弘くて又最も効果の多いものとを、本性の上で同等にしやうなどは、實に笑ふべき事。今こゝに云つた類縁を擴充して、加へておかうが、いはゞ獨立を求め一發作の様にして、音樂が一つ段落の終りを機會にし、律節の強制を脱して、修飾のある崩して自由の空想に走つたとすれば、この様にして律節を離れた楽曲は、建築の廢墟が齊均を脱したものともしふべく、頓智の言ひ方で大膽に云つて見れば、廢墟は崩しの氷結したものである。

和音の要素は基音に基き、律節は拍子の種類に基き、和音は音階中のあらゆる音を取つて基音から離れ、長いか又は短い迂路をして一つの和音階に達し、それではまだ十分に落ちつかず、それから又同じだけの長さの路をたどつて、基音に歸り、そこで全く落ちつく。然し此の様に上るにも下るにも共に、律節の或る要點と一致すべきで、その和音階を上るのも、基音に歸るのも、此と合はなければ、エフェクトはない。即ち和音のつゞきはいくつかの音があり、特に主和絃があり、それに次いで屬和絃があるべきであるか

ら、律節は、又自分の方で、いくつかの時間の點がなくてはならず、拍子とその部分とでちやんと數へられるものがあるべく、所謂軽い時、又は揚音のない拍子と稱するものに對して、重い時、又は良い時、又は揚音の拍子と稱する。それからこの二つ「律節と和音」とが相分れるのは、その一方の要求は満足しても、他が満足しない場合であり、その合ふのは兩方が同時に一緒に満足を得るにある。音のつゞきが基音から動き出して、どれだけが調和のある音階に達するまで行くには、どれだけの拍子の數を経た後に、拍子の良い時に合して、そこでこの和音階が音のつゞきの中での一つの休息點になるべきである、それと同じ様に主和絃に歸るにも、同じだけの拍子の數を経て、一つ良い時に戻るべきで、さすれば完全な満足を得る。この二分子の満足が、此の様に一緒に合はない場合には、一方では、律節は自分の規則通りの路を進み、他方では必要なだけの音符は十分度々出て來ても、そのエフェクトはなく、旋律とはならない。

この様にして始終相次いで、この兩要素が離れては又合するのは、之を形而上的に見れば、新願望が生じては、それから満足を得る姿である。この様にして音樂は我々の心に媚

を呈して、その願望が十分に満足するといふ事を常に見せてくれる。尙能く之を見れば、旋律の此の様な進行は、その内部の意義(和音の方)と外面の意味(律節の方)とが、偶然であるかの如くに相合するのであり、此く相合するのは、我々の願ひがそれとは別で而かもそれに都合のよい外部の事情と落ち合ふ姿といふべく、即ち幸ひの形である。——此と共に注意を要するのは、繋留のエフェクトである。即ち一つ不協和音が出て来て、そのために確かに出て来べき終節の協和音を控へるから、その終りに對する希求は一層強くなり、それに對しては満足はそれだけ圓滿である、此は明かに、意志の満足が抑留のために一層強くなる事の類縁である。くづしを完全にするには、その前の第七音和絃にあるを要する、即ち慾望が最も切迫すれば、それに次いで得られる満足を最も深く感じ、十分の落ち着きを得る。即ち音楽は、どこまでも多少不安分子があつて、希求を動搖させる和絃と交替して、どれだけか満足を與へて安靜にする和絃と常に入れ替はるにある、不協和と協和とが藝術の規則で轉變するのが、即ち和音の進行である。それ故、假令へ不安を與へ、殆ど苦痛にはなつても、不協和を入れるべきで、それに次いで、又適當の準備の後には、

再び協和に融ける様になければならぬ。本來音楽にある根本の和絃には、不協和の第七音和絃と和音の三和音との二種があつて、その他の和絃は皆此の二つに歸着する。心持ちの根本の氣分は只二つで、快潤、又は少くとも爽快と、憂愁若くは懊惱と、この二つがあるが、音楽には一般に音階の種類として、長音階と短音階とがあつて、先の二つに相當し、各々相適合する。その中で短音階が、物理的に痛を與へるのでもなく、又約束で定めたのでもなくて、而かも直下に心に訴へて、間違なく痛みのしるしになるのは、最も驚くべき事である。それで見ても、音楽が、如何に深く物事と人生との本性に根ざして居るかを見るに足る。

第四卷補説 道德と解脱

第一章 死と本性の不滅

動物は死といふ事を識らずに生きて居る、それ故、動物の簡體は自分の族に終りのない事を意識して、直接に族類の不滅を全體として享けて居る。人類には理性が生ずると共に、又必然に死の必至を思つて恐れを抱く。天然の中にはどこまでも、何れの害にもその救治方があり、少くともその代償があるから、死の認識に伴つても亦、それと同じ考慮で形而上的の見解が生じ、人はそれで安慰を得、動物が要しもせず又能くしないものを得る。色々の宗教や哲學の學系も、主としてこの目的を目當てにし、死はどうしても免れないといふ事に對する對治劑となり、先づ考慮の理性から自分の方法で之を作り出す。然しそれ等が此の目的を達する度合には甚しい差違があり、或る宗教又は哲學は、他のものよりも

遙に多く、人間をして靜かに死に面して立たしめる力がある。婆羅門教や佛教は、人をしつて自ら本元の本性である梵たる事を悟らしめ、此の本性は本來、生と滅とは障へられないと教へるから、他の宗教で人間は無から造られたもので、誕生は即ち人が他から受けた生存の始めだと教へるのよりも、多くの効力がある。その譯で、印度人には安心と死を輕んずる事が著しく、ヨーロッパでは想像し難い位なものがある。

兎に角、少くともヨーロッパで、死について教へて來た所では、人間としても、又同一個人でも、いつもあちらこちらにぶらつき、死は即ち全然の滅だといふ會得と、他方では、云はゞ皮も毛も共に不死だといふ解釋と、この二つの間に彷徨して居る。この二つ共の間違ひであるが、又その中間が正しいのでもなく、寧ろ一層高い見地に立つて、此の様な見解を去る様にすべきである。

この觀察をするに、先づ初めには全く經驗の立場から出やう。——そこで第一に出て來る事實として、人はその自然の意識で、自分自らの死を恐れる事は、他の何事を恐れるよりも強いばかりでなく、又自分の眷屬の死には甚しく慟哭し、而して此は主我の心から自

分の損失を悲むのでなく、同情からして彼等の大きな不幸を哭するのである、それ故、此の様な場合に哭せず、愁を表さないものは、慳で情のない人として之を非難する。此と平行して、敵に對しては、彼れが蒙る最大の害として、その死を希ふ。天然の言語でいへば、死とは滅の事。死が眞面目の事だといふのは、何れの人も知つて居る通り、生がおどけでないといふ一事からも見える。

死を恐れるのは、實に一切の認識を離れた事で、動物は死を識らないが、之を恐れはする。生まれたものは皆それと共に死を恐れる。我々は皆生きやうとする意志であつて、又反面では先天的に死を恐れる。それ故、何れの動物でも、自分の維持に配慮するのと、自分の滅を怖れるのとは、共に天性であり、動物が危難を加へさうなものに對して、自分なり又自分の胎兒を守らうとして、非常に懸念し用心するのは、單に痛みを避けるのでなしに、この天性に基く。人間も亦、天性此と同じである。害の最大なもの、どこにも出て来る危害の最悪のものは死で、懸念の最は死の懸念である。他人が死に瀕するのを見るほど、同情に堪えられず、心を奪はれる事はなく、死刑の執行ほど恐ろしいものはない。こ

の様生命に對する執着は、無際限に現はれるが、此は認識や熟慮から出たのでなく、熟慮から見れば、死を怖れるのは愚であつて、生きて居るのは生命の客觀の價值からいへば何でもなく、少くとも生きるのと滅とはどちらが優るか疑はしく、經驗や熟慮から云へば、滅の方が却て得である。生命の執着は有力であるが、非理で盲目の事、但し我々自らの自爾の本性がそれ自らで、生きやうとする意志であるがためにこの事が起るので、生命には如何に苦みが多く不安があつても、それを最高の寶だとせざるを得ない、而してこの意志は自爾に本來盲目で、認識のないものであるから、この執着がある。それに反して、認識は生命に對するこの執着の源であるどころでなく、却てその反對に立ち、生命の價値ない事を暴露して、死の怖に對して戦ふ。——そこで認識が勝つて、人が勇氣を以て落ついて死を迎へると、それを偉大で高尚だとして尊重し、我々自らの本性の核實になつて居る盲目な意志に對して、認識の勝利を壯とする。それと同じ様に、人あつてこの戦鬪に際して認識を屈服し、どこまでも生命に執着し、死の近いて來るに對して非常にもがき、而して終に失望の中に死を迎へる場合には、世はその人を賤むが、それでもそ

の人は、我々自らなり又天然の本來の本性を表はして居るのである。この様に際限なしに生を愛し、あらゆる手段を盡して少しでも生命を長くしやうに努めるのがどうして賤むべく輕蔑すべきであるか、又若し生命が親切な神様の賜で、感謝を以て受けるべきものならば、何故に何れの宗教の信者にとつても、此が品格に背く事になるか。又どうして生を輕んずるのが偉大で高尚に見えるのか。——此等の觀測からして確め得る事は、(一) 生きやうとする意志は人の最も内實な本性である事、(二) この意志は、自爾には盲目で認識のない事、(三) 認識は本來意志に縁はなくて、次に加はつて來たものである事、(四) 認識は意志と戦ひ、人は意志に對して認識の勝つのを是認する事、是れである。

若し死が左程に恐ろしいのは、滅といふ事 of 思想であるとすれば、我々は自分の生きて居なかつた時を考へても、同様に戰慄しなければならぬ筈。自分がまだ居なかつた時にも、長い長い無窮があつたのであるが、その事は愁の種にならない。それに反して、自分が居ない様になつて、この影の如き生存の一瞬の中休み、の後には、第二の無窮がつゞいて來るのは、つらくて、どうも堪えられない。此の様に生存に渴するものは、それを味はつ

て見て、非常に結構なものだと知つたがために出て來た事であらうか。前にもいつた如く、決してさうではない、今までの經驗からすれば、非有の樂園が消え失せたのに對して無限の思慕を捧げるべきでないか。それから又 靈魂不滅といふ希望を繋ぐのも、皆何か「二層よい世界」にあり、——此はこの現世が餘まり好ましいものでないしである。然し認識が意志に買収せられないで居れば、この問題ほど自然に出て來るものはなく、即ち自分の生まれる前には無限の時が経過した、その間此の我れは何物であつたのか。——形而上的に云へば、かうも答へ得る、『我れはいつも我れであつて、その無限の時間を通して我れといつて居たものは即ち我れであつた』。然し此れでは、尙全く當面の經驗的立場を見ないもので、今までは我れはなかつたのだとして居るのである。若しこの方から云へば、此より後我れがない様になるべき、死後の無限時についても、今までに居なかつた前の無限時と同じだとして、これは今までに慣れた状態、甚だ都合のよい状態だとして安心し得やう。爾前の無限には自分が居なかつたとすれば、爾後の無限に自分が居ないでも、何の恐れる事もあるべきでなく、この二つの間に這入つてそれを分けて居るのは、この影

の如き夢の一生である。死後の生存が證明せられるなら、それは又爾前にも同様に用ひらるべきで、印度人や佛教徒が貫徹して證明して居る如く、生前の存在も亦解明せられるべきである。此等の謎を解き得るのは、カントの如く時間の觀念性を見る一事にあるが、その事は今之を説かない。然し兎に角、今までにいつた事から見れば、我れが生存しない様になる今後の時間を悲むのも、今までに居なかつた時を悲むのと共に非理であつて、自分の生存が今充たして居る時間に對して、それが充たさない時間は、未來でも過去でも別があるべきでない。

又時間についての此等の觀察を離れて、それ自らで見ても、非有を一つの害だと見るのは非理で、害といひ、善といふのは共に生存あつての後、又意識あつての事であり、而して意識は睡眠や卒倒でも止む様に、生命と共と熄むものである、それ故意識がなければ害悪もない事は分かりきつた事、又安心すべき事で、害悪の生ずるのは只一瞬の事である。認識の立場からいへば、死を恐れるといふ根據はなく、意識といふのは認識の中にあるもの故、此に對しては、死は何等の害悪でもない。而して又死を怖れるのは、實に我れの中

に認識する方面でなく、何れの生き物も抱いて居る死の忌避は只盲目の意志から出るのみである。ところが死を怖れるのは意志の本性であり、意志といふのは即ち生きやうとする意志であつて、その本性は全く生命と生存とを求める強壓から成り、認識は本來それについた事ではなくて、意志が動物の簡體と客觀化した結果として出て來たものである。そこで認識の媒介で、意志はこの現象と己れとを同一とし、自分はこの現象に限られて居ると見て、死は即ちこの現象の終りだとして之を忌避し、あらゆる力を盡し、自分の本性全體でもがく。

此等の點と相合して見れば、死を恐れるのは、生命が終るといふ點にあるのでなく、又有機體制の破滅にあるのでもなく、體制の破滅を感じるのは、疾病や老年などの害にのみあつて、死は、主觀にとつては、腦髓の活動が止熄して意識が消滅する一刹那の事に過ぎない。死につゞいてこの止熄が他の局部に蔓延するのは、本當は死んだ後に起る事である。それ故、主觀の方から云へば、意識のみに關する事である。意識の消滅といふのがどういふ事であるかは、何れの人も睡り入る事で幾分か之を判定し得、又本當に昏倒した事

のある人は、その移り行きが徐々と來ず、夢睡の中間などもなしに來て、意識の十分ある間にも、初めに視力が消え、それから直に深く無意識に入つて行くのであるから、一層能く死を判する用に立つ、その間の感覺は不快といふのでもなく、睡眠が死の兄弟だとすれば、昏倒はその雙生の兄弟である。水に溺れたり、炭酸氣で窒息し、又は縊死を謀つたものは、皆苦痛がなかつた事を言ふ。又本當に天然の死、老死、命數の死、いつとも知れずに、段々消え行く様に生存をぬけ出るにある。老年になれば、段々に情熱や情慾がなくなり、その對象を感受しない様になり、感動が動搖しない様になり、現識する力は益す弱く、その形象はおほろに、印象は留まらなくなる。老顏の人はあちらこちらにぶらつくか、又は隅に靜坐し、その會つて生きて居たものの影、幽靈として生存する。さすれば、死がその上に尙破壊すべきものがどこに残つて居るか。

生命の徑行には形而上の基本はあるが、而かもそれを維持するには、抗抵もあり、努力しないでは出來ない。即ち此は有機體制が毎夜入る状態で、その時には腦髓の作用を止め、又或る分泌や、呼吸、脈搏、熱の發生を減する。一體、死ぬ刹那は、苦しい悪夢から

覺める時に似て居やう。

その上、死が何か善で、願はしい事、良友ハイン「死」である事も多くあるらしい。人の生存や又その努力には、打ち勝てない障害があつて、いつも衝突し、又は不治の病や、慰め得ない憂惱に沈ましめるが、——此等はその最後の逃げ場、大抵は自然と出て來る逃げ場を得て、天然の懷に歸つて行く、元來生物はこの天然の懷から他の事と共に出て來て、暫くその上に表はれ、自分に得られる生存の都合よい状態を望むで、その望みにつれて居るのであるから、その出て來た元の路はいつも開いて又それに歸り得るのである。然しこれは、形體なり又道德の上で戰鬪を経た後に出て來る事であり、そこで何れの人も、この悩み多く樂み少い生存に、うっかり又好むで出て來た、その元に歸らうとひどくもがく。

尙經驗の立場から見れば、次の様な觀察は自然に出て來る事であらう。尸體を見れば、感動性、發動性、血液の循環、生殖作用などは茲に止熄して居るのを見る。そこで確かに推して、今までその中で動いて居た事は、今は已に動かす、その働きは去つたと斷じ得る。——そこで尙附け加へて、此が即ち意識として、即ち知能としてのみ知れて居たもの

(靈魂)であつたに違ひないと云へば、明白に間違つた推論である。意識は有機身體の成果として出たもの、その原因でなく、生じては滅し、その制約が具はれば復生するが、それ以外には生じない。その上、意識が全く錯亂して狂氣になつても、生命の危険を與へもせず、發動性即ち筋肉の力は却つて高まらぬ、他の原因が加はらない以上は、生命は長くなる。——それから又、今までに見て来た如く、個體性は有機體の特性であり、此が意識を表せば又意識の特性となる。然し又他方で、今有機生命は息むだから、それを動かして居た力も亦、虚無に歸したといふ事も尙更出來ない、振子はその重點に歸つて靜かになり、一箇として生きて居る様に見えたのが留まつたからといつて、重力が滅したと思ふものはなく、重力は無數の現象の中に今まで通り動いて居る事は分かりきつて居る。この譬喩に對して非難を加へ、この振子にも重力は働き止むだのではなくて、目に見える活動を示さないのみだといへるが、この事を主張する人には、その代はりに電氣を發する物體を考へて見れば、放電の後には、電氣は本當に活動を止めたといふ事は承知し得やう。わしが此を云ふのは、最下の天然力にも久遠性と遍在性とがあつて、その生滅の現象は止むでも、此等

は滅しないのは明かであるといふ事を示したためである。さすれば一層近接して、今止むだ生命を今まで動かして居た力は、又今發達しつゝある生命の中に働いて居ると、同じ力だといふ思想を得、此の考へは拒み得ないものである。それから又、生滅するのは、因果の連鎖の中にあるものゝみである事も確かだ、即ち生滅するのは状態と方式のみ。それに反して、原因から生じて來る變轉に障へられないのは、一方で物質と他方で天然力とであつて、この二つは一切の變化に先つた基本である。我々を活かして居る力は、先づ第一には少くとも天然力として考ふべきもので、尙深く探つて、それが自爾には何物であるかを認識するまではさうしておかう。天然力としてだけでも、生命の力は方式や状態の變轉に障へられず、方式や状態は因果のつなぎで生じて來又消え去り、經驗に現はれる生滅に從ふのは此の方のみである。此の不滅にはどれだけの意味があり、生命の最も内實の力、死には障へられない或る物であるだけは、十分確かであるから、死を絶待の滅として怖れる人も、之を輕んじてはならぬ。——又奇説の様にもきこえやうが、第二のもの即ち物質も、天然力と同じ様に、因果の聯絡で出て來る状態の變轉には障へられず、絶待に固執す

るものであるから、此だけにも或る不滅があるのは確かである。『何、只の塵、粗な物質が固執するといつて、それを我々の本性の永續だといへるものか』といふであらう。——オホ、お前達はその塵を能く識つて居るの。それが何物で又どんな事をするか、識つて居るの。それを輕蔑するに先つて、能くそれを知るがよいよ。この物質は、今は塵や灰で居るが、それが水に解け、結晶すれば、金屬の光りを放ち、それから電充の火花を飛ばし、流動電氣をかけると極めて堅固な化合をも分解し、土を金にする力を出す、此等は又それ自らの中から動物をも作り、その秘密の懷の中から生命をも開發するのよ、而してお前達が狭い根性から、それを失ふのを怖れて氣遣ひし心配して居る生命が此から出て來るでないか。この様な物質が永續するといふ事が、何でもない事なのかね。わしは眞面目に斷言する、物質のこの固執性は、我々の眞實本性の不壞に對して、やはり一つ證言を與へるものである、勿論形容か、又は譬喩か、又は影の輪廓であるにしても。この事を見るには、物質の事を解釋したのを参照すべきで、その結果では、純粹で方式を離れた物質、此が即ち物自爾、即ち意志の直接な反射、その見える様になつたものである、それ故、經驗の制

約の下で、この物質に適用すべき事は、又全體として意志自爾にもあてはまり、その眞の不滅は時間の中での不滅といふ形で現はれる。

こゝまで云つて來た觀察は、これに續く解釋の元であるが、此の觀察は、一切の生類が著しく死を怖れる事で始めて來た。そこで見地を換へて、一々のものゝ反對に、天然全體が死に對してどういふ關係にあるかを觀察しやうが、それにも尙いつても經驗の根據と地盤とに立つて進まう。

生死を賭する以上の賭博は世になからう、此を決するに當つては、人は極端の緊張や關心と又畏怖とを以て之に對ひ、我々の眼中では、此の一事が即ち一切の中の一切である。——それに反して、天然は決して欺く事はなく、正直に公明であるが、箇體の生や死は何事でもない。而して動物でも人間でも、その生命は極めて何でも無い偶事に曝されて居て、天然は之を助けやうともしない一事に現はれる。——行く路にある昆蟲を見よ、お前達の足踏み一つ、何とも思はずに一寸足を踏み出しても、昆蟲の生死を決する堺目になるでないか。此等は皆用心もせず、いつ自分の生存を絶たれるか分からない危険の中に、

他愛もなしに居る。この様にして天然は、有機體制の言語に絶して巧妙に出て居るものをも、強者の貪婪に委するばかりでなく、極めて盲目な偶事や、愚人の勝手や小供のわんぱくに委して、少しも顧みず、此等の個體の滅亡は天然には平氣の事、又此等の場合には、結果「死」は、原因と共に一向關しないと公言する。それを天然は明白に公言して、又欺かない。萬物の母が、此の様にその兒等を顧みず、少しも保護を加へずに、千百の恐ろしい危険に委し去るのは、つまり彼等が亡びては、又母の懷に歸り、そこに隠れるから、その滅落は單に一つの洒落に過ぎないと知つて居るためである。又その母が人間に對しても、動物に對すると違つた事はない。さすれば、我々自らも亦天然であるから、或る意味でいへば、生死は我々にとつても何でもない事ではなくてはならぬ。我々自らも深く見さへすれば、天然に賛成して、天然が生死を見る様に平氣にあるべきである。それと共に又能く考慮して見て、天然が個體の生命に對して懸念もせず又平氣であるのを解釋し、此の様な現象の破壊は、その眞實で本當の本性に少しも死突するものでない事を見るべきである。知力は本來意志に動機を與へる役目を勤め、意志がその些々たる目的を追ふ御用に立つ

だけのものである。

そこで尙、天然について偏見なしに客觀的に天然に對する我々の觀察をつゞけやう。——例へば、犬でも、蛙でも、若くは昆蟲でも、一つ動物を殺さう、この場合に、この生物が、若くは又此の様な驚嘆に餘りある現象を今の刹那までに活かし、その勢力と生命の樂みとを十分に發表させて居たその根本の力が、虚無になつてしまつたとは、本當に考へられない。——又他方では、その各々の種類の動物は、百千萬の數で、いつの刹那にも現はれて、無邊の變態を呈し、力と努力とを十分に表はして出て來るが、此等が皆その出生の動作のあるまでは全くの無であつて、その虚無中から絶待に新に始まつて出て來ることは出來まい。——現に見る所では、この様にして、一疋はわしに見えない様になるが、それが何處へ行くか分からない、而して他のものは又現はれて來るが、どこから來たか識り得ない、その上、この二つは同じ姿で同じ本性を具へ、同じ性格を帯びて、只その物質を異にするのみであるが、それも彼等の生存の間には不斷に排泄しては又新にして居る、——さすれば、今茲に消え去つたものと、その代はりに出て來たものと同じ本性であり、

只少し變化し、その生存の方式を新にしたのみとすれば、種族の中で死のあるのは、箇體に睡眠のあるのと同じだといつて差支はなからう。

天然の表象として、どこまでも亦どこに行つても正しいものは圓で、此は循環の圖形であるが、此は天然の中に行はれて居る最も普通の方式であつて、何事の中にも行はれ、大は天體の運行から、小は有機體の生死にも行はれ、時間とその内容との不息の流れの中で、生成する生存、即ち天然が存在し得るのは皆この方式に依つて居る。

秋に昆蟲の小宇宙を觀て見よ、或るものは長い間の冬蟄に蟄伏して眠るためにその床を作る、又或る者は繭を造つて、自ら蛹蟲として冬を過ぎ、春が來れば若やぎ成長して醒めて出る用意をする、又多數のものは、死の腕にだかれて休息し、只氣をつけてその卵を適當な置場において、いつかは新になつて出て來やうとする。——茲に天然の不滅といふ大消息が現はれ、眠りて死とは根本的に違つたものでなくて、その何れも生存を危くするものでないといふ事を示さうとして居る。昆蟲が房子を作り、孔を掘り又は巢を構へて、その卵をおき、來ん春にその中から出て來べき幼蟲のために食餌を備へ、而して自分は死

んで逝く、——その間の配慮といふものは、人間が夕にその着物や、又次の朝の朝飯を用意しておいて、そこで安心して眠り入るのと、自爾の眞實本性では同じである。

此等の事を觀じ來つて、そこで我々自ら、この人類に立ち歸つて、遠く未來に眼を放ち、未來の生々世々には百千萬の個人が出て、様々な姿の風習や衣服で出て來るのを想つて見れば、そこで疑問を挿まざるを得ない、此等は皆どこから來るのか。彼等は今はどこに居るか。——來る生々代々は今尙隠れて居るが、この世々を妊んで居る虚無の懷はどこにあるか。——それに對しては、笑みを含むで云ふべきでなからうか、誠の答へはかうでないか、そりや外にあるのではない、實在なるものが常にあり、即ちこの現在とその内容との外ではなく、即ち愚な問を出すお前自らの中にあるのでないか、お前が自分自らの本性を見誤つて居るのは、恰も秋の葉が、自分の落ちるのを悲むに似て、春になれば木には若緑の新装を着けるを思つても自ら慰め得ないで、『そりやわしじやない。それは皆外の葉だ』といふと同じである。——愚な葉よ。木の中には生々の力が内實祕密にあつて、いくら葉々が代々代謝しても、その生や滅には障へられずいつも同じで居る、それが即ち

お前自らじやないか。そこで、

『葉の代々のごと、人の代々も亦』

それ故、此を二つ根から違つた物だと見る認識は絶待でなく、只相待で、現象の認識ではあるが、物自爾には及ばない。——ブルダハの生理學にかういふ事がある、『朝の十時頃には、まだ一つも浸蟲は見えない、十二時頃には水はそれでうざ／＼して居る。夕にはそれが皆死ぬのが、翌朝又た新に出る。ニイチはその様に六日の間観測をつゞけた。』

此の様にして何物も一時居て、急いで死んで行く。草木と昆蟲とは夏の終りに死に、動物と人間とは数年の後に死ぬ、死は疲れもしないで刈り入れる。それにも係らず、まるでその様な事がないかの様に、萬物はいつも生存し、何物も不滅であるかの様にその場その所を占める。いつ何時でも草木の葉は緑に、花は咲き、蟲けらはぶん／＼、動物と人間とは枯れないで若やいで居、千度百度食つた櫻ん坊は、夏になれば、又いつでも出来る。個體が死な／＼い如くに、諸の國民も生存して、只時にはその名を代へるが、その行ひも努める所も悩む事もいつも同じで、只歴史がそれをいくらか違つた様に物語ると稱するのみであ

る。そこでどうしても考へざるを得ない、この様に生じたり滅したりするのは、物事の本當の本性に係る事ではなく、本性はそれ等に障へられず、不生不滅であつて、生存しやうと欲するものは、何れも皆、實は始終、盡きないで生存して居るのである。それであるから、いづれの時にも、一刻を取つて云へば、蚊から象に至るまで、一切の動物は、そのあらん限りを盡して一緒に居る。彼等は百度千度換はつて来たが、いつも同じもので通して来た。彼等は自分の同類で、自分より前に居たもの、又後に来るものをも知らない、いつ何時でも生きて居るものは種族であつて、此が不滅であり、此が同一である事を意識して、個體は生存し、又いそ／＼して居る。無限の現在、此が即ち種族の生命の方式であり、そのために種族には老ゆる事なく、いつも若く、生きやうとする意志はこの現在に現はれる。人間や動物は、見たところでは死んで消えて行くが、その眞實の本性は少しも障礙を受けずに永續する。考へて見よ、生まれたり死んだりする變轉は非常に迅速に振動するが、意志の客觀化は固執し、本性の永恆な觀念は、瀑布の飛沫に現はれる虹の如くに動かない。此は即ち時間の中に於ける不滅である。死あり老衰あつて以來千萬年、而かも何

物も亡くなつたものではなく、物質の原子でも、又尙更天然として現はれて居る内實本性には少しも減損はない。それ故、我々はいつ何時でもいそ／＼して云つてよい、『時間、死、老衰、此等にはかまひなしに我々は皆一緒に居る』と。

尙茲に注意してほしい事には、生まれる苦みと死ぬつらさとは、生きやうとする意志が客観化して生存するに缺くべからざる常住の制約であつて、此あるが故に、我々の自爾の本性は、時の流轉や種類の現滅に障へられず、常住の現在の中に生存して、生きやうとする意志を主張しての果實を味ひ得るのである。此は恰も、毎夜眠るがために晝は醒めて居られるのに似、又實は此の睡眠は、天然がこの困難な關所「生死」を理會させるために與へてくれる註脚である。

茲に段々述べて來た觀測を總括して見れば、エレア學派で、生滅はないもので、全體は不動だといつた、奇説の様な教の眞意を理會し得やう、「バルメニデースとメリツソとは萬物を不動なりとし、従つて生も滅もなしとせり。」この事については、エンペドクレースの美はしい句が特に光りを與へる、その句に

「長き配慮に堪えざる愚なる心よ、前には存在せずして、今は存在し得、且つ何れの物も後には滅に入るべしと思へる心。今は生きて(之を生命といふ名にて呼びて)、今存生し、而かも生前には人といふものもなく、死後には何物もなしとて、兩方より運命を悲嘆する愚なる心よ。」

尙又デデロの極めて妙で、又その意外な文を記さう、「宏大な城宮の入口に次の句が書いてある、『我れは何れの人にも屬せずして、全世界に屬す、汝等はこゝに入る前に、已に會てその中にありき、こゝを出づる時にも、尙その中にあらん。』

人間は出産の時に無から出て來たとすれば、その意味では又死んで無に歸しやう。但しこの無を本當に能く知り得れば甚だ面白かるべく、中等に理會のある人ならば、經驗上のこの無が絶待の無でなく、如何なる意味でも無だといふべきものでない事を看破し得やう。經驗の上で見て、兩親の性能が生まれた兒に現はれ、即ちその死後に生き残るといふだけでも、この見解を指し示すものがある。

時間はその内容と共に、とめどもなしに流れ去つて跡を止めない、それに對して、實に

現前のものは凝然不動で、何れの時にも同一である、これほどの對照は他になからう。この見地からして、生命の直接面前の進行を純客觀的に觀じて見れば、時間といふ車輪の中心には「常住の今」が明白に見えやう。——若し比べのない程長く生きた人が一目に人類を見直し、その全體を總括して見得たならば、絶えない生死の變轉は、不斷の振動と同じ事に見え、その中には始終無から無に移つて行くのを見ても、何等の奇を感じまい、恰も緒の先で早く廻はす火花が眼には常住の環に見え、迅速に振動して居る羽翼が固定した三角形に、兩端をしばりつけて振り廻はつて居る糸か紡錘に見えるが如くに、種族は即ち常住の有で、死と生とは振動と見えやう。

我々の眞實本性は死のために破壊はしないが、それでも先づそれを動物で研究せず、その一局部だけについて、我々自らだけにあると自負して、之を不死といふ誇大な名で呼ばうとすれば、その概念を誤る。それ故、新に出發せよ、前に定めた思惑に依らず、直に天然の手の中に眞理を求めよ。先づ第一には、若い動物の眼附きには、何れも種族の不老な生存のあるのを認める様にせよ。種族は天然の久遠不變な壯年の映しで、その新しい個

體には何れも一時此が現はれ、世界が今日出來上つたかと思ふ様に新鮮に現はれる。勿論わしでも熟知して居る、今庭に遊んで居る猫は、三百年前にそこで同じ様に飛んだりのそくしたりして居たのと同じ猫だと眞面目にいへば、人はわしを狂したといはう。——この高等な脊推動物を眺めて、忠實に眞面目に沈思して見よ、さすれば、今こゝに生存して居るこの生物は、虚無から生じたとは、あり得ないといふ事を悟り得やう、而かも他方には又それが生滅するも確かである。つまり、此の動物の中には、その觀念（種族）の久遠性が、その箇體の有限性の中に表はれて居るのである。或る意味で云へば、即ち根據の原理に基いて、箇體の原理である時間と空間との範圍内の意味でいへば、個體なるものはいつも別のものである事は眞實である。然し他の意味でいへば、即ち實在性を物事の常住の方式のみからいへば、此は眞理でない「個體は別でない」、此の常住の方式とは即ち觀念である。

觀念、即ち生類の種族は、何れもその個體が不斷に變轉するに障へられない。ところが觀念、即ち種族は、生きやうとする意志が本來依つて出る源、又その中に現はれる姿であ

つて、それ故、意志が眞實に關心する所は觀念の存立のみである。何れの動物でも、人間でも、個體が、いつ何時自分を亡ぼすか分からぬ偶事の群がり來る間に立つて、一向平氣に濟まし込むで、その上に死を迎へ、安固に靜安な心持ちで居るのも、つまりはこの不滅を奥の奥の底に意識して居るから出る事で、その兩眼には種族の安泰を映し出し、自分の滅亡にも逆らはず又關心しない。何れの動物の眼附を見ても、その中には、生命の核實、意志にとつては、その現はれの間に出て來る死が何等の障害をも與へない事を示して居る。實に不測の神祕が何れの動物にも凝もつて居るのである。一番近いもので、畜犬を見よ、彼は心持ちよく安泰にくらして居るではないか。生き得られる順番の廻はつて居る前に死んでしまつた犬が幾千あつたか。然るに此の幾千の滅亡に對しては、犬の觀念は之に逆はなかつた、又その觀念は、總てこの死亡のために少しも悲まない。その兩眼から輝くものはその不壞の力、『太初のもの』さすれば數千年の間に死んで行つたものは何物か。それは犬でない、犬はいつも少しも害を受けずに、現に茲にある、死んだのはその影、時間縛ばられた我々の認識工合に映つたその寫し。どこまで行つてもいつも生存し、一切

の時を充たして居る者が、滅して行くとはどうして信ぜられやう。

カントはその主觀的のやり方で、一つの大眞理を明かにした、即ち物自爾は時間に關せず、此は我々の會得に前以て具はつて居るものであるからの事。そこで、死なるものは、時間の中での現象が時間の中に終りを告げる事、そこでわしが今骨折つて居るのは、この事柄の積極の方面を客觀的に示すにあつて、物自爾は時間と時間に依つて出て來る生滅には障へられず、而して時間の中の現象は、若しそれに久遠から根ざした核實があるのでなくば、又この不息に變轉して無にも近い生存をも生じ得ないであらう。久遠といふ事は、直觀から得來つた概念でなく、その内容は消極で、即ち時間を絶した生存といふ事である。然るに時間は久遠の形像たるに過ぎず、時間は久遠の姿、それ故、我々の時間的生存は又我々が自爾の本性の姿たるに過ぎない。この本性は久遠の中にあるに違ひなく、時間は我々の認識の方式たるに止まつて、此に依つてのみ、我々は自分なり又一切の物事の本性が生滅し、有限で而して滅亡すべきものだとして認識するのである。

物自爾としての意志の具備した客觀性は、その「開發の」階段各々で（プラトーン）觀念と

なる、本性の觀念は認識の純粹な主觀をその對手とし、従つて觀念を認識するのは、特例として特別の天賦のある場合に時々現はれる事を説いて來た。その反對に、個體としての認識、即ち時間の中の認識に對しては、觀念は種族の形で現はれ、種族といふのは、觀念が時間の中に這入つて分裂したものである。それ故、種族は生きやうとする意志の最も直接な客觀化である。動物でも又人間でも、その最も内實の本性は、この様にしてその種族にあり、生きやうとする意志が強く動搖するのは、個體から出るのではなくて、種族から出るものである。その反對に、直接の意識は個體にあつて、個體はそのため自ら種族と別のもつと妄想し、又そのため死を恐れる。生きやうとする意志は、個體については、饑渴と死の畏れとに發表し、種族については性欲と生兒に對する懸念の情熱として發表する。

衆生の階段に色々あり、下は珊瑚蟲から、上は人間に至るまで、意識に段々の等級があるを見るに、この驚くべき階段の中には、個體は始終生まれは死んで、そのピラミットは常に動搖して居るが、而かも生殖といふつなぎで、種族の生命は無限の時間を通じて連續

し固執して居る。此の様にして、客觀の方、即ち種族は不壞として現はれ、主觀の方は此等衆生の自己意識たるのみで、その生存も短く、又必ず破壊すべきものであり、而して不思議な工合で、復再び無から生ずるためには壞れて行く。時間の中で存續する方式は、只客觀の方面だけに係はる事ではあるが、主觀の方、即ち一切の中に生きて現はれて居る意志と、又それに伴つて、一切を自分の中に發表する認識の主觀も亦——客觀の方向と同じく不壞である。

人には、死んでも自分の滅しないといふ諦認があつて、此は死の近くに當つてどうしても起つて來る良心の懸念にも現はれ、誰れでも皆心の底に抱いて居る事であるが、此は自分自らが本元的で久遠であるとの意識から出る事、スピノザが『己が久遠なる事を我々は感じ又經驗す』といつたのはこの事である。理性のある人ならば、自分が不滅だと考へ得るのは、始なく、久遠で、本來時間を絶して居ると考へるからである。その反對に、自分が無から出て來たとすれば、又無に歸するとすべきで、自分が存在しなかつた過去は無限で、而してこれから第二の無限が始まり、以後はなくなる事はないといふのは奇怪な考

へである。我々が不滅であるといふ事に對する堅固な根據として古語に、『無より生じたるものなく、又無に歸するものもなし』とある。テオフラスト・パラセルソの言に恰もこの點を云つたのがあつて、『己が中にある靈魂は何物かより生じたり、故に無にはなり得ず、何物かより來れり』。この根據は誠である。人の生まれるのがその絶待の始めだとすれば、又その死ぬのは絶待の終りだとすべきである。この二つの事は同じ意味の事であつて、自分は生まれないと考へれば、又死なういとなるので、全く同じ意味で云へる。生といふ事は、その本性と意義との上で、又死といふ事、此の二つは同一の線を二つの方向で説いたのである。

死は生きやうとする意志、又尙立ち入つて云へば意志に本來ついて居る主我が、天然の進行の中に受ける大きな警告であつて、我々の生存に對する一つの罰として會得すべきものである。死は生殖が淫樂で結むだ結び目をほどく痛い解決で、我々の本性についた根本の迷ひを、迫つて暴力で破壊するもの、大きな失望。我々は、根本では、存在すべからざるもので、それ故、存在を止めるのである。主我といふのは、要するに人間が、自分の人

格にのみ存在して、他には存在しないと忘想して、あらゆる責任を自分自らの人格にのみ限るにある。然るに死は此の人格を滅却して、それ以上のもののあるのを教へ、従つて人間の本性である意志は、尙他の個體で生きて行くが、現象であり、又現識としての世界に屬して居る知力は、外界の方式に過ぎないから、従つて又、現識としてのみ生存し、物の事の客觀的存在の中で、又それ故、今まで通りの外界の生存の中でのみ存続する。尙茲に記すべき事には、良い人ほど自分と他人との間に區別を多くしない人で、他人を絶待に非我として見ないが、悪い人間にはこの區別が大きく、又時としては絶待である、若し又、我れ以外と中との別を空間的のものとし、物自爾に基かないで、現象にのみあるものとし、従つてこの別は絶待の實でないとするれば、自分の個性を失ふのは、一つの現象の損失に過ぎず、經驗の方の意識では、この區別には餘程實在性があつても、形而上の立場からいへば、『わしは亡びて行くが、世界は永續する』といふのも、『世界は亡びて行くが、わしは永續する』といふのも、本來は別の事でない。

兎に角、死は大事件で、我れでなくなるといふ事、少くともこの機會を利用する者にと

つては大事件。生きて居る間は、人間の意志には自由はなく、その不變の性格を本にして、その行爲は、動機の鎖をたどつて必然に行はれる。若し尙つゞいて存へるならば、その性格は不變であるから、尙いつまでも同じ工合に行爲をして行くに違ひない。それ故、人間は、その本性の萌芽からして、新に異なる者となるには、今あるまゝでない様に一旦ならなければならぬ。そこで死はこの繫縛を解き、意志は再び自由になる、即ち自由は有にあつて、行動に存しない、そこで「心の鎖を切斷しては、一切の疑惑は解け去り、かくてその業は消え行く」といふのがヴェダの有名な文で、何れのヴェダインタ哲學者も始終之を反復する。死ぬのは、一つ個體性の偏執を脱する刹那であつて、一體個體は、我々の本性の最も内實な核實でなく、寧ろその一種の迷ひと見るべきもの、そこで死の刹那には本元の自由に戻るのであるから、この意味で、一つの「本元への復歸」と見るべきもの。大抵死者の顔つきに平和と安靜とがあるが、此から出た事であらう。通常、善人の死は安樂靜穩であるが、好んで死に、喜んで死に、勇んで死ぬのは、生きやうとする意志を棄てはてて、之を擯斥し終つた諦觀の人の特權である。此の様な人が死なうとするは、見えの上でなくて實にするので、即ちその人格の永續を要しもせず、又希ひもしない。

第二章 種族の生命

觀念は、衆生の色々の階段に應じて、生きやうとする意志を具備して客觀化するものであるが、此等は個體が時間といふ方式に結び附けられて得る認識にとつては、種族として現はれ、即ち生殖のつなぎで結び付いて、相前後して現はれる同類の個體として現はれる、そこで何れの生類も、その自爾の本性は、先づ第一にその種族にあつて、種族は又個體で生存して居る。而して意志が自己意識を得るのは個體にあつて、直接には只個體としてのみ自ら認識するが、奥底には、意志の本性が客觀となるには、本當は種族であるといふ意識が潜むで居、而して個體にとつても、種族としての案件、即ち男女の關係、生兒の生殖と養育とが、一切の他事よりも重要で又適切だといふ事に現はれる。それ故、動物では交尾、人間では生殖慾を満たすために他の個體を、苦心して又いらだつて撰擇する事に

現はれ、此の撰擇は情熱の愛情にもなる。

個體は、形體は形體の上では種族から出來たもので、形而上には觀念がどれだけか完全の形像となつたもの、時間といふ方式で種族となつて現はれたものである。こゝに云つたこの關係と一致して、腦髓と生殖器とが同時に相關聯して、非常の活力を示し、又共に老衰するといふ事がある。性慾の衝動は樹木(種族)の内部の活力と見るべきもので、個體の生命は此から出、その葉の如く樹木に養はれ、又之を養ふ助けをする、この衝動が非常に強くて、人の天性の深みから出るのも此のためである。種族のために働き、生殖作用をすませば、何れの動物の個體も、一時衰弊して一切の力を消盡し、昆蟲にはそれから直に死ぬのもある、人間で生殖力の消滅は、その死に近づいたしるしであり、何れの年齢でもこの力を濫用すれば生命を縮め、その反對に之を節すれば、あらゆる力、特に筋肉の力を高める。此等に依つて見れば、個體の生命は、その根底では種族から借りて居るものである、此等の説明としては、どうしても、生命の形而上的基本は、直接には種族の中に現はれ、此に依つて個體の中に現はれるとしなければならぬ。それ故、印度ではリンガ「男根」とヨ

ニ「女竅」とを、種族とその不滅の表象として崇拜し、死に對抗するものとして、死の支配者であるシヴ神の屬性として居る。

神話や表象を用ひないでも、何れの動物でも、又人間も同じく、盛な熱心と奥深い眞面目とでこの仕事をし、その生殖慾は激烈であつて、動物がその本來で又主要の事としてその眞實本性として居る種族の一員として働くのは、實に此の方面の作用で之をする、その他の作用や機關は、直接には個體のためにするもので、個體の生存は、根本に於ては第二次的のものに過ぎない。動物の本性全體はこの事に集中して、この衝動は激烈であるが、此は又個體は永續しないから、一切の事を種族の維持のために盡し、此が即ちその眞實の生存であるといふ意識にも現はれる。

試みに動物の發情の状や、又その生殖行動をするのを見よ。その時には、他の場合に見られない眞摯と熱心とがある。自分と全く似た新しい個體を作つて、自分の代はりに残すのだと知つての事であらうか。——動物には考へはないから、此等の事は少しも知らない。然るに、恰もそれ等を盡く知つても居る如くに、時間の中に種族を永續するため

に、非常に熱心に配慮をする。即ち自分は生き又存へたといふ事を意識して、この慾が最高の度に達したのを生殖の行動で表はすので、此がその場合に自分の意識の中にある萬事である。それから又衆生が永續するのは此れだけで全く十分なので、意志は根本であり、認識は之に附け加はつたものである。此の様にして、我々が一つ考へに上した一定の姿の動物があれば、これが即ち生命と生存とを欲する者で、その欲する所は一般に生命と生存といふ事でなく、この姿形で之を欲するのである。それ故、動物の意志に生殖の刺激を與へるのは、同種の雌に自らの姿を眺めてである。この慾を外部から時間といふ方式で眺めて見れば、此はその様な動物の姿として無限の時間に續き、始終その姿に現はれる個體を替へて、死と産と相交替して續いて居るもの、此の様に見て來れば、この生死交替は、時間互つて永續して居る姿の脈搏だと見てよい。之を又その對抗で物質が出來上つて居る彼の引力と反撥力とに比べる事が出来る。——茲に動物に就いて云つた事は、人間についても亦同様であり、人間では、その生殖作用には完全な認識が伴ふが、それに導かれて出るのではなく、生きやうとする意志から直接に出、その集中として現はれる。それ故、此は本能的行爲に數へるべきもの。動物が生殖作用を營むには、その目的を認識してするのでない如く、その工作衝動も亦同様で、この場合には、意志は大體に於て認識の媒介を経ずに發表し、認識は何れの場合にもその細目に關係するのみ。生殖は或る度までは工作衝動の最も驚嘆すべきもの、又その作は最も驚くべきもの。

第三章 特質の遺傳について

生殖に當つて、兩親で出來た萌芽には、その種族の特質ばかりでなく、個體のも傳はるといふ事は、身體の性能に關しては、日毎の經驗にも見え、又昔から人の認めて居た事である。

精神上的の性能についても此が同様で、それ等が親から子に遺傳するや否やは、能く出る問題で、多くはするといふ事になつて居る。但し、此の場合、父親と母親との分を分け、兩親から得て來る精神上的の遺傳が、そのどちらにあるかを定めるのは、甚だ困難の間

題になる。生殖の場合に、父親は、「強い姓」で又作る方として、新しい生命の根本根底となり、即ちそれに意志を與へるが、母親の方は、「劣つた姓」で受け目の方として、第二次的で、知力を與へやう、それ故、人間はその道徳性、その性格、その傾向、その心情は、之を父親から傳へ、それと反對に、知能の程度や性状や方向は、之を母から得やう。

自分自らの経験には、十分正確でどこまでも特定して居るといふ長處はあるが、又それに勝る短處があつて、その範圍が限られ、その實例は一般に知れない。人々は各々先づ自ら觀察して見て、自分の傾向や情熱、自分の性格の缺點や弱點、自分の惡癖をも白狀し、又自分の長處や美德もあれば、それをさらけ出し、而して自分の父親の事を考へて見れば、此等の性格特色は父親にもあつたといふ事を發見するに違ひない。その反對に、母親はまるで違つた性格であつた事は多く、少くとも母親と自分とが道徳上全く一致するといふ事は非常に稀で、一致して居る場合があれば、それは特別の偶合で、兩親の性格が似て居たのである事を發見しやう。此等を検査して、例へば怒りほい性か又は忍耐、貪慾か又は浪費、淫樂か又は飽食、或は賭博の傾向、慳惡か又は善意、正直か又は欺誑、傲慢か又

は交際好きの性、勇氣又は怯懦、溫順か又は好諍、調和性か又は怨恨性などについて檢して見るがよい。それから又尙、その人とその兩親とを能く詳しく識つて居る場合について、同じ探求をして見よ。注意して又正直に正當の判斷を下して此をやつて見れば、わしの提説を確める事は必ず出て來るに違ひない。但し、母親からの遺傳で、理性が秀で、省察し熟慮する能力を具へて居る場合には、そのために父親から遺傳した情熱は、半ば制せられ、半ば蔽はれ、そのためにその發表に方法が定まり、計畫が立ち、又は内證とする様になり、父親が頭腦の限られて居た様な場合には、その發表とは餘程違つた現象を呈する、或は又此が正反對になる事もあり得る。——それに反して、母親の傾向や情熱は、小供に現はれる事は決してなく、屢ばその反對になる事がある。

能く知れて居る如く、デシオ・ムスは雄者の大勇でその身を國のために捧けた、即ち祭を盛にして自分と敵とを共に地神に捧けて後、頭を蔽ふて、ラテン人の軍に突入して死んだ。それから四十年ばかり経て、同名であつたその子は、ガリア人に對する戦争で全く同じ事をした。此などは、ホラチオが云つた『強き者は強くて善き者に作らる』好適例であ

るが、——その反面をシエキスピアは述べて

『卑怯者の父は卑怯者で、きたない物の親はきたない。』

ローマの古代史を調べると、一族が代々相次いで、己れを國に捧けて勇を彰はした家族が多く、又アレキサンドル大王が征服侵略好きであつたのは、その父のフキリボと同じである。スエトニオがネロの事を述べるに先つて、この怪物の家系について、道徳に關して述べて居る事も頗る注意すべきである。即ちこのクラウデア家について記して居る所では、この家は六百年間ローマに唱へて居たが、いつも活動一方で、氣が勝ち過ぎて残忍な人のみその中から出たといふ。テベリオ・カリグラも此から出たが、最後にネロが出た。ネロに至つて十分に開展した恐ろしい性情は盡く、その祖父にも、又一層強く父にも現はれ、ネロに至つては、位置の高いために自由に之を發表したのと、又その母のアグリツピナが理性のない狂婦であつて、その子に情熱を制すべき知力を與へ得なかつたのとで、甚しくなつた。タンプリエ騎士を虐殺し處刑し、欺譎で不正で残忍なフランス國王フキリボ四世の娘がイサベラで、イギリス王エドワード二世の配偶になり、王に對して反逆を起し

て王を捕へ、彼れに讓位狀を記名せしめて後之を獄に投じ、虐待して殺さうとして出来なかつたところから、今之を語るのも恐ろしい様な工合にして殺してしまつた。血に渴した暴君で「信仰の守護者」といふ名を得たイギリス王ヘンリ八世の、初婚での子は、狂熱と残忍とで名高い女王メリーであつて、澤山異端焚殺をしたので『流血メリー』の名を得た女であつた。又その再婚の娘エリサベスは、その母親であるアンナ・ブレンの卓越した理會を受け繼いで、そのために狂熱を放任せず、父親の性格を制しはしたが、それを亡ぼしはしなかつた、スコットランドのメリー女王に對する残忍なやり方の如きはつまり、此が折にふれて發露したものである。——マルコ・ドナトに據れば、ファン・ゴインスは、或るスコットランドの女の事をいつて居るが、その父親は此の女の生まれた年に追ひはぎ又人間を食つた者として焚刑に處せられたので、その子は全く他人の間で育つたが、年をとるに従つて、人肉を食ひたがつて、その慾を充たして居る時に捕へられ、生きながら埋められた。一八三六年十月、ホンガリアのベレッツナイ伯といふのが、官吏を一人殺し、又自分の親族に重傷を負はせたために、死刑の宣告を受けたが、その兄は先に父を殺して絞殺

せられ、その父も亦人を殺した事があつた。その後一年経て、此の伯の季弟は、兄が官吏を殺した同じ街道で、自分の財産管理人をピストルで撃つたが、その狙ひがはずれた。犯罪の記録を調べて見れば、此の様な系統を發見する事は多いに違いない。——特に遺傳性のあるのは、自殺の傾向である。

然し他方には、あの立派なマルコ・アウレリオ帝の子に悪いコンモドがあるが、茲には皇后ファウスティナは姦婦であつた事を見なければならぬ。その反対の方から、似た場合に似た根據のあるを推察すべき事がある、例へば、ドミチアノがテトの本當の同胞であつたとはどうしても思へず、ヴェスパシアノ(二人の父)は夫としてだまされて居たに違ひない。

そこで提出した原則の第二、即ち知力は母親から遺傳するといふ事は勝手の撰擇といふ事を許すになるから、第一の原則(性格の遺傳)よりは一般に承認せられ易い、但しそれを分けて會得すれば、靈魂が單純で不分であるといふ事に反対する様になる。古から通俗にも「母親の才」といふ事をいふが、此はこの第二の眞理が古から認められて居た證據であつて、大小色々に知能の秀でて居た人について、その母親がどれだけかは知能の優れて居た人には、此の天賦のあるを経験したから出て居る。その反対に、父親の知力上の特質が子に遺傳しないといふ事は、最も秀逸した能力で名高い人々の父か又は子は、常則として凡庸の頭腦であつて、父親の精神力の痕跡もないので證明される。然し此に反対した經驗が確かで、この常則の取り除けになる様な事がいくつもあり、例せば、ピットとその父のチャサム卿の如き例もあるが、此は偶然だといふべく、又大秀才は極めて稀なものであるから、それ等の人は極めて非常の例としなければならぬ。然しこゝに通則は行はれて居て、ありさうにない事が決して起らないといふ事はありさうにはないのである。その上、此の様な大政治家は、その頭腦の秀逸からも來るが、又その性格の特質、即ち父親からの遺傳からも來る。それに反して美術家や詩人や哲學者は、その仕事が本當に天才といふべき方から來る仕事のみであるから、今いつたに似た實例をわしは一つも知らない。ラファエロの父親は畫師であつたが大家でなく、モツアルトの父祖はその子と同じく音樂者であつたが、一人も大音樂者ではなかつた。然し誠に驚嘆すべき事には、運命は此の二人に各その

技能を發揮せしめるために短生涯を與へたが、殆どその償ひとして、その幼時に已に父親の仕事場に生ひ立ち、父親の手本と指導で、その各々の天分であつた美術に必要な手引きを與へる様にし、他の大多數の天才がその青年期に多く時間を失ふ様な事のない様にした。此の様に個人の生涯に手引をするにも似た祕密で不思議な勢力がある様に見える。——こゝに尙加へて云つておくが、科學上の事業には、勿論、天生の良い能力が必要ではあるが、その方では、熱心な努力、勤勉、忍耐、幼からの指導、不撓の研究、又澤山の練習がその主な要件である。どこでも子が好むで父親の歩むだ道をたどり、大抵の工藝は一家代々の仕事になり、又勤勉と固着とを必要とする或る科學では、或る一家に代々立派な人を生ずるのは、今いつた理から來る事で、知力を父親から遺傳するためとして説明すべきことでない。

知力が母親から實際に遺傳する事については、随分實例もあるが、若し女性の性質又天分として、婦人の精神能力が公に知られる機會が少く、そのために歴史上その方の事が多く知れず、後代に傳はらなかつたといふ事情がなかつたならば、この實例は尙一層多いに

違ひない。その上、女性の性情は弱いもので、その能力も十分に開展し得ず、事情が具はつて後にその子息で開發するだけの度には達しないから、この點からして女性の仕遂ける事はそれ以上に高く見積らなければならぬ。そこで今は次に例を我々の説の實證として出さう。ヨセフ第二世は、マリア・テレサの子であつた。——カルダノは、その自傳で、『我が母は記憶と才にて優れたりき。——ルソウはその告白の第一卷に云つて居る、「わたしの母の美しい事、その精神、その才能——その中には、現状にとつては立派過ぎるものがあつた、——ダランベールの母はクロード・ド・タンサンといつたが、精神の秀逸な人で、その著はした幾多の小説や類似の著作は、その當時に好評を博し、今日でも尙讀むに足るものだといふ事である。——ビュフオンの母親が秀でた婦人であつた事は、「ビュフオンの主義では、一般に小供はその知力上又道德上の性質を母親から得るといふにあつたが、その話しの中に、段々進んで、その事を自分の場合に適用し、大變に自分の母の事を賞めて、母は精神に富み、博識で、能く整つた頭腦の人であつたといつた」。道德上の性能をも一緒にしたのは、報告者の誤りであつたか、又は偶然にもその母親が彼れ自や父親

と同じ様な性格の人であつたのであらう。その反對の方で、母親と子との性格が相反して居る實例は無數あつて、最大の戯曲家が、オストやハムレットで、母と子とが互に敵となつて鬭ふのを叙したのはそのためで、何れも、子は道徳上では父の代表になり、又そのために復讐をして居る。つまり子と父親との間は、その本性である意志が實に一つであつて、母親と子との間には知力が同一であるためである。母親との子との間には非常に道徳上の反對があり得るが、父と子との間には知力上の別があるのみである。サレス法で、女子はその族の相續にならぬといふ原則のあるのも、この見地から見らるべき事である。——ヒュムがその簡単な自傳にいつて居るには、『わたし共の母は特別な長處のある婦人であつた』。カントの母については、シュベルトの書いた新しい傳に云つて居る、『彼れ自らの判斷に依れば、その母は、天然に理會の勝れた婦人であつた。その當時には女の子は教育を受ける機會に乏しかつたが、彼の女は後に自分自らで教育して進んだ。……散歩する時にも、その子に、天然のあらゆる現象に注意を呼び起す様にして、それは皆神の力だと説明しやうとした』と。

この原則からすれば、同母の子供には同じ精神力があり、その一人が秀才であれば、他も亦之に同じであるべき事になる。

第四章 男女愛情について

詩人の仕事は、主として男女の愛を描くにあるとは、一般の習慣である。悲劇でも喜劇でも、作の主題は皆此にあり、又大多數の抒情詩でも、又は叙事詩でも、その材料は大抵之に同じく、此等の作の主な内容は皆、今こゝに云ふ情熱を色々に、短く又は詳しく記すものに外ならぬ。又此を能く描寫したものの、ロメオとジュリオット、新へロイゼ、エルテルなどは、之に依つて不滅の名を得た。

日常に現はれては來ないでも、經驗の教へる所に據れば、制し得はするが、而かも常則として極めて強い愛好は、場合に依つては、他に超えて激烈な情熱ともなり得、さうなれば總ての顧慮を打ち棄て、信ぜられない程な力と持ちこたへを以てあらゆる障害を排除

し、そこでそれを満足するためには、おかまひなしにそのために生命をも賭し、満足が得られなければ、之に生命を代へるまでも行く。エルテルやヤコポ・オルテは小説にあるのみならず、ヨーロッパだけでも、年毎に少くとも六七人は出て来る、又此と同じ事情のために、戀人が外部の事情のために妨げられて心中をするものも、毎年一つや二つはあり、その事を思へば、互に確かに愛情のあるのを知り、樂みの極でその愛情を樂まうと豫期する者が、この生命と共にこれ以上に高いものもない幸福をも捨ててもせず、最後の手段を取つて一切の關係を捨て去りもしないで、寧ろあらゆる艱苦に耐えるのは、却て説明し得ない事になる。——その外に、この情熱の軽い度で一時の發作のあるのは、何人も年をとらない間は、日々に眼前にする處で、それはほんの心だけでもある。

こゝに述べて來た處で見れば、この事が實在であり、亦切實である事も疑ふべからざる事であるから、總ての詩人が始終題目にして歌ふ此の事を、哲學者が取り上げて哲學の題目にするのは驚くに及ばず、人生を通して此の様に著しい位置を占めて居る事を、今まで哲學者が殆ど全くその觀測に上さず、手入らずの材料にして残しておいたのを驚くべきである。

ある。

戀といふものは、如何に虚空に彩をなす様でも、その根は全く男女の愛情にあり、この愛情を一層立ち入つて特別にし、又嚴に個體に限つたにある。この事を心に留めておいて、この男女の愛情があらゆる段取り色取りで、芝居や小説のみならず、實生活に働き、生命の愛着に次いで一番強く又激しい衝動として働き、人類の若いものの力と思ひとの半を始終その方に奪ひ、殆ど總て人間努力の最後の目途になり、極めて重大な案件に對して有害な力を及ぼし、最も眞面目な仕事をも毎時に妨げ、時としては最大の頭腦をも一時は混亂せしめ、政治家の相談や、學者の研究にも障礙を與へて、その得物を持ち込むのを辭せず、戀文や戀人の髪は、大臣の書翰挿にも、哲學書の草稿にも忍び込み、その外又戀は極めて複雑に極めて悪い仕事を日々に企み出し、最も大切な關係をも離し、最も堅い結びをも解き、時としては生命か又は健康を害し、又は富をも位置をも幸福をもその犠牲として持ち去り、又その他では正直な人の良心を奪ひ、信實な人に反間をさせ、その様にして全體に亘つて、恐しい惡魔としてあらゆるものを轉倒し、混亂し、轉覆しやうとして骨折

る。——此等の點を見て、戀が如何なる事をするかを能く觀れば、此の騒ぎは何のため、おし合ひ、騒ぎ廻り、心配と困厄は何のためと叫ばざるを得ない。總て愛情といふ事柄の最終の目途は、人生の他の目的よりは實際切要であり、何れの人もそれを深く眞面目に追求して見る價がある。それに依つて定まる事は、即ち直に次の代の組立てと同様切要である。我々自らが舞臺を退いた後に出て來べき役割の役者が、その生存を得、その性情を得るのは、この些細な様に見える愛情一件に依つて定まるのである。此等將來の役者の有、存在は根本で我々の性慾から出、又その本性は、この慾を充たす場合の個體の撰擇、即ち男女の愛情で全然定まり、それで變更出來ない様に、何れの點でもきまつてしまふ。これが即ち疑問の管鑰である、この鍵を應用して尙立ち入つて觀れば、戀愛の度には一時の好みから極めて激しい情熱まで色々あるが、此はつまり、その撰擇が個體の上に局定する度合に依る事を識るに足る。

それ故、現代人間の愛情關係は、全體として見れば、全人類が眞面目に「將來の世代の成立を沈思し、又それより以後無數の世代のために沈思するもの」この案件がかくも重要

なのは、個人の幸不幸のためでなく、將來に人類全體がどの様な特質を帯びるかといふ大事のため、そこで箇々の意志は、茲に種族の意志として、力を高めて現はれ、そこで愛情の案件に情熱があり崇高の趣があり、その悅樂や苦痛が超絶であるのも、此のためには生じ、此等無數の實例を寫すために、數千年來詩人が倦みもせず骨折つて居る、つまり何れの題目も此には比べ者にならず、他の事は皆箇々の人の幸福に關するが、此のみは種族の幸不幸に關し、彼れが平面ならば此は物體である。戯曲で戀愛のないのが人の興味を惹かないのは、此のためで、又この題目は日々之を用ひても少しも減じない。

一定の個人に向つた男女の愛情として意識に現はれるのは、それ自らで、ちやんと定まつた個體として生きやうとする意志である。性慾は、それ自らでは主觀の要求に過ぎないが、この場合には上手に、嘆美といふ客觀の面を被ぶり、それで意識をだまかす方法を知つて居る、即ち天然はその目的のためには、この作戦を必要とするのである。客觀的には、その様に嘆美といふ崇高な面影で現はれても、戀愛は、只一定の性情ある個體の生産をのみ目的として居る事は、戀が相互の愛情だけでなく、その相手を自分のものにする事、

即ち身體の樂みを必須とするのでも分かる。愛情は確かでも、この方が缺けて居ては、安
慰満足は得られず、その様な状態のために自殺するものも少くない。それに反して、強く
戀して居る者は、相手に愛情はなくとも、それを我がものとし、身體の樂みを得るのを好
む。強制して結婚を遂げ、相手の嫌ふをかまはずに、澤山の贈物をしたり、その他何か
の犠牲を供へて女子の好意を買ひ、又甚しきは無理に思ひを遂げるのも、此が實證であ
る。情熱ある愛情を感じる深さ、それが現はれる眞摯、その範圍での些細な事でも、又そ
れが機會となつて出て来る事でも皆重要である、此等は皆その事の大切なのに相應して居
る。此の目的が即ち眞の目的であるとすれば、愛着の相手を獲るに、弘く求め、無限に苦
勞するの、事態に相應して居る。即ちこの仕事や辛勞に依つて押し出して来るものは、
全く個體として定性のある將來の世代である。この將來の代は、人が性慾を満足するため
に、周圍に求め、我意で一定の相手を撰擇する中に動きつゝある、而して之を愛情と呼
ぶ。二人の愛好が段々に熱くなるのは、本當はその二人が生まうとして居る新しい個體の
生活意志が已に動いて居るので、二人が互に慕ふ眼附きが共に見合ふ中には、新個體の生

命が萌え出し、調和あり組立てのよい將來の個體性がそこに現はれて居る。彼等二人は事
實に相合して、全く一つのものに融合しやうといふあこがれの想ひを感じ、それに依つて
尙つゞけて生きやうとするので、この思慕を満足すれば則ち、二人の中に出來た兒に、二
人の性能を一つに融合合體して、之を遺傳し、それに依つて二人は生き存えて行く。その
反對に、男と女との間で、どこまでもどうしても相嫌ふのは、その間に出来るべき兒の體
制が揃はず、不調和で、不幸な者になるべきしるしである。

此の様にして異性の個體二つが互に彼れに限るとして、強く共に引きつけられるのは、
生きやうとする意志が種族全體に現はれたもので、この二人で生むべき個體はその目的に
副ふた本性の客觀化を得やうと見越して、斯く強く現はれるのである。一々の人には各々
別々に固有の特色ある個性があり、殆ど説明出來ないが、此は蓋し二人相愛する者の情熱
に、別々の個性のあるため、——奥底に這入つて見れば、この二事は同一事であつて、
情熱の個性が含蓄して居たものが、生兒の個性に顯現するのであらう。新しい個體が出來
る最初、その生命の眞の秀逸點は、その兩親が互に相愛し始める、その刹那にあり、二人

が互に慕はしい眼付きをかはすその出會ひ頭、結び目が即ち新生兒の最初の芽であり、此の芽は、他の芽と同じく踏みにじられる事も多い。この新しい個體は、或る程度で新しい觀念であつて、何れの觀念も、それが現象に現はれ出やうとする時には極めて激しう努力して、その現象のための因果の法則で自分に落ちて來る物質を貪り奪ふが、それと同じく、人間の個性が出て來るこの特別の觀念は、自ら現象の中に實になるために、極端の貪慾と激烈とを示す。この貪慾と激烈とが即ち未來の兩親の情熱である。此の情熱には無數の度合があつて、その兩極端を「普通の愛情」と「天上の」といひ得る、——然しその本性では何れも同じもの。それに反して、此の情熱は個性を帯びるに従ひ、即ち愛着する個體が自分の願ひに副ひ、又自分の個性で定まつて居る要求を満たすについて、その相手の身體局部や特性が特に適して居れば、この情はそれだけその度を高めて強くなる。その中でも、健康と力と美と、従つて又壯齡とは、戀着の向ふ第一本來の點であつて、意志は、一切個體の基本である人類の種族性格を實現しやうとするに因る、日常の愛着愛情はそれ以上多くは行かない。それに加へて特別の要求が加はれば、そこで尙仔細に探求し、満足が

多く得られさうな者に對しては情熱が高まる。此が最も高まるのは、二人の個體が互に能く適合するから生じ、この適合に依つて、父親の意志即ち性格と母親の知力とは一つに結合して、目的とする個體を生じ、それに依つて種族全體に現はれて居る生きやうとする意志は、その大きさに相應し、従つて又生滅の人間の心情以上に上る思慕を感じるが、この思慕の動機は個體知力の範圍以上にある。此が即ち特別で強い情熱の心である。——二人の個體が相互に適合する度合は、色々であつて、尙此から觀測すべき點であるが、此が完全であればあるだけ、二人の相互の情熱は強くなる。二人の個體で全く同じ者はないから、一定の男子は一定の女子に對して、最も完全に相應すべきである。此の様な二人が相逢ふのは稀であるから、愛情は特に熱情となる。——しての情熱は、本當は、生まれるべき者とその性能とのためのもので、その核實はこゝにあるが、異性の二人が素養もあり、又若くて、その心根も性格も精神の傾向も能く一致して、而かも男女の愛情を交へないで、友情の交りをする事もある、又その場合に、いくらか相嫌ふ情もその間に存する事もあり得る。この様になる根據は、二人の間に子が生まれたなれば、身體にか又は精神上に不調和な

特性が生じ、種族の中に現はれて居る生きやうとする意志の目的に、その生存と性情とが相應しない事のあるためであらう。その反對に、心根や性格や精神の方向が類を異にし、そのために相嫌ふばかりか、或は相敵視しても、その間に男女の愛情が生じ又成立する事もあり、その場合には他の事には目が眩し、そこで結婚すれば、非常に不幸な夫婦になる。

男女の愛にどこまでもその基本になつて居るのは、生まれるべきものゝための本能であるが、此を十分確めるには、この本能を分解するに限るから、今之を略する事は出来ない。——その中でも第一には、男子は天性、愛情に變轉が多く、女子は不變に傾く。男の愛情は、その満足を得た瞬間以後著しく減退し、殆ど何れの女子も、已に占有した女子以上に目を牽く、即ち男は變化を望む。それに反して女子の愛情は、その瞬間から増進する。此は天然が目的とする所の一結果で、天然はいつも種族の維持と、又出来るだけその増殖に向つて居る。即ち男子は、相手の女子さへ數があれば、樂に一年に百人以上の子をも生み得るが、女子は、澤山に男を持つても、一年に一人の子しか、この世界に生み出す

事ば出来ない。それ故、男は始終他の女子を求め、女は固く一人を守る、即ち天然は、女子をして考慮なしに本能に應じて、未來の生兒を養はしめ保育させるためである。この譯からして、夫婦間の忠實は、男にとつては人工の事で、女子には天然であり、女子の姦通は、その結果の方から客觀的に見ても、又天性に反するといふ主觀の方から見ても、男子の姦通に比して容赦すべからざるものになる。

異姓を好むのは自分にとつて客觀的の様に見えても、實は假面を被つた本能、即ち種族の型を維持しやうとする種族の感覺であるから、尙根本的に之を見、又此の諦認を十分にするためには、この愛好で我を導いて居る心地を一層立ち入つて探求し、その仔細に立ち入つて見なければならぬ。この心地を分解して見れば、直接に種族の型、即ち美に關する點と身體の特性に向つた事と、而して相待的には、二人個性の偏した事や變態に對して、互に修正又は中和をする必要から出る事。

我々の撰擇又意向を支配する最も大切な顧慮は、年齢である。全體として云へば、月經の初まる年齢からその終るまでは、之を採用するが、然し十八から二十八歳までの時代を

最も喜びで好む。此の年齢以外の者ならば、どの女子でも人を動かすには足らず、年をとつて、月經の止むだ女子は、忌といふ感を起させる。この場合に、無意識ながら人を動かして居るものは、生殖が出来るといふ事にあるのは明白で、それ故、何れの人でも生殖又は受胎に最も適した時代を離れるに従つて、それだけ異姓に對する愛嬌を失ふ。——第二に顧慮するのは、健康の點である。——第三に顧慮するのは骨格で、此は種族の型の基本であるから。年齢と病氣とに次いで最も忌なのは、不揃ひな姿であつて、いくら顔が美しくてもそれを償ふには足らず、顔は非常に醜くとも、發育の正當な方がどうしても勝る。その上骨格の不揃ひなのは、何れも甚だ目につき易いものである。その反對に、勝れて立派に發育したのは、他の缺點を償ふに足つて、人を恍惚させる。足の小さいのを大に尊ぶのも此から來た事で、此は人間種族の本性特資に大切な事、跗骨と蹠骨とを合はせての大きさでは、人間が何れの動物よりも小く、人間は蹠行動物で、立つて歩くのに關聯して居る。齒も亦大切で、此は營養に必要であり、又特に遺傳し易いからである。——第四に顧慮するのは、いくらか肉附きのよい事、即ち植物質の作用、造形性の秀て居る事で、此は

胎兒に十分の營養を與へ得るしるしである。女子の胸部が能くふくらむで居るのは、男性に對して餘程感を起させるもので、此は生兒に十分營養を與へるといふしるしになり、女子の繁殖力と密接に關聯するからである。それと反して、過度に肥つた女子は、忌嫌を起させるが、その原因は、この特質が子宮の萎縮を示し、不妊のしるしであるから、此の事は頭腦で之を知るのではなく、本能が知る。——そこで最後は顔の美しい事。こゝにも骨格の點が第一になつて、即ち主として鼻の美しいのに歸し、短くて反り反つた鼻は萬事を臺なしにする。上に向くなり、下に向くなり、鼻の少し曲つたのは、數知れぬ少女の一生の幸福に大關係を及ぼすが、此は至當の事で、種族の型と關聯した事である。腭骨が小さくて口の小さなも大切で、此は動物の口と違つて、人間の顔容に特得な特質である。頤が切り取られた様に後に寄つて居るのは、特に忌で、頤の秀でたのは人類のみに特有の特色である。最後に、顧慮するのは眼と額との美しい事で、此は心の特質に關聯し、特に知力の特質、即ち母から遺傳すべき事に關聯する。

之に對して女子が意向を決するに當つて無意識に顧慮する點は、これほど精密に測り得

ない。全體として次の事はいへる。本當は壯年は男子の美の最も立派なものであるが、女子がその中で特に擇ぶのは、三十から三十五の年齢である。その理由は、此が趣味から來るのでなくて、本能に支配せられるため、この年輩には生殖力がその頂點に達するといふ事を識るにある。一般に女子は、美、特に顔の美を餘り重んじない、即ちその美を小供に傳へるためにのみ、自分の方に取つた如くである。主に女子の心を奪ふのは、男子の強さと、それに結び附て居る勇氣とであつて、此に依つて強い小供を生み、又同時に小供を保護するに勇のある人を望む。男子に體質上の缺點があり、型に戻つた點があつても、女子の方でその點に缺點がなく、又は反對の方面に秀でて居れば、小供に對しては、生産の時に之を矯め得る。但し男姓のみに特有で、母親からは小供に傳へ得ない様な特質は、此の取りのけであつて、男子らしい骨格組立て、肩幅の廣さ、腰の細さ、眞直な脚、筋肉の力、勇氣、髯鬚など此である。それ故、女子は醜男子を好む事はあつても、男らしい男を好まず、つまり、此の缺點は女子で中和する事が出來ないからである。

男女の愛情の根據として顧慮に上る事の第二類は、精神上の特質に關する事。この點で

著しいのは、女子がどこまでも男子の心情、即ち性格の特質に引きつけられる事で、——此は父親から遺傳する。特に大切なのは、意志の鞏固な事、決斷力と勇氣と、又恐らく正直な事と心情の良い事は、女子が心を引かれる點である。その反對に知力上の秀逸は、女子に對しては直接又本能のまゝの勢力を及ぼさないもので、此は父親から遺傳しないからである。理會に乏しいのは、女子のかまはない事で、却て精神力が勝れて居、天才であるのは、異常態として女子には餘り好まれない。それ故、愚で粗野な醜男子が、女子に關しては、却て素養があり、精神で秀でて人好きのよい男子よりも勝を制する事が屢ある。精神「知能」の上からいへば餘程違つた者同志が眞の愛情で結婚する事もあり、男は粗野で強くて而かも知力で劣り、女は感じが細かで、考へが密で、素養があり、趣味があるなどの場合がある、然し又男は全く天才で學者で、女は全く愚物である事もある。

(女神には顔形、されど半は狂氣の氣分にして、同じからぬ形と心とを、堅きつなぎに結ぶは、女神の好む所。)

その理由は、つまりこゝには知力上の事とは全く別の事、——即ち本能の顧慮のみが行

はれるからである。結婚の目的は、精神に富むだ談話をするためではなく、子供を生むにあり、心情の結びであつて、頭腦のつなぎでない。女子が、男の精神にほれたなどいふのは、虚榮で愚な云ひ分であるか、然らずば變態になつた人間の跳反りである。——その反對に、男子は本能のまゝでは、女子の性格特質を求めて愛情を起さない、多くのソクラテースがそのクサンテツパ「夫に似合はぬ婦」を得たのもこのため、シエキスピアだの、アルブレヒト・デュレルだの、バイロンだの、皆その實例である。但し、知力上の特質は母親から傳はるものであるから、こゝでもこの點が影響を及ぼすのであらうが、又形體の美は、尙一層大切な點に觸れて直接に働くものであるから、その方が知力の方以上に勢力を占める事がある。又此と共に、この勢力を感じ又は経験して、母親は美術や言語などの點で女の子を教育して、その子が男を引き附ける様にするといふ事も加はる、即ち母親が女の子の知力を人工の手段で助けやうとするので、或る場合にはお臀や胸で助けると同じである。——兎に角、何れにしてもこゝに云つたのは皆、本當の戀愛が生ずる元で、全く直接で本能的の引力についてののみいつたのである。理會に富み又素養のある女子が、男の

精神に重きをおき、又男が理性の熟慮からしてその新婦の性格を検査し顧慮に加へるの
は、こゝに云つた事柄には無關係であつて、その様な事は結婚に當つて理性での撰擇をさせやうが、今我々の述べて居る情熱の愛にはならぬ。

此から相待の、即ち個人的の方を觀察しやう、この方面で目指す所は、種族の型が不完全に現はれて居るのを矯正し、撰擇者自身の人物に已に存して居る變態不規律を直ほして、型を純粹に表出しやうとするにある。それ故、この場合に人の好むのは、自分に缺けた點である。相待の方面の顧慮から出る撰擇は、個人の性情から出て、個人の性情を目當にするものであるから、只絶對の方から出るものよりも餘程極まりが付き、明確であり又集中して来る、即ち一般に云つて、相待の顧慮からは、特有な情熱のある愛情が生じ、絶待の方では、通常で軽い好みのみあるのは、此のためである。そこで又、強い情熱を焚きつけるのは、規則正しく完全な美でないのが常である。事實情熱的の愛好が生ずるに必要な状態は、二人の人間が中和する要があるのである。此に必要な要件を大體でいへば、次の如くである。第一には、兩姓の性は皆一方に偏して居る。この偏性は、或る人には他の

人よりも明確に現はれ、又高度に存在して居るから、何れの人でも、自分の偏した點を補ひ、又中和するには、異姓の中で、あの人よりはこの人方が都合よいといふ事があり、新しく生むべき個體に人類の型を完うするためには、何れの人も自分の個性に反對に偏したものを要し、何事もこの新個體の性情を目當として行はれる。今いふ如くに二人の人が互に中和するには、男の方の男姓が、女の方の女姓に、互にうまく相應するといふ事が必要で、それに依つて互の偏したのを矯めて行く。そこで最も男らしい男は、最も女らしい女を求め、又その反對に女は男らしい男を求め、その様にして何れの人も、男女姓の度合で自分に相應する者を求める。この場合に、二人の間にどれだけ互に必要な交渉があるかは、全く本能的に感ぜられる事で、此が他の相待の顧慮と共に、戀愛の強弱の根本になる。即ち愛し合ふ者が、互の心が能く合ふといふ事を熱して云ふには、主としてこゝに云つた事、二人の間に生むべき子と、その子の完全になるための、相互の配合が、事態の中心になつて居る。その他、何れの人も、自分の弱點、缺點、型から離れた變態を滅するに相手の補ひでする様にし、それで此等の缺點が生兒に傳はり、又全くの變態になつてしま

5
はない様にするから、そのために色々顧慮する様になる。筋肉の弱い男は、それだけ強い女子を求め、女も亦自分の方で求める所がある。但し、常則として、女は筋肉の力の弱いのが天性であるから、常則としては女は力の強い男を好む。——その他に顧慮に上る大切な點は身長である。小さい男は特に大きな女を、又小さい女は大きな男を好み、特に小な男で、父親は大きかつたに母親の小さかつたために小さいものは、大きな女に對して情熱が強い、此は、血管系統とその大きな身體に血を供給すべき血管の勢とは、之を父親から得たためである、その反對に父親も祖父も小かつた場合には、大きな女を求める傾きは、それほどに著しくない。大きな女が大きな男を好まないのは、二人の間に大きな人種が出來、それに對してこの女から興へらるべき力が、長命をさせるには不十分になる恐れがあるから、それを避けやうといふ天然の見當から出る事である。——尙大切な事は色艶である。金髪の者は全く黒いか又は褐毛の者を好むが、黒や褐の者は金髪を好まない。此はつまり、金髪や碧眼は云はゞ一つの贅澤、又は變態であるためである。此の種は極地に近い所にもなく、ヨーロッパ以外の地にはなく、多分スカンデネヴィアから出たものであらう。

序でにわしの意見を述べておくが、白い皮膚は人間の天性でなく、人間は、我々の祖先である印度人の如く、天然には黒か又は褐色の皮膚であらう、それ故又、實は白人なるものはなく、白い人間は何れも色のはけたのである。自分の生地でない北方に侵入したため、數千年の間に段々に白くなつたのであらう、それ故白人は北地にのみある。そこで天然は、男女の愛情に依つて、黒髮褐眼の原型に歸さうと勉めて居る、印度人の褐色が忌はしいといふ程でもないが、然し白い皮膚が我々には第二の天性になつて居る。——最後に、何れの人も、その身體の局部について、自分の缺點や變態を矯正しやうとし、それが重要な局部であれば、その求めはそれだけ強い。鼻の低い人間が、鷹鼻や鸚鵡顔の人に對して、得も云はれず好ましく思ふのは此のためである、その他の局部についても亦皆同様。——それと同様、氣質も顧慮に上る點で、何れの人も自分の反對を好むが、但し自分の明確である場合に限る。——或る點で特に完全な人は、その點で不完全な者を求め又好むといふ譯ではないが、他の點よりは、その點では大目に見る、つまりその點では、子供にも完全な氣質を與へ得る事が確である故。例へば、自分が非常に白い者は、黄色な顔の者を忌みはしないが、黄色の者は、輝く様に白いのを神々しう美しと見る。——男が非常に醜婦に戀する事も稀にはあるが、此は、上に述べた如く、兩姓異性の度合が能く調和して、女の戀態全體が恰も自分の反對で、自分のを矯正するに足るために生ずる。この場合には、戀は高度に達するが常である。

我々が女の身體の局部局部を精査して觀望するに當つて、又女が同じ様にするに當つて、非常に眞面目になり、自分の氣に入りかけた女を吟味する場合に、批評眼の細密さ加減、我々の撰擇の我儘な事、——何れも皆、その目的が重要であるに相當して居る。此はつまり、新に生まれるべき者が、その終生、同じ様な軀つきを得るべき様になつて居るためであつて、例へば、女が少し屈んで居れば、その子には僂儂があり易く、その外の事も同様である。——此等の事は勿論意識には上らず、又何れの人も、只自分自らの淫樂のためこのむづかしい撰擇をするのだと想つて居るが、實は自分自らの體格を土臺にし、それに應じて、種族の型を出来るだけ純潔に保たうといふ秘れた職務に依つて、種の利害に順應する様にやつて居るのである。——異姓の若い者二人が初めて逢つて互に見合ふ場合

に、深く而かも無意識に眞面目であり、彼等が互に探り且つ見守る目付き、互に他の方の容貌や局部を詳しく検査して見る注意、此等には全く特別の事があるのである。この探求、検査は、即ち種族の靈が、此等二人で生すべき個體と、二人の性能の配合とについて、深く沈思するのである。この沈思の結果、二人が互に好み又互に慕ふ程度が定まる。此が或る高度に達した後も、前には氣のつかなくつた事を發見したために俄に消滅する事もある。クピド(戀愛)が絶えず働き、默想し、考へつゝ勉める大事業といふのは、即ち未來の種族の性情にある。この大事件は、未來世々の種族に關する大事業で、それに比べては、全體が一時の現はれである個體の事態は何でもない、クピトが何時までもおかまひなしに個體を犠牲にするのには此のためである。即ちクピドと個體との關係は、不滅な者と生滅のものとの如く、その利害の關係は無限と有限との如きものである。そこで、只個人の苦樂に關するよりも以上の大事件を支配して居るといふ意識で、クピドは戰爭の騒ぎの中にも、かまはずに堂々と之を行ひ、實務生活の繁劇の間にも、疫病流行の際にも之を行ひ、僧房の閑靜裏にも侵入する。

今までに見て來た如く、戀の熱し加減はその個體の定まるだけ増し、二人の體質性情が、種族の型を出来るだけ立派にするに都合よい様になるには、一方は極めて特別で又十分に他を補ふに足るを要し、それに適つた者をそれに限るとして要望する。この様な場合には著しい情熱が起り、唯一つの相手にのみ之を向けて、恰も種の特別な代理として生じ、そこで直に一層高尚で堂々とした色合ひを帯びる。相手の個體が定まり、それと共に戀が熱くなつて、その極端になれば、若しそれを満足しない場合には、世にあらゆる財寶も、生命も亦顧みるに足りない様にもなる。此の様に横溢する情熱の根本には、前に述べた如く意識に上らない顧慮が横はつて居るが、その外尙我々が一寸見ない他の點がある。即ちこゝには、體格のみでなく、男の意志と女の知力とが互に特別の配合を得、その結果二人の間に生まれるべき個體は或る一定の者に生まれる様になつて居、この個體の生存は即ち種の靈が二人の戀の中に目當として居る所であつて、その根底は物事の自爾の本性に存する事故、我々はその奥を突き止め得ない。尙適切に云へば、生きやうとする意志がこの場合に要求して居る事は、特に定まつた個體の中に自ら客觀化しやうといふにあり、こ

の個體はこの父この母でのみ生じ得るといふにある。意志自爾に此の様に形而上的に欲求する所は、さしづめ未來の兩親たるものの心情の外には、衆生の中に發動すべき範圍はなく、彼等はこの強壓に捕はれて、而かもそれを自分等自らのために願望して居ると想つて居るが、その實は、この場合には尙、全く形而上で、現實現前の物事以上にその目的に持つて居るのである。即ち此の様にして將來に出来るべき個體は、こゝで始めて出来る見込をつけたので、それが生まれ出やうといふ強壓は、一切衆生の根本源泉から出るもの、この強壓が未來の兩親なる者互の情熱となり、この情熱は自分以外のものを總て蔑視して、殆ど無比の妄想となり、戀にかゝた男は、そのためには世のあらゆる財寶を棄てて、その女と交らうとする。その目的がこの點にのみあるといふ事は、この情熱は高尚な様でも、他の總ての情熱と同じく、成就と共に消滅するのでも知られ——此には當事者は自ら驚く。そこで、女が不妊でもある場合には、本來の形而上の目的は達せられないから、戀は消えてしまふ、この目的は又日々萌芽のまゝで百千萬も破滅し、而かもその中には生きやうとする形而上の生命力は生存しやうと努力して居るが、この場合に慰藉といふべきは、生きやうとする意志が時間と空間と物質とを無限に有ち得、従つて反復回復に無盡の機會があるといふ一事のみ。

愛情の焦れ、あらゆる時代の詩人は絶えず之を描かうとしても、その事柄は盡きず、これだけ描いても十分といふ事はないが、この焦れは、一定の女を得れば無限の幸福になるとの現象を伴ひ、又それが得られないといふ考へには、不可説の痛みが生ずる、——此の様な愛情の焦れと、此の様な痛みに實質となるものが、過ぎ行く影である個人の需要から出る譯はない、此等は皆種族の靈の喘ぎである。無限の生命のあるのは只種族のみで、そこでその願望も無限、その満足も無限、又その痛みも無限にあり得る。然るに此等は今の場合、生滅の個人の胸中に閉ぢ込められて居る、そこで此がこの閉ぢ込めを破らうとする如く見え、又無限の幸福か若くは無限の苦惱を思ひ仰いで、胸に充ちて居るものを言ひ表はし得ないのも、皆無理はない。そこで此等は、堂々たる種類のあらゆる色情を歌つた詩に材料を供給し、その高さに應じて超絶的に、總て地上の事を飛び超えた形容となつて表はれる。戀の對手の長處が、何か精神で、又全體客觀的に實在のもので、それが此の如き

無限の大切な事の根據になる事はあり得ない、此等の價は、戀をして居る者自らも、十分には知らない所であつて、ペトラルカの如きその適例である。自分にとつて、又自分の目的のために、どの様な價植があるかといふ事を、一目で見得るのは、只種族のみである。又強い情熱は一旦見初めた時に起るのが常であり、

「戀をしたもので、初めて見た時に戀ひしなかつたものがあらうか。シエキスピア」

この點について面白い事が、二百五十年來名高い、マテオ・アレマンの小説の文句にある、「人が戀ひをするには、それを熟慮に訴へて撰擇するといふ様な時間の經つ要は少しもなく、初めて見、只その人のみを見て、何かの配合調和が互に行き逢へば十分であり、通常、血の同感と稱するものがあればよく、それには何か定まつた星宿の力が加はつて居るのであらう」。それと同じく、戀人が死ぬか、又は他の情人に奪はれるかで之を失へば、情熱の愛情ある者にとつて、その痛みは總て他の痛よりも強く、この痛みは、個人としての己れに關するばかりでなくて、自分の久遠の本性である種族の生命に損害を與へる、つまりその人は種族の特別な意志とその委任とで戀をして居るのである故。この譯故、嫉妬

は非常の苦惱を與へて猛烈で、戀人の逃げるのは、あらゆる犠牲の最大なるものである。

——何れの勇者も、愁嘆をば恥とするが、只戀の愁嘆のみは之を恥としない、此は自分自らがするのでなく、種族が放つ嘆聲なのである。

第五章 意志の主張について

生きやうとする意志が、只自家保存の衝動としてのみ發表するものならば、それは個體現象の主張に過ぎず、その天然存生の束の間生きるに止まらう。それだけの生命の苦勞配慮ならば、それは大したものではなく、従つてその生存は容易で又快濶で濟まう。然るに意志が生命を欲するのは、全體に亘り又何れの時にも亘るから、意志は又同時に性慾として現はれ、これは世々代々の無限につゞくを自當とする。個體生活だけに伴ふ心配無し、快濶、無邪氣は、此の衝動のために息み、此は意識に不安と憂鬱とを齎らし、生涯に不運と心配と困厄とを與へる。——又稀に見る如く、此の慾を任意に抑制すれば、それは即ち意

志が回轉して方向を轉換したのである。さすれば意志は個人に現はれるのみで、それ以上に出ない。然しかうするには、苦痛を忍むで無理にしなければならず、その無理は生命自らの上にも及ぶ。而かも尙それを斷行すれば、意志には單に個人としての生存の心配無しと快濶とがあるのみで、それも一層嵩じて現はれる。——それと違つて、あらゆる衝動や願望の中での最も激しいこの慾を満足すれば、それに新たな生存の起りが伴ひ、又従つて生活と、その重荷や心配や、困厄や苦痛を更につゞけ貫く事も伴ふ、それは別の個體とする事であつて、この兩人は現はれでは別のものであるが、一體自爾にも亦相異なる者ならば、久遠の正義といふものはどこにあるか。生むだ者が生まれた者を自分自らの再現だと認める、そこに親の愛情の基があり、従つて父たるものは、自分自らのためよりも、多く子供のためにし、又悩み、又何事をも敢てし、而してそれ等を自分の責務だと見る。

一人の生活には、不盡の辛勞と困厄と悩みとがあるのは、生殖といふ仕事を説明し又言ひ換へたもの、而して生殖は明かに生きやうとする意志を主張したものの、その上又自然の性として死が必ず伴ふが、その人は心を痛めて此の責務に對する。——此の如きは即ち、

我々の生存が一つの負債だといふ事を示して居ないか。——然るに生と死といふ定期に支拂ふべき關稅があるに係らず、兎に角我々はいつこゝに生存して、生命のあらゆる悩みと悦びとを享け、而してその何れも我々を離れ得ない、此が即ち生きやうとする意志を主張する結果。人には生命の困厄が澤山あるに係らず、人は皆死を恐れて、生命を固守するが、それは皆幻である、之を客觀的に見ては、二人相愛するものが互に慕ひ合ふ眼附に現はれ、此は即ち生きやうとする意志が自ら主張する最も純白な表はれである。こゝで意志のしとやかさ、又細かさ。意志は幸を得やうとし、又静けく樂み、しとやかな悦を得やうとし、自らのためにも、他のためにも、又皆のために之を欲する。此くして意志は、媚び阿つて自らを生命におびき寄せる。然るに已に生命に飛び込むでは、苦惱が犯罪を起し、罪は又苦惱を生じ、その舞臺を充たすものは恐怖と落寔のみ。

ところで、此の様にして意志が自ら主張し、又それに依つて人間が生ずるその動作は、何れの人も最も内實に自ら恥づる行爲であつて、皆用心して之を隠し、若しそれに接すれば、何か犯罪につりこまれた如くに驚き恐れる。この行爲は、若し冷靜に熟慮しては大抵

好まず、又氣分の高くなつた場合に思へば忌な事である。この行爲には、それに特有な沈鬱と悔みとが直に踵を接し、特にそれを始めてした後にも最も之を感じ、又性格の高尙な人ほどいつも明白に之を感じる。プリニオも云つて居る、「初めての人にとつて、交合は悔み、悔むべき事の源として、生命のこのしるしを考へ見よ。」又一方では、グーテの『フアウスト』で、悪魔や妖女が、その祭日にやつたり歌つたりするのは何か。不倫と猥褻。又同じ曲の中で、五體を具へた悪魔サタンが、人々の集まりの前で何事を講釋するか。——亂行と猥褻、その外に何もなし。——それでも、此の様な行爲を斷えず實行するので、又それのみで人間種族は成り立つて行く。——若し樂天主義が正しいならば、我々の生存は最も感謝すべきもの、智慧に導かれて來る最も貴い財寶であつて、従つて自爾に賞讃すべく、名譽で又喜ぶべき事であらう。

第六章 生命に於ける虚無と悩み

意志の客觀が盡く虚無である事を、個人の中に根ざす知力に知らせ、又分かり易くする工合は、第一に時間にある。即ち此の方式あるに依つて、物事の虚無である事は、それ等物事の生滅相として現はれ、此の方式のあるために、我々の快樂や歡喜は我々自らの手中で虚無となり、後になつて見れば、それ等が今どこにあるかと、驚き問はざるを得ない。即ちこの虚無は、時間の中に客觀となつて居る唯一のもので、即ち物事の自爾の本性に相當して、それを發表したものである。それ故、時間は我々の直觀に盡く必然な先天の方式であつて、何事も、我々自らも、皆その中で發表する外はない。かう見れば、我々の生命は先づ支拂の如きもので、一々銅貨のみで數へて見て、而かも終には之を拂つてしまはなければならぬ、數へは即ち日々で、支拂の受取書は即ち死。時間は要するに、その中に現はれる本性を破滅して、それ等の價值について天然の宣告をし、最後の申渡しをする。

「といふも正當の事、即ち生ずる者は何れも滅すべき者。されば何事も生ぜざるを勝れりとせずや」。

此の様に、何れの生命も、必然老衰と死亡とに向つて急ぐから、生きやうとする意

志は、自分で自ら躊躇すべき努力であるといふ事を、天然自らの口から、この意志に對して申し渡して居る。その云ふ所は、『お前が欲した事は皆その様にして終りを遂げる、何か一層喜ぶ事を欲しないか』と。——即ち何れの人に對してもその生命が與へる教訓は、全體としてこゝにあり、人が願ふ所は恒に欺き、動搖し而して亡び、歡喜よりは多く苦惱を齎らし、最後にはそれ等が盡く立つて居る地盤土臺は全く崩れて、その生命自らも終には亡び、その様にして最後に確め得る事は、その努力も慾も皆顛倒で迷路であつたといふ一事。

「かくて老衰と經驗とは、相携へてその人を死に案内し、彼が永年辛勞して求め搜りし後に、終に理會せしむるは、その一生は總て是れ錯誤なりと云ふ一事。」

然しこの事についてわしの見解は、最も多く反對を招いた點であるから、尙詳しく之を説かう。——その第一には、總て満足なるもの、即ち快樂や幸福は皆消極性であつて、之に對して苦痛は盡く積極性である事を尙確めるにある。

我々は苦痛は之を感じるが、苦痛のないのは感じない、心配は感ずるが、心配のないの

は感ぜず、恐れは感ずるが、安固は感じない。饑や渴を感ずる如く、願望は之を感ずるが、それが満足すれば、恰も噛みしめる味と同じく、それを嚙み下した刹那に、我々の感じには存しないものになる。樂みや悦びがなくなれば、その缺を感ずるのは苦痛であるが、苦痛は長い間つゞいた後に亡くなつても、直には缺を感ぜず、故意に、考慮でその事を考へるに止まる。それといふのは、苦痛や缺乏は積極的に感じに上り、それだけで感じに訴へる爲で、その反對に、樂は消極的たるに止まる。それ故、健康、壯齡、自由、この三つの生命の寶は、そのある間はそのままでは之を心に止めず、それを失つて後に分かつて來る、此も皆此等が消極であるため。自分の生活に幸福な日を送つた事は、不幸な日が來て始めて分かる。——快樂が増せば増すだけ、その感受性は減じ、慣れた事は快樂にならない様になる。そこでそれだけ悩みに對する感受性は増し、慣れた事は快樂に感ずる。その様にして、物をつかまへて居ては、それを必要とする度は増し、又それだけ苦痛を感ずる能力も増す。——愉快な時には、時間が早く經ち、苦しく送る時は、時間の經過が遅い、即ち積極的にその現在して居るのが感せられるのは、苦痛であつて快樂では

ない。それと同じく、退屈の時には時を感じるが、氣ばらしのある時には感じない。大きな活き／＼した悦びといふ事は、その前に大きな困厄のあつた結果であるのみであつて、満足が常住につゞくといふ状態に加ふべきものは、何か氣ばらしな、又は虚榮の満足に過ぎない。美學上のこの必然事を、ウォーター・スコットはその小説に述べて居る。——彼の天性快濶で又幸運を得たヴォルテールも、こゝに云つた眞理と全く一致した事をいつて居る。「幸福は夢に過ぎず、苦痛は實」と、而して又「この事を感じるのは八十年以來。その中には自分であきらめる外に何もなく、蠅は蜘蛛に食はれるため、人は煩惱に食ひ盡されるために生まれたといふ外ない」。

苦し人あつて、生命は願はしく又感謝すべき財寶だと安心して云ふならば、その人は一度能く落ち附いて、人が一生に樂み得るありさうな悦びと、一生に遭遇するありさうな悩みとを、雙方總括して比べて見るがよい。

「千の樂みは一人の苦惱にも匹敵せず。ペトラルカ」

千人の人が幸福と慶喜の中に生きたとて、唯一人の氣遣ひや死の苦みを滅せず、自分が現在多幸であつても、自分の以前の惱みはなかつた事にならない。その故、害悪が現に在るより百分一も少くこの世にあつたとしても、それが現にあるといふだけで、この眞理を打ち建てるには十分であつて、それを色々に云ひ表はし、又いつも何か間接に云つて見ても、つゞまり、この世の生存は我々を悦ばせるものでなく、寧ろ我々を悲ますといふにある、世界はその根底で、あるべからざるもの、その他色々に云ひ得る。この事をバイロンが云つて居るのは美はしい。

「我等が命は偽りのもの、そは物事の調和にあらず、痛きはこの定命、罪の拭ひ難き汚れ、極みもなきウバス(毒樹)何物をも枯らすはこの樹、その根は地、その葉と枝とは虚空にして、それより人の上に降るは毒の雨、病と死と繫縛、このあらゆる痛みは眼の前、その上に尙悪しきは見えぬ痛み、救ひもなき心の中に搖ぎわたり、常に常に心の痛みを新にす。」

若しこの世界と人生とがそれ自らで目的であり、そこで理論の上ではその理由を解釋する要もなく、實行の上ではその害を償ひ又それを直ほす要もなく、スピノザや今日のスピ

ノザ派の説く様に、それ等は生の原因たる一神の唯一の發現として存在し、若くは分神が自ら映して見るために、その様な進化發展を自らにして見たものであつて、従つてその存在は、別の根據を理由ともせず、又その結果で解散せられる様なものとするれば——さすれば人生の悩みと困厄とは、その中にある快樂と幸福とて全く帳消しになるべきである、然るに、此の様な事はあり得ない事であつて、未來の悦は未來に時を占め、現在は今を占領して、現在の自分の苦痛は、未來に悦びがあるからといつて亡くはならない、そこで人生を正當としやうとすれば、少しも悩みはなく、死もなく、又我々にとつて恐ろしいといふ事の全くない世でなくてはならぬ。かくあつてこそ、人生はそれ自らの價があるといへやう。

然るに我々の状態は實は無い方がましだといふ如きものであるから、我々の周圍にある者は盡くその痕跡があり、何れの物も不完全で又だまかであり、愉快なものには不快が之れに代はり、快樂は盡く半分のもの、慰みには各その障礙が伴ひ、我々が歩むで居る階段は、一步一步下の方で壞れ、大小様々の不運はこの人生の原素をなしてゐる。此に對する手段として二つの方法があるが、その第一は即ち利巧、用心、狡智であるが、それでは結了もせず、又目的に不十分であつて、その終は耻辱。第二はストア風の平心であつて、何事に對しても心を定め、何事についても輕蔑してかかつて、それで不運を撃退しやうといふにあら、此は實行の上では犬儒風のおきらめになり、寧ろ頭から苦を軽くしやうといふ様な手段を棄ててしまひ、その結果は、湯槽の中に居るデオゲネースの如く、人を犬にする。そこでその眞實は、我々は情ない狀に居るべきで、又實にかくあるといふ事にある。その場合、人間に來る最も深刻な害惡の主な源泉は人間自らであつて、「人は人に對して狼」。この事を能く眼中におけば、この世界は一つの幽府であつて、かのダンテの幽府にも優れて、各々の人は他に對して鬼になつて居る、その中でも亦何れかの一人が他にも勝つて、鬼の親方になり、征服者といふ姿で現はれ、數十萬の人をして互に相敵せしめて、彼等に叫んでいふには、『悩むと死ぬとはお前達の定つた命だぞ、だから今鐵砲と大砲とで互に殺し合へ』と、そこで彼等はその通りにする。——人間が相互に相對する工合は、常則として、不義、極端の不當、慳惡、殘忍であつて、その反對の方は只時々除外例

として現はれるのみ。こゝに國家と立法とが必要である根據があるが、君等のいふ詐りはその根據でない。そこで、法律の領域に這入らない事については、直に人がその同類に對しての我儘放埒が行はれ、此等は限りのない主我、又時としては悪性から出て来る。

それに加へて、何でもない偶事のために、我も人も不幸に陥る事はあるが、世界の中で全く多幸といふものは何もない。之を他の云ひ方にして見れば、幸福な人の最も多幸な刹那は、その眠り入つた時にあり、不幸な人の最も不幸な刹那は、その醒めた時にある。——人々が不幸と感じ、従つて不幸であるといふ事の間接の證據、但し確實な證據は、餘る程あつて、何れの人にも心の中に燃える嫉妬が潜み、如何なる生活の關係にあつても、何か一つ勝れたものがあれば、その種類の如何に係らず、それを折にして直に發動して、その毒を現はさずには居られない。

生命がそれ自らで貴い寶であり、生存しないよりは確かに勝つて居るならば、死と死の恐れといふ様な恐ろしい番人を、その脱け口につけておく要はない筈。然るに、死といふ事がそれ程に恐ろしくなかつたならば、今のまゝの生命を固守する者があらうか。然るに、死が生命の終りであるから、それでよいものになつて居るので、生命の悩みを慰めるには死で慰め、又死に對しては、生命の悩みがあるといふので自ら慰める。眞實をいへば、この二つは離れない様に結びついて居、二つが集まつて迷宮を作り、それを脱け出るのは、願はしいが、又むづかしい。

その生存の原理は明々に根據のないもの、即ち生きやうとする盲目の意志であつて、此の意志は物自爾として根據の原理に従はず、此の原理は只現象の方式であり、何故といふ事を示すのみで、物自爾には及ばない。然るに此が世界の性情に適つて居るので、我々が自らを眺めて居る位置に我々を置くものは、明のある意志でなく、盲目の意志の外にあり得ない。意志に明が生じて來れば、この業務は費へに合はないものだといふ事を直に見積もる様になり、不斷の心配、氣遣ひ、困窮の中で、又總て個體の生命は必ず壞れるに定まつた中で、あらゆる骨折をして、力を盡して努め争つても、かくして得るこの生存は幻に似て、我々の手で無に歸し、それには何等の賠償もない事を見るに至らう。それに對して、生命はその始めから終りまで一つの教科だといふ事をいふが、それには何人も答へて

云はう、『さすれば、自分は寧ろ、不足のない虚無の休みの中に棄てゝいて貰つて、教科だとか何だとかいふものゝ要のない方が結構だ。』それに尙加へて、人が一度はその一生の中に毎時間について始末書を出すべきだといふならば、それに先つて、自分は彼の休みの中から引つ張り出されて、この様なつまらない、暗い、氣遣ひ多く、苦しい位置に置かれたといふ事について、始末書を要求する権利があるといはなければならぬ。人間の生存は、一つの贈物たる性質を具へるところでなく、どこまでも全く負債を契約した如きものである。全生涯は即ちこの負債を果すために費すのが常則であつて、それも僅に利息を拂ひ切るに過ぎない。その元金を拂ふのは死で始めて出来る。——而してこの負債の契約を何時したか。——生殖の時に。

それ故、人間なるものの生存は、一つの罰で又罪亡しだと思れば、——それだけで已に正しい見方である。罪惡墮落の神話、此は舊約書の中で譬喩形容であるが、形而上の眞理とすべき唯一のものであらう、これがある故、わしは舊約書を容れ得る。間違ひの結果、罰すべき淫慾の結果、我々の生存は最も此に似て居る。我々の生存に付き纏ふて居る負債

の程度を計らうと思へば、それに結びついて居る悩みを見るがよい。大きな苦惱は、身體の中でも精神の中でも、何れも我々がどんなものであるべきかといふ事を語り、我々が苦むべきものでなくば、苦惱が来る筈はない。キリスト教がこの見方で我々の生存を見て居る證據には、ルーテルがガラテア書三章に註解した文にある、それはラテン文でのみ傳はつて居るが、『我等は、身體にても又事柄にても、盡く惡魔に制せられ、この世界にては客人たるに過ぎず、その主人は即ち神なり。此を以て我等が食ふパン、我等が飲む飲物、我等が用ふる被服、又我等が肉身の生を維く空氣その他のものにて、皆盡くその支配の下にあり。』——わしの哲學は憂鬱で絶望的だとかましく云ふが、それはわしが罪の償ひとして未來の地獄などを説かないで、負債のある處、即ちこの世には、地獄の様なものがあるといふ事を示すがために出る非難であつて、この事を拒絶しやうとしても、——それを一度經驗するのは容易の事である。

此の世は、衆生が苦み惱み心を勞する騒ぎの舞臺、彼等が互に食ひ合ふので出来上り、一々の猛獸は百千の他の動物に對して生きた墓となり、自分の生命を維持するには虐殺を

續行し、その上又苦痛を感じる能力は認識と共に増して、人間に至つてその最高度に達し、その知能が多いに従ひ苦みは高まる、——この様な世界に樂天觀の學系を合はせやうとして、此が、あり得る世界の最善なものだとして説き示さうとする者がある。その不都合は誠に明白。——然るに樂天家は、わしの眼を開いてくれるといつて、世界に日光が照つて、その山も河も、流れや植物や動物も、皆共に美はしいといつて、その世界を眺めようといふ。——さすれば、一體世界はのぞき眼鏡なのか。見るにはそれ等は如何にも美はしい、然しそれとなるのは全く別の事。——そこへ又神學者が來て、わしに向つてこの世の巧みな仕掛けを賞讃し、この仕掛けがあるから、遊星が互に頭と頭とぶつかりもせず、陸と海とが粥汁にもならず、又互に立派に相別れ、又萬物は不斷の氷にも固まらず、又熱にもとろけず、それと共に地軸が少し傾いて居るので、世は春ばかりでなく、そこで成熟の秋も來るなど、色々示さうとする。——然し此等の事やその他似た事は、何れも皆「それなくば成り立たないといふ要件」に過ぎない。

ブルタコの美はしい句に、

「生まるるは害悪に入る事なれば、それだけにて悲し、されば死してこの悲慘を終りなば、友達はその人を讃し、歡喜を以てその人に從へ。」とあり。

此と歴史上の親縁があるのではないが、事態の道德上の意味で此と同列にすべきのは、メキシコ人が新に生まれた者を迎へる言葉であつて、『我が兒よ、お前が生まれて來たのは忍ぶため、それ故、忍び、惱み、而して黙れ』といふ。此と同じ感情を辿つて、スヰフトは、若い時から、自分の誕生日を歡喜の時とせず、悲嘆に入る時とし、あのイヨヴが、その父の家で男子が出來たといつたその日を嘆き且つ咀つたといふ聖書を読むだといふ。

第七章 倫理について

道德上の研究が、物理やその他何れの研究よりも非常に大切であるのは、それが直に物自爾に關係して居るため、即ち直接に認識の光りに觸れては、その本性を意志として現

はして居るその現象に關係して居る。その反對に物理上の眞理は、全く現識、即ち現象の範圍に止まつて、意志の最も低い現象が規則正しう現識に表はれる様を示すに止まる。——その上、形而下の方面からのみ世界を觀察しては、それはうまく又深く進むでも、その結果に於ては我々の安慰にはならない、安慰を齎らするは、道德の方面のみで、その方では觀察は我々自身の内部を披いて見せる。

世界の現象を生じ、又従つてその性情を定める力を、心根の道德性と結びつけて、それで道德的の世界秩序を形而下の秩序の根底として示す、——此はソクラテース以來哲學の問題になつて居る。有神教は子供けたやり方で之を試みたが、成熟した人類はそれで満足しない。萬有神教は一體に、倫理の退け得ない要求に逢ひ、又それに次いで、世界の害と憐みとで結局蹉躓すべきもの。世界が神の現はれであるとすれば、人間は勿論、動物のする事も盡く直に神の事で立派であるべく、何れも非難すべきものはなく、此が彼よりも勝るといふ事もない、さうすれば倫理はなくなる。即ちこの譯で、スピノザ主義、萬有神教が今日復興して來た結果、倫理沈落し平板になつて、都合好く國家や家族の生活をする手

引きに過ぎないものとなり、凡俗主義を組織的に完成して、面白く愉快に打ち立てるのが、人間生存の最終目的であるべき事となる。萬有神教がこの様な凡俗平凡に立ち至つたのは、ヘーゲルといふ凡庸の頭腦を、世に知れ互つた方法で大哲學者に持ち上げて贋貨を作り、始めは青年を買収してその弟子にし、彼等も亦愚化してしまつて、彼れの大言を聽く様になつたため。人間の精神に對する此の様な暴行は罰を受けずには濟まず、その芽は萌え出した。その意味でそれから主張する事には、倫理の材料は、一人一人の行動でなく、國民全體のにあり、此のみがその題目たる値があるといふ。此の様に平凡な實在論から出た見解に増して顛倒したものは他にあり得まい。一人一人に現はれて居るのは、生きやうとする意志全體、自爾の本性が分かれずに居るもので、小宇宙は大宇宙に同じである。民衆にも一人だけより外の内容はない。倫理で論ずるのは、行動と成果とでなくて欲にあり、欲するのは只個體にのみ行はれる。道德的に決するのは、只現象にのみ出て來る國民の運命でなく、一人一人の運命である。國民といふのは、本當は抽象に過ぎず、實に存在するのは個體のみ。——萬有神教の倫理に對する關係はこの様なもの。——それから

又、世界に害悪と懊惱とあるだけでも、已に有神教には合はず、そこで有神者は神正論のあらゆる言ひぬけを小盾に取らうとするが、それはヒュームや又ヴォルテールの立論で摧破せられて居る。萬有神教は、世界の悪い方面に面しては到頭支へきれない。世界を只外面ばかりから見、物理の方面からのみ観察して、秩序は常に回復して、それで全體が比較的に不滅であるより以外の事を眺中におかなければ、どうにかして、而かもどこまでも形容的に、世界は神だと説き得やう。然し人自らの内部に入つて、主觀的又道德的の方面を加へ、困窮、悩み、懊惱、又反間、悪性、醜態、顛倒が秀でて居るのを思へば、直に恐ろしくなつて、神の現はれ以外何もないといふ事を悟らう。——今こゝで示し、又曾て『天然に於ける意志』でも證明した如く、天然の中で動き働いて居る力は、我々の中にある意志と同一である。かう見れば、道德的世界秩序と世界の現象を生じて居る力と、直接に相關係する善になる。即ち意志の性情とその現象とは能く相應するもので、世界は自らの力から出来上つて居て、而かも徹頭徹尾道德上の歸着を得る。此の如くにして始めて、ソクラテース以來論議して來た問題も解け、考へて道德の方に、向けた理性の要求も満足する。

此から切れ切れの觀察を補はうが、先づ手初めに、泣く事の説明、即ち人は自らを對象としてそれに同情して泣くといふ事を、一二古代の詩句で説明しやう。——オデュセオは、度々の悩みにも曾て泣いたといふ事が表はれて居ないが、オデュセー八卷の終りの處では、彼れがまだ世に知られずに居た時、フェーケ王の許で、歌語りのデモドコが、彼れの今までの生涯で勇者としての生涯や行動を歌ふのをきいた時に、涙滂沱として注いだとある、それは、彼れの光輝ある前までの生涯と、その當時の悲惨とを對照して見たからである。即ち涙を流さしめるのは、直接に不運それ自らでなくて、それを客觀的に觀じて、現在の有様を過去に比べて見て涙となる、即ち彼れは自分自らに同情したのである。——エウリピデースも亦、ヒポリトが罪なうして刑せられて、自分自らの運命を泣いて居る時に、その口から云はせて居るには、

「エイ、我れ自らを外より眺め得たらんには、我が受けつゝある害に對して、如何に泣くべきか。」

尙わしの説明の實例として、イギリスのヘラルド新聞で見た話しを一つ入れやう。法廷で辯護士が或る事件を辯じた時に、その被告は涙を流して叫んで云つた、『今日こゝでそれと聞くまでは、今までに自分がそれだけ多く悩むだとは思はなかつた。』

性格、即ち人の本當の根本欲は不變であつても、それで悔みが實にあり得るといふ事は、それに先づ一二の定義を下して、それから解説を加へやう。——好み、意向といふのは、一定の種類の動機に對して意志が強く感受性のあるのをいふ。情熱とは強い意向であつて、それを起させる動機が意志の上に強い力を及ぼし、その動機はそれに反對する何れの動機よりも強く、そこでそれが意志を支配する力は絶待となり、その結果意志は只受け目に受け悩む様になる。感動といふのは或る動機で意志が激動して抗抵し難いものであるが、それは只一時の事で、その動機の力は意志の上に深く根ざした意向があるのでなく、突然に起つて來て、一時は總て他の動機の働きかけを排斥する、而してその動機たる現識は非常に活き活きとして居るため他のものを全く味まし、又は云はゞそれのみが近くて他を隠し、他は意識に現はれず、意志には働きかけない様になり、そこで熟慮の力、それと共に

知力上の自由は或る度まで滅却せられる。此の様にして、感動と情熱との關係は、發熱の謔妄と狂氣との如きである。

道德上の悔みが生ずるのは、行動に先つては、それに對する傾向が知力に自由の活動を與へないで、それに反對の動機を明白に又完全に眼中におく能はざらしめ、その上その方に引きつける動機の方に知力を引き寄せるにある。然るに行動を終つて見れば、それ等の動機は遂行の結果、中和して働きを失ふ様になる。そこで現實相は反對の動機を、行動の結果として出て來た事として知力に見せ、知力は此に至つて、若し自分がそれ等を適當に眼中において計量して見たならば、此等の動機がもつと強くもなつたであらうといふ事を認識する。行動に反對するものを排斥したのは、急いだ場合には感動で、熟慮してした場合には情熱である。その様になるには、その人の理性が反對動機を抽象的には思ひ浮べたが、十分有力な空想の支へがなく、反對動機の全體の實質と眞實の意味とを形像で思ひ浮べなかつたといふ事は甚だ多い。復讐心、嫉妬、貪慾などから人を殺した場合の如きは、今いつた事の實例であつて、それを遂げた後には此等の動機は消え失せ、そこで正義、同

情、今までの友情の追想などがその聲を高めて、それ等が前に發言し得たならばその前に言ひ得たであるべき事を述べ立てる。そこで痛ましい悔みが生じて云ふには、『今の様にしなかつたならば、今後は決してその様にする事もなからうに』と。此と同じ工合で、自分自らの幸運を看過したに對しても、主我的の悔みが出る事がある、——この様な譯で、此等の行ひが出るのは、根本では知力が相待的に弱いたためで、知力が意志に妨げられずば、色々の動機を思ひ浮べるといふ作用を容赦なしに遂行すべき場合に、意志のために制せられるから出る。意志が激しいのは、こゝでは只間接に原因となるので、それが知力を妨げて、それから悔みに至らしめる。——情熱性に反して性格が理性的なのは即ち愼密であつて、意志が甚しく知力を壓伏せず、抽象的には理性に對し、具體的には空想に對して、色々の動機を明白に完全に又明晰に示すといふ知力の作用を正當に實行するに當つて、意志に妨げられるに至らないにある。此は知力の強いにも因るが、又意志が中庸を得、溫和であるための事もある。

法に保護のあるのは國家あつて行はれるが、保護はなくとも法はそれ自らで在る。暴力ですれば、法は壓抑し得るが、廢絶はされない。その譯で、人間が色々の攻撃に逢ひ、一人一人では之を防ぎ得ず、他と共同してのみ防ぎ得る、それ等の色々の攻撃があるから必要になつて、保護「制裁」を行ふ機關が出来る、此が國家である。そこで國家の目的とする所は、

(一) 第一に外部に對する保護は、無生命の天然力に對しても、猛獸に對しても、亦人間に對し、他の國民や種族に對しても必要で、特に人間に對する必要が最も多く最も肝要で、人間は人間の最惡の敵、「人は人に對して狼」である。この目的の結果として、國民は他に對して互に防禦的であり、侵襲的でない様にするのを原則とし、そこで行動では別としても、言葉だけでも國際法を認める。此もその根底では天然法と別のものでなく、國民と國民との間にそれが實際に有効なのは、この範圍のみであつて、國際法は、或る度までは、國民相互の交通に行はれる徳義から出來上つて居て、それを確守するのは人類の名譽に關する事柄である。

(二) 内部に向つての保護、即ち一つの國家の一員を他の一員に對して保護するのは、

私法の保証であつて、法（義）の状態を確守するにあり、この状態は全體の力を集中して一人一人を保護するのであるから、そこで總ての人は法を守り、正義に遵ひ、何人も他を侵害したがない様な現象を呈する。

然し、どこに行つても人間世界の物事では、一害を除けばそれが他の害を起すもので、この二重の保護を安全にするには、又他の第三を必要とするに至る、即ち

(三) 保護者に對する保護で、社會が保護の權柄を委任した一人又は多數に對する保護、即ち公法の擁護。此を完全にするには、保護の權力が三つあるのを、即ち立法と司法と行政とを互に別け離して、その各々が他とは獨立して他の監督を受ける様にする。——王政は最も大切なもので、その根本觀念は、思ふに下にいふ點にある、即ち人間はやはり人間であるから、一人の人の高い位置に据えて、その人に十分の權力と富と安全とを與へ、絶對に侵すべからざるものとして、そこでその人は自分のためには願ふ事も望む事もなく、又恐れる事もない様にする、かうすれば他の人にもあると同じく、その人には主義は性來あるが、それは云はゞ中和で消滅し、而してその人は人間でないかの如くに、正義を行ひ、自分のためではなく、只公の幸福のみを眼中におき得る様になる。どこでも王位には云はゞ人間以上の尊嚴を附與し、只の大統領などとは天壤の差がある様に之を區別するが、その起源は此にある。王者は世襲であるべく、選舉で擧げられるのでないのは此のためであつて、それに依つて何人も王と己れとを同等と思はず、又王者がその子孫のために計つても、その人は國家の幸福と自分一家の幸福とを全く一つとする様になる。こゝに云つた保護の目的より外の事を、國家にくつ附けやうとする者もあるが、それは却て眞の目的を危くするに當る。

第八章 意志の排斥に關する教

人間が生存し又人間たるのは、自分の意志で合意しての事か、然らずば合意なしでの事、若し自分の意志でないとすれば、悩みが多く又避けられない此の様な違々しい生存は甚しい不正義である。——古代の人、特にストア派や、又逍遙派とアカデミア派の人々

は、徳で人生を幸福にするに足るといふ事を證明しやうとして、而も彼等の意識には明に上らなかつたが、その本當の根底では、事物に正義があると豫定しての事であつて、罪科のないものは又悩みを離れ、幸福であるべきだとした。然るに此の問題を眞面目に又深く解釋したのは、善業で義とせられるのでないといふキリスト教の教である、それに依れば、人間はあらゆる正義や博愛、即ち善や正直を行つても、シセロもいつた如く（何人にも罪科なし）でなくて、「人の最大の罪はその生まれたといふ事にある」、此の言は、彼の哲學者よりも遙に深い認識から出、キリスト教に照らされた詩人カルデロンのいつた言である。此の様な譯で、人間は世界に生まれた時已に罪科を負ふて居るといふ事は、人間は無から始めて生じ、他の者に作られたとする人には、その氣に入るまい。この罪科はその人の意志から出たに違ひないが、その結果として、如何にあらゆる徳を修しても、人は身體と精神との悩みに曝されるのは正當で、従つて人は幸福ではない。此は久遠の正義から出た事、然るに、義とするのは善業でなく、我々は何れも本性から罪人であつて、又そのまゝにある、——それといふのは「行動は有より出づ」である故、即ち我々はなすべき通りに行ひ、あるべき通りにあるより仕方がない。さすれば、キリスト教のみならず、婆羅門教や佛教でも教へる如き解脱を最高の目途とする事は出来ない。然るに我々が今あるのはあるべからざるもの故、我々の爲る所は、必然又してならぬ事である。それ故、結果として解脱に入るには、自分の感覺と本性とをすつかり入れ換へて再生するを要する。罪科は行動にあるが、然も、罪科は我々の「本性と存在」にあり、此の方は必然行動を生ずる。その譯で、我々の唯一な眞の罪は宿罪である。キリスト教の神話では、此は人間が生存して後に始めて成立したものととして、そのために出来ない事に人には自由意志があるといふ作り事をいふ、然し此は神話としてである。キリスト教の最も内實の核實と精神とは、婆羅門教や佛教のと一つであつて、此等は何れも、人類がその生存のために直に重い罪科を負ふて居ると教へる、然るに眞實には、人間が成立した事それ自身がその自由意志の行動であり、そこで成立は罪惡墮落と一つである故、従つて人間の「本性」と「存在」と共に宿罪があり、他の罪は皆そのつゞきであるが、ユダヤ教の根本宗義は此の様に見るを許さない、そこでアウグステノが、その「勝手の自由」で説いた所では、單にアダムとして

の人間は、罪惡墮落の前には罪科はなく、自由意志を持つて居、それからして罪惡の必然性に纏ひつかれたといふ。

然し神話に拘はらずに云へば、我々の意志が同じである以上は、我々の世界も變らな
い。人々は惱みと死との状態を解脱する事を願ひ、通常の云ひ方でいへば、永遠の靈福に
入り天國に行くを願ふ、然しそこに行くには自分の足でせず、天然の經過でそこに持つ
て行かれたがる。然し此は出来ない事。それ故、天然は我々を亡ぼさず、無に歸せしめな
いが、然しどこへも持つて行かず、いつも再び天然に戻す。然し天然の一部として存在し
て居るのは工合が悪いといふ事は、何人も自分自らの生と死とで之を経験する。——かう
いふ譯で、何れにしても生存は迷ひと見るべきもの、それから立ち戻るのが解脱、而して
生存にはどこまでもこの性質（脱け出るといふ）がある。ユダヤ教ですら、少くとも罪惡
墮落、この様な見解の萌芽を含むで居る。ギリシヤの異教と回々教とのみは全く樂天的で
あるが、そのためにギリシヤの方では、その反對の方を少くとも悲劇で發露せざるを得な
い様になつた、又回々教はあらゆる宗教の中で最も新しく而かも最も劣等であるが、この

傾向はシュフキ教（毛布派）として現はれた、但し此の甚だ美はしい現象は、全く印度の
精神で又それから出たもので、今日も千年以來つゞいて居る。我々が生存の目的として
は、我々は生存しない方がよいといふ認識より他の事は無い。

そこで生きやうとする意志を全體に又客觀的に觀察して見れば、今まで云つた通り、そ
れは我々を妄想に陥れてをると領解すべきで、此の妄想から戻り、その現前の努力を全體
に擯斥するのが、即ち諸の宗教で自己拒絶として唱へるもので、本當の我れは即ち生きや
うとする意志なのである。正義や博愛など道德上の徳は、純粹なものは、生きやうとする
意志が箇別の原理を透見して、その一切の現象の中に、自分自らを再び見附けるから生ず
るのであるから、それ等は、何よりも先に、あの妄想の中に現はれて居る意志が、全く固
く縛られて居ないで、已に失望に這入つて來たしるし、證據である、それを譬喩的に云つ
て見れば、意志が妄想から飛び去るために羽打ちをして居ると云ひ得やう。その反對に、
不義、惡性、殘忍はその反對のしるし、深く深くかの妄想に捕はれて居るしるし。此等の
道德上の美德は、先づ自己拒絶を増進する方便で、それから生きやうとする意志を擯斥す

る方便。何故といへば廉直、即ち正義を固守するのは、第一で又最も肝要な根本美德であるが、その實行はむづかしく、絶対に又心底からそれを守る人は、生命の甘味、生命の満足を求めるものをその犠牲に供して棄て、それに依つて意志を生命から背き去らしめ、捨離に至る様にしなければならぬ。人生に伴ふ重荷と惱みとを除くに、不義の者は姦策か又は暴力で之を他人に負はせるが、正義の人はさうせず、自分に落ちかゝる害悪の重荷全量を少しも減ぜずに己れで荷ふ様になる。此の様にして正義は、生きやうとする意志の擯斥を増進する方法になる、即ち困窮と惱みとは人生の本當の天分であるが、それは正義の結果として出て來、それが又捨離に進ましめる。然しそれよりも速にそこに至らしめるものは、尙一層進んだ徳、即ち博愛であり、此に依つて元來は他人にふりかゝる惱みを、大部分は自分に受け持ち、恰も段々行末にはそれが自分の個體に落ちかゝるが如くする。この徳に入魂した人は、何れの他人にも自分自らの本性を認める。そこで生命とその快樂とに對する執着は早くに去つて、遍通の捨離が之に代はるべく、従つて意志の擯斥に進む様になる。正義はそれだけで、自分に不斷の惱みを與へる荒毛の下着であり、博愛は必要な

物を棄てるので、常住の斷食である。嚴酷で過度の禁慾は婆羅門教では大切な事であり、故意に苦行をする事になつて居るが、佛教では總て此等を取らないのは此のため。道德上の徳が連れて行く目途は、こゝに云つた如きものであるが、ヴェダーンタ哲學で、眞實の認識を得、それにつゞいて全くの捨離、即ち再生に入つた後は、今までの行狀の道德不道德は、どうでもよいとするのは至當で、こゝでも婆羅門が常にいふ格言の要がある、その言に「心の鎖を切斷しては、一切の疑惑は解け去り、かくてその業はこの最勝歡喜の中に消え行く」天上の褒美や地獄の罰といふ事を、人間の行爲を道德上に解釋するに一層満足な説明だと思つて居る人には、この見解は故障があるべく、又此の教を述べておきながら、それを忌避して居る善人キリシマンなどには尙更面白くなく、然し事柄の根底に入り得る人は、此れがつまりキリシト教の見解と一致するのを見るべく、特にルーテルが主張した教へ、我々が義とせられるのは行ひに依らず、罪の赦しは仲保者の功に依るといふに一致する。此く見なければキリシト教では萬人皆終りのない罪を彼り、婆羅門教では萬人皆終りのない轉生を経なければなら事となり、兩方共に解脱に到り得ないといふ

事は見易い。罪業とその結果とは、他人の恩恵でか、若くは自分の認識が妙境に達するかで、一方は之を盡し亡ほさなければならぬ、さもなくば世に救ひの望みはなくなる、然しその後には此等（業）はどうでもよい事になる。即ち道德上の徳は最終の目的でなく、それに至る階段である。この階段は、キリスト教の神話では、善悪の智慧の木を食つたにあると説ゆ、此に依つて道德上の責任と共に又宿罪も生じたといふ。此は即ち實に生きやうとする意志の主張であつて、その反對にその擯斥は、妙智認識の開ける結果として生じ、それが即ち解脱である。道德的といふのは即ちこの二つの中間の事で、意志の主張から擯斥に行く道に燈明となつて人を導くもの、然し佛教徒は全く正直にこの事柄を消極的にのみ云つて、此の世界、即ち「流轉」を拒否した「涅槃」だといふ。涅槃を單に虚無と定義するのは、流轉の世には、涅槃を定義し、又は組み立てる用に立つ分子は一つもないといふ事を云ひたいためである。

オルフェオやピタゴラスやプラトーンの如き古代の哲學者は、使徒パウロと同じく、心と身體との共同を嘆き、それを脱する様にと願つて居るが、この愁嘆は、その本當の眞意

義では、身體が直に意志であり、それを客觀に空間的の現象として直觀したものであるといふ事になる。

死の時に定まる事は、人間が天然の懷に歸るのか、若くは天然を脱け出でて……するか、この脱け出での状態については、形容も概念も言葉もなく、それを言はうとすれば只消極に否定でいふ外ない。それでも個體の死は、天然が生きやうとする意志に對して、その度毎に間をかけ、疲れもせず之を反復して、『それで十分じゃないか。お前はわしを脱け出たかないか』と問ふて居るのである。此の間ひが屢ばかけられるために、個體の生命はかくも短いのである。それ故、キリスト教では突然の死を逃れたいといふ祈りをする。然るに現在で突然の死を願ふ人が多いのは、彼等が生きやうとする意志を擯斥するキリスト教の立場に立たないで、異教的に之を主張する方に立つからである。

之に反して、自分は今已に無である事を認識し、従つて自分の個體としての現象に關心せず、認識が云はゞ意志を燃やし盡し、消し盡し、そこで個體としての生存を求め事はなく、意志が無餘になつた人、此の如き人は、少くとも死に對して恐れを抱かない。

又性格が個人的である限りは、個體性は又意志に着いたものであるが、然し性格は意志の擯斥と共に滅却する。即ち個體性が意志に着いて居るのは、その主張の方にあつて、その擯斥の方ではない。何れの行爲でも純粹に道德的ならば、それに聖境がついて居るが、それは結局根本では、一切衆生の内實本性は、數に於ても一つだといふ事を、直接に認識するから起るのである。而してこの同一性は意志擯斥の状態(涅槃)にあり、その主張(流轉)は意志が多數と現はれるをその方式とする。生きやうとする意志の主張、現象の世界、衆生の雜多、個體性、主我、憎み、悪性は、皆一つの根から生じ、その反對に、物自爾の世界、一切衆生の同一性、正義、博愛、生きやうとする意志の擯斥も亦一つの根から出る。道德上の徳は一切衆生が同一だといふ事を悟得するから生じ、而してこの同一であるのは現象の事ではなく、物自爾、一切衆生の根にある、そこで有徳の行ひは、生きやうとする意志の擯斥に依つて、永く歸るべき一點を一時に通過する事である。

今云つた事のつゞきとして云ひ得るのは、人間よりも一層完全な知能があるとする根據は少しもないといふ事。何故といへば、人間の知能だけでも、意志をして自ら擯斥し滅却

せしめるだけの知識を意志に賦與するに足り、さうなつては個體性と、それにつゞいて個體としての天性、動物性の道具たるに止まる知能は消えて行く。一切の物事の本性は根底に於て一つであるから、それ等を盡く認識しても、どうしても同じ事になる、そこで最も完全な知能があれば、この事を直に把むであらうが、一旦此く領解して見れば、その後に残るものは、無限の時間を貫いて反復又反復、それと退屈との外に何があらうか。此の方から見ても、何れの知能でも、その目的は只意志に對する反應に過ぎないといふ事にならなければならず、而して慾は何れも迷の路にあるもの故、知能の結局の仕事は、今までその目的のために働いて來たその慾を滅却するに歸着する。

此等の觀察で見、既に知つた如く、認識は元來意志から出て、その目的に使はれて、意志の主張の中に表はれるに反して、眞の救ひは意志の擯斥にある、此に一致して、何れの完教もその頂點では、神祕と密儀と、即ち玄妙と深密とに行き着き、此等は本當は認識にとつては空虚の場所、即ち一切の認識が必然になくなる點を指し示して居る、それ故、その場所は考にとつては否定でのみ表はし得、感覺の直觀にとつては表象的のしるしで、殿

54
51

堂の中の暗さや沈黙で記し得、婆羅門教では自分自らの根底に深く深く這入つてしまふためには、一切の考へや直観をも中止すべしといひ、神秘の「唵」を心の中に唱へる様にす。——神秘とは、最も弘い意味では、直観も概念も、即ち全體に認識の届かないものを直接に悟得する訓練を總て指していふ。神秘家と哲學者との分れるのは、彼れは内から始め、此は外から始めるにある。即ち神秘家はその内部で實證する人的の經驗から出、その中で自らを久遠唯一の本性であるとする。哲學者の出發點は、何れの人にも共通で、何れにも現前する客觀の現象にあり、又何れの人にもある儘の自己意識の事實にある。それ故その方法は、總て此等について考慮し、その中に現存する材料を配合するにある、それ故哲學者は人を首肯せしめる。根據を示し得ない所執は一切之を捨て、直観に現前する外界にあつて、それを會得するに當つて我々の知力を組み立てて居る方式に依り、並に一切の人に共通である己れの我れといふ意識の中に確かに示し得るもののみをその材料とする、是れが哲學の價値で又その尊嚴である。それ故、哲學は宇宙論に止まるべきで、神學になつてはならぬ。その題目は世界の上に限らるべく、世界は何物であり、最も深い内實で何で

あるといふ事をあらゆる方面から説き明かす、是がその正直にしてなし得る總てである。こゝでこの哲學が語り得るのは、否定し滅却せられる事のみであつて、それに依つて獲る所は、之を虚無として言ひ表はす要があり、それは相待の虚無であつて、絶待でないといふ慰めを附加しておくのみである。若し我々が知る事が總て無であるならば、それは我々にとつては全く無い事になる。然しそれであるからといつて、それが絶待に無であり、あり得るあらゆる立場から、又あり得るあらゆる意味で、無でなくてはならぬといふ事にはならず、我々がそれを認識するのは全く消極的に限られるといふに止まり、此は我々の立場に制限がある自然の結果である。——然るに此の點が即ち神秘家の積極的に試みる所で、それ以上には神秘の外に何物もあり得ない。そこで哲學のみで到達し得る消極的認識に加へて、此の類の補ひを求める人は、ウプネカトに於て、その最も美はしく又豊富な補ひを得べく、それからプロテノのエネアドや、スコト・エリウゲナや、又ヤコブ・ベームの處々や、又特にギユイヨン夫人の驚くべき著作「流れ」や、アンジエロ・シレシオや、その外シユフキ「毛衣派」の詩など澤山にある、シユフキの詩はトルツクがラテン譯とドイツ譯

とで詩集を出して居る。シユフキといふのは回々教中のグノシスであつて、サデは『見識に富むだもの』といふ意味の言葉でそれを譯して居る。有神教は一般民衆の力量に應ずるために、生存の源泉を我々以外にある客觀とする、神祕や、それから又シユフキ主義は、その神祕進境の段取りを踏むで、段々にこの源泉を己れの中に引き入れて主觀とし、その妙境に入つた者は、驚嘆と歡喜との中に、それが即ち己れ自らである事を認識する。此は總ての神祕家に共通の行き路であるが、ドイツ神祕の親であるマイステル・エツクハルトでは、それを完成した禁慾家に對する訓誡の形で、『その人は神を自己以外に求めず』として言ひ表はし、又その上に全くうぶな言ひ方で、エツクハルトの精神上の娘が此の變化を経て後に、親を訪ひ、歡喜の聲を發して、『君よ、我がために喜び賜へ、我れは神となりぬ』と云つたとしてある。シユフキの神祕がどこにも言ひ表はして居るのも、丁度此の精神の通りであつて、我れ自らが世界の核實、一切生存の源であり、一切は之に歸るといふ意識の中に耽溺するとしてある。それと違つて、印度人の神祕では、捨離を強く強く必要とし、キリスト教の神祕では此が主要になつて、そこで總て神祕の本性となつて居る彼の

萬有神の意識は第二の事になり、一切の慾を棄てさへすれば、その結果神と合一に到るとする。此の様に會得に差別があるため、回々教の神祕には快濶な特性があり、キリスト教のは陰鬱で手痛く、印度のはこの兩方以上に立ち、而して又その中間にある。

寂靜主義、即ち一切の慾を捨てるのと、禁慾、即ち自分の意志を故意に殺すのと、神祕主義、即ち自分自らの本性が一切萬物の本性と同一で、世界の核實であるとの意識と、この三つは密接に結びついて居るから、その一つを信奉すれば漸々に他をも容れ、自分は好まないでもその方に行く。——此等の教へを説いた著者が、その時代や國土や宗教の非常に相違つて居るに係らず、互に一致して居るのは實に意外ともいふべき程で、彼等は多くの内心の經驗の座りを説くに、磐石の安固と内心信實の安心を表はして居る。彼等は多くは互に相識らず、印度とキリスト教と回々教の神祕家や、寂靜主義者と禁慾家とは、總て相異なつて居るが、只その教への内心の意味と精神とに於ては異なる事はない。この點で特に目立つた實例は、ギユイヨン夫人の「流れ」とヴェダの教へ、特にウプネカットの文とを比べて見れば分かり、此は此のフランス文の書物の内容を極めて簡潔に言つて居るのみ

ならず、又全く同じ譬喩形容で之を説いて居るが、一六八〇年の頃にギユイヨン夫人が
ウブネカットを知つて居た事はあり得ない。又あの『ドイツ神學』で、惡魔の墮落もアダ
ムの墮落も共に、己れが、己れを、己れの、己れにといふ事があるとしたから出たとし、
更に云つて居る、『眞の愛の中には、己れが、己れを、己れの、己れに、汝が、汝のなど
いふ事は存せず』。此と同じ事を『クラル』の中には、『己れのといふ外に向ふ情熱と、己
れがといふ内に向ふ情熱は消え去る』といつて居る。又佛陀の言には、『我が弟子等は、
此は己れなり、此は己れの物といふ思ひを棄つ』とある。一體に、外部の事情から生じて
來る方式を外にして、事柄を根底まで探れば、釋迦牟尼とマイステル・エツクハルトとの
教へた事は同一であるを見るべく、只釋迦牟尼はその思想を眞直に言ひ表はし得たが、之
に反してエツクハルトはキリスト教神話の裝飾を着せて、自分の言ひ方をそれに適はせる
様にする要があつた。然し彼れにとつては、キリスト教の神話は只形容の言に過ぎず、殆
どギリシャの神話に對する新ブラトン派の態度と同じく、それを全く譬喩と見做して居
る。此の點で又注意すべき事には、聖フランシスが富貴の身を捨て、乞食生活をしたのが、

全く佛陀釋迦牟尼が王子から乞食になつた大回轉と同じく、又それに相應してフランシス
の生活とその教團とは全く一種のサマヤシン捨行者の風であつた。又特に記すべきは、
フランシスが印度の精神に近かつた事は、彼れが非常に動物を愛して、始終動物に交り、
彼等を兄弟姉妹と稱して居た、又彼れの美はしい(歌)は、日や月や星、風、水、火、地の
讚美であつて、その中には天性印度的精神を表はして居る。

その上又キリスト教の寂靜主義者は、彼等の間で互に知つて居たのは少く、又は全く相
知らず、モリノスとギユイヨンとはタウルルやドイツ神學を知らず、又ギヒテルは彼等を
知らなかつた。又その上に彼等の言ふ所がしつかりして安固であつて、その内部の一致が
著しいのは、彼等が實際内心の經驗から言を發するため、彼等の經驗は何人にも通ずる
譯には行かず、恵みを受けた少數者のみに得られるものであるから、それを恩寵の働きと
稱したが、それが實にさうであつた事は上に云つた理由で見ても疑ひない。人の事を判斷
するには、自分自ら之を悟らなければならぬ。そこで寂靜主義を識るには、マイステル・
エツクハルト、ドイツ神學、タルレル、ギユイヨン夫人、アントアネット・ブリニヨン、

イギリス人バンヤン、モリノス、ギヒテルなどを讀む事を特に勧める、それと共に、禁慾の極めて眞面目な實際の實證實例としては、ロイヒリンの出したバスカル傳と、そのボル・ロアイヤルの歴史も讀むべく、勿論此れで此の類の著しいものが盡く盡きたとはいへない。此等の書を讀むで、その精神を、婆羅門教や佛教に充滿してそのどこにも表はれて居る禁慾と寂靜主義とに比べて見れば、何れの哲學でも、そのつゞまりが必然に此の種の考へ方に背き、此等の人を詐僞者狂者の代表だと言はなければならぬ様なもの、此の故を以て必ずや僞哲學であるべしといふ事を許さなければならぬ。然しわしの哲學以外のヨロツバ學系は皆此の如きものである。此の如く出来る限りに非常に違つた事情と人物との間に、此くまでも一致があり、又その上に最も古く最も人口の多い地球の住民、即ちアジヤ全體の約四分の三が之をその宗教の主要な教としたものが、若し狂氣ならば、それは實に稀有の狂氣である。何れの哲學でも、此が問題である以上は、寂靜主義との題目を横に捨て、おく事は出来ない。而して現代人の判斷では、わしの哲學が奇妙にも又例のない程に、寂靜主義並に禁慾主義と能く一致する事が、即ち故障の種であるらしいが、それに反

して、わしは即ちそこに、此の哲學のみが正しく又眞實である證明があると思ふ、それが又新教主義の大學で、此の哲學を利口にも黙殺し、而して絞取り取る所以の説明になる。

嘗に東洋の宗教のみでなく、眞實なキリスト教も亦、徹頭徹尾禁慾を根本の特性にして居て、わしの哲學は之を明白にして、生きやうとする意志の擯斥だとする、但し新教主義、特に今日の姿では、此を隠さうと勉める。且つ最近の此頃に出て來たキリスト教の公然の敵は、その中にある捨離、自己拒絶、全くの貞潔、並に過度の意志滅殺の教へを、正當に『反宇宙的傾向』と名け、その教の存する事を示し、根本で眞正のキリスト教には此が固有の本性である事を根本から暴露して來た。此は確に正しい。然し彼等は此を以てキリスト教に對する公然明白の非難とするが、實はこゝに即ちその最深の眞理、その高尚な價值、その崇高な性質があるのである、彼等が此を見得ないのはその精神の曇つたしるしで、その由つて來る所は、此等の頭腦が不幸にも今日はドイツの中に幾千となくあつて、それがあはれはかないヘーゲル流、——此の平凡の學派、この無理會と無知との燒點、頭腦腐らせのこの僞智慧、——そのために全く腐らされ又段々にねぢ曲けられたにあるが、

此の偽智慧を今は漸く偽だと知り始めて、それを崇拜するのはデネマルクの學士院にのみ委せる様になるも近からうが、あの學士院ではあの無作法な野師を「最大の哲學者」と見て、そのために戰場に出て居る、所謂る、

「彼等は無智で愚な多數人に雷同し、その最も重きものを判者として、その信用と研究とに従はんとす。——ラブレ」

新約書の核家から出て、教父の著作に發展した、真正で元來のキリスト教に、禁慾の傾向があるは見紛ふべくもなく、此が即ち總ての上りつめるべき頂點である。その主要の教には、真正で純粹の獨身生活の勧めが已に新約の中に明言してあるのを見る。ストラウスも、その『ヤソ傳』に、マタイオ傳一九の一にある不婚の勧めに關して云つて居る、『ヤソが今日の考に逆ふ事を云つたとしないために、考へを押し込むで、ヤソは只その時の事情を考へ、又使徒の活動に妨げないために不婚を賞讃したのだと塗抹しやうとする者もあるが、然し前後の關聯で見ても、コリント前書七の二五以下にある類似の文よりも、その解釋を容れるは困難で、當時エツセネ派や又恐らくユダヤ人一般の中にも行はれて居た禁

慾的原則がヤソに現はれた一つが此にあるのである。——始めの間はキリスト教は尙信者を求めて居たから、此の要求を嚴に張り詰める譯に行かなかつたが、後には此の禁慾の方向に進み、三世紀に入つては、重く之を主張した。

婆羅門教や佛教と同じく、キリスト教の中に含むであるこの大きな根本眞理、即ち惱みと死とに捕はれた生存を解脱すべき要求と、意志を擯斥し、斷乎として天然に反抗して解脱に到り得る事と、此はあらゆる事の中で無比に肝要の大事であり、而かも同時に人類の天然のまゝの傾向に全く反對して居るから、それを眞實の根據に依つて把むのは難事である、此は總て只遍通抽象に考ふべき他の事と同様、人間の大多數には全く通じない。それ故、この大眞理を彼等の實用に適する様にするには、どうしても之を神話と云ふ乗物に乗せる要があり、云はゞ此は一つの入れ物で、それなくば眞理は飛むで消え亡せる。そこで眞理はどこでも作り話しの衣裝を借り、それと共に一度毎に歴史に出た事、已に知れ又今までから崇拜を受けて居る者に結びつく様にしなければならぬ。何れの時代、何れの國でも大多數の民衆は、心根が卑く、智力が鈍く、且つ一般に野獸性を帯びて居るから、本當

の意味では彼等に通じない事は、之を彼等の目星とするには譬喩の意味で實用に供しなればならぬ。然るに、どこまでも純粹な眞理の不壞の材料のみで出来て居ないものは、何物でも衰滅の虞があるから、此の様な入れ物が、別種の時代に觸れて衰滅に瀕する毎に、その神聖な内容は、何かの方法で他の入れ物に移して之を救ひ、人類の中に保存の出来る様にしなければならぬ。然し純粹の眞理と一つであるこの内容を、考へる力ある少數者に對して、純粹に、混合なしに、即ち抽象概念のみで、何れの乗物をも用ひず以示す、是れが哲學の職務。哲學と諸宗教との關係は、一の直線とそれに沿ふて走るいくつかの曲線との如きもので、宗教が蔽ひの下に示し、廻り路で到達するのを、哲學は本當の意味で語り、眞直に表はす。

今最後に述べた事を實例で明かにし、又同時に今日流行の哲學風に副ふて、キリスト教の最も深い祕密、即ち三位一體の祕密を、わしの哲學の根本概念に解剖して見やうと云ふ様な事を欲するならば、此の様な解釋には逃れ得ない割引を見た上で、次の如くにし得やう。聖靈とは斷乎として生きやうとする意志を擯斥する事、此の擯斥が具體に表はれて人

となつたのが即ち子。生命を主張し、それに依つて直觀のこの世界といふ現象を作り出す意志は父であるから、子は此の父と一つであり、主張と擯斥とは、この同一の意志がする反對の行動であり、兩方をなし得るこの能力のみが即ち眞の自由である。——但し此は單に巧智の戯れと見るべきもの。

この章を終るに當つて、「第二の道」といふ名で云つておいた事について實證を出した。第二の道とは、他人の認識を傳來して、それで人生生存の虚無であり悲痛である事を認識するばかりでなく、自分自らでつらい悩みを得て、それで意志の擯斥に進む事。此の様心が高まり、それに依つて生じた淨めが行はれるに當つて、人の内心に生ずる事を分り易くするには、情の激する人が悲劇を見て經驗する所に見え、悲劇は此と親縁のものである。此れは即ち同感が自ら知つて錯覺を起し、その弱い水色の中に寫すので、それと同じ事を自分自らの運命で感じては、現實の力で現はれ、その不幸が重ければ、終に人を全然捨離の港に追ひ込む。此等の進行で人が全く自ら轉換する變化が生ずるのである。